

---

# 夜と朝の狭間で

こみと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜と朝の狭間で

### 【Nコード】

N3386W

### 【作者名】

こみと

### 【あらすじ】

娼婦の母を持つ美奈は、男に振り回される母親を嫌悪しながら隠れるように生きてきた。

ある時、親友結香の家へ招かれて……

## 1 虫けら

### 一 虫けら

あたしはずっと『虫けら』だった。

なぜなら、母親が娼婦だったから。

あの小さな湊町では、娼婦が、そしてその父親の分からない私生児がどんな扱いをされるかは至って単純。蔑みと憐れみの的。それに尽きる。矢のように飛んでくる悪意を逸らそうと、あたしがいくらひっそりと目立たないよう行動しても、焼け石に水。無駄な努力だった。学校では嫌がらせを受け、近所からはいないものとして扱われた。勿論友達なんていやしなかった。

ママは始終男の尻を追っかけていて、あたしの存在を忘れることはしよっちゅう。あたしは六歳で丸一日半、家に置き去りにされた時から、自分の世話は自分でしないとイケないことを学んだ。最も大事なものは食料を確保すること。じゃないと飢え死にしただろうから。

皮肉なことに、あたしはママにそっくりだった。

ママは綺麗だった。クリーム色の肌は滑らかで染み一つ無く、日本人にしては色素の薄い栗色の髪は巻き毛で、瞳はこれまた珍しいしばみ色だった。目は猫のように妖艶で大きく、細身の身体のわりに胸だけは大きかった。つまり、男をそそる要素満載だった。そのくだらない要素全てが、あたしの外見を構成していた。あたしはまるでママのミニチュアだった。

十二歳になり初潮を迎えようとするあたしの身体は丸みを帯び始め、目立たないようという必死の努力の甲斐なく、クラスメイトの男子のみならず、ママの相手の男たちの興味までを引くようになってしまった。

学校は針のむしろになった。意味ありげな顔つきの男子達から野次

を飛ばされ、女子達からの嫌がらせは過酷さを増した。

帰宅すれば、ママの彼氏があたしの身体を舐めるような目つきで眺めた。怖気立った。だから、金物屋でお小遣いの中から買える一番頑丈そうな南京錠を買い、自分の部屋に取り付けた。そいつが家にいる時は、できる限り自分の部屋に逃げ込んだ。そこが唯一の安息所だった。

ママは自分の顔と同様に、あたしの顔も自慢に思っているようだった。

「あんたはホントにあたしにそっくりね、美奈。綺麗に産んでやったことに感謝してよ！あんたの人生、半分は勝ったも同然なんだから！」

それを聞いた時、あたしは思わず笑い出しそうになった。

勝ったも同然？ちゃんちゃら可笑しくて涙が出る。ママの人生のどこが勝ってるのか教えて欲しい。『こんなに綺麗に生まれたお陰で、男に体売ってとつても幸せです！』とでも？冗談じゃない。顔の美醜が人生における勝ち負けの基準だとしたら、そしてママのような生き方が『勝って』るのだとしたら、あたしはこの鼻を折って捻じ曲げてでも絶対『勝った』りしない。

あたしはママのようには決してなりたくなかった。ママの人生は、男がその価値を決めた。男が良いと言うものが良く、男の為に自分のやり方を変える。服装・メイク・髪型、終いには食べ物好みまで！男が全てで、男がいないとママは不安になる。まるで薬物依存者みたい。一人の男が去れば、別の男に代わる。そしてまた変化の繰り返し。服装・メイク・髪型……。

あたしはそんなママが嫌いだった。男に、それも身体しか求めていないような男に、自分の価値観の全てを預けるなんて本当に狂ってる。ママはまるで男達のペットのようだった。吐き気がした。お粗末で惨めな生き方だ。あたしは、自分の価値は自分で決める。絶対誰にもあたしの価値観に土足で踏み込ませない。あたしはあたしのものだ。

だから男なんか大嫌いだったし、男を寄せ付けてしまう自分の外見が大嫌いだった。こんな顔に生まれなくなかった。もっと地味で、誰の関心も引かないような姿だったら良かったのに。そしたら、誰からも無視されたとして、少なくとも平穩の中に身を置けただろうに。

あたしは自分の巻き髪をひつつめて堅いおさげにし、わざとワンサイズ大きい服を着て体の線を隠すようになった。ダサイ格好だというのは承知の上。服のセンスが無かったわけじゃない。可愛くてカッコイイ服は、見るのも着るのも大好きだった。それでも、他人の目を引かないためなら、雑巾だって着ただろう。

十五になった夏、ママの髪型が変わって、男がまた変わったのが分かった。それだけなら何も驚くことは無かった。けど、変わったのは髪形だけじゃなかった。勿論メイクでも服装でも食べ物好みでもない。生活全てが変わった。

その秋の日の夕方、学校から帰ると、おんぼろの賃貸アパートの中が空っぽになっていた。あたし達の荷物が全て無くなっていた。残っているのは備え付けの傾いた食器棚だけだ。

啞然とするあたしの頭の中で一瞬、ママがあたしを捨てて行ったのではないかというぞつとする考えが浮かんた。それは心のどこかでずっと脅えながら抱えてきた恐怖だったが、それでもあたしは毅然としてそれを振り払った。大嫌いだったけど、あたしはママを愛してた。その唯一の理由が、ママがあたしを愛してたから。常に二の次で、忘れ去られることも日常茶飯事だったけど、ママがあたしを邪険にしたことは無かった。ママは気が向けばあたしを抱き締めたし、頬ずりし、キスをした。ママの眼があたしに対して冷淡になることは決してなく、あたしに向けられる時はいつも温かな色が宿っていた。ママがあたしを捨てることは絶対に無い。

そうしている内に、ママが姿を現した。一目で上機嫌（有頂天と言ってもいい）と分かる興奮した様子でこう言った。

「ああ美奈！聞いて！もう貧乏暮らしとはおさらばよ！松平さんが

全て用意してくれたの！素敵なお家よ。すっごく豪華なの。引っ越すのよ！」

「ちよつと待つてママ！引っ越すって？どういうこと！？」

「松平さんよ！先週話したでしょ。彼があたし達に家を用意してくれたの！それにお金も！ママはもうあの忌々しい仕事をしなくていいのよ！」

松平氏の話しは聞いていた。ママがうつとりしながら独り言のように語っていた。それは男が変わるたびいつものことなので、あたしは小さなブラウン管のテレビでドラマを見ながらどうでもよく聞き流していた。確かすごい事業主で大金持ちとか言ってたのを、眉唾ものだと思ったのを覚えている。ママの男を見る目は、それまでのろくでもない連中を見れば分かるように、本当に当てにならない。「ねえママ、その松平さんって本当に信用できるの！？こんなことして、何かまずいことにでも巻き込まれたりしたら…！」

「大丈夫よ、馬鹿ねえ！彼の身元は確かよ。ちゃんとあの松平幸助よ！新聞でも週刊誌の写真でも確認したんだから！」

「松平幸助！？」

あたしは仰天した。

それはあたしでも知っている名前だった。

松平幸助。この町出身の名士で、若くして東京へ出、当時真新しくった携帯電話に目をつけ事業を立ち上げ、五十代半ばの今や業界の大手M&F（マツダイラ&フォスター）の最高経営責任者だ。この町にもその工場があり、多くの住人が良い条件で雇われている。地元の有名人の彼は、彼の家族を含め新聞や週刊誌によく取り沙汰されている。

その大物が、何故ママなんかと関係を持ったのだろう？いや、それよりも…。

「ママ。彼には奥さんも子供もいるのよ」

あたしが低い声で咎めると、ママは肩を竦めた。

「知ってるわ。でも彼は奥さんとはもう仮面夫婦だと言ってるし、

彼の息子はもう二十歳よ。立派な大人。彼がよそに愛人を作ったからと言って、傷つく年ではないわ」

愛人。

ママが平然と口にしたその言葉は、粟立つ皮膚と共に、重い衝撃となつてあたしの胸に圧し掛かった。

ママは松平幸助の愛人になつたのだ。

一介の娼婦に比べたらそれは物凄い出世なのだろう。でもあたしの中では激しい拒絶反応が起こつた。娼婦は平たく言えば仕事の一つだ。体を売ってお金を稼ぐ。あたしはママがそうやって稼いだお金で大きくなつた。嫌悪感はあるけど、受け入れざるを得ない真実だ。娼婦という職業は、職業である以上蔑まれはしても他人を傷付けたりしない。

けれど愛人は違う。相手の家族を何らかの形で傷つけるに違いない。そう思うと、喉の奥に何か硬い物が詰まつたように苦しく、いたたまれなくなつた。

「ママ、いい考えとは思えない。あたしは反対だよ」

あたしは懇願するように言つた。

ママは今までもくでなし共と付き合つてきたが、妻帯者はいなかったはずだ。それはママのポリシーなんだと思つていた。ママは軽率で無神経だけど、誰かを敢えて傷付けるような残酷さは持ち合わせていない。ここに来て妻帯者を選ぶなんて信じられない。しかもママは三十四で、松平氏とは親子といつてもいいほど年が離れている。

あたしの反論に、ママは呆れたように眉を吊り上げた。

「何言つてるのよ！美奈にとつてもこんないい話はないわよ？この町を引っ越して今までの嫌なことから自由になれるの！向こうではすつごくゴージャスな家が待つてるし、新しい学校だつて！松平さんが全部用意してくれたのよ！」

そう何度も『松平さんが用意してくれた』と喚かないで欲しい。あたしは苛立ちを隠そうと躍起になつて頬の内側を奥歯の端で噛ん

だ。鉄っぽい血の味が広がる。

「そりゃ魅力的だと思うよ。でも、松平さんの家族が……」

渋るあたしに、ママは切羽詰まった溜息を洩らした。せわしなく歩き回り、やがてあたしの方に身を乗り出して、あたしの両手をしっかりと握った。躊躇いながらママの顔を覗き込むと、あたしとそっくりの薄い色の瞳の中に、焦燥と困惑、そして不安があった。

ママ自身も戸惑っているんだ…。

「あたしがそれを考えなかったとも思う？彼の家族の不快を思うと、身を切られるような気がするわ。それでも……ねえ、美奈。あたしは彼が好きなの。彼といると安らぐって言うか、自由になれるって言うか…。今までこんな風に感じさせてくれた人はいなかったわ。彼といるのが、あたしの幸せなの。だからお願い。反対なんかないで」

そんな風に葛藤するママの姿は初めてだった。あたしは胸を衝かれた。ママは猪突猛進で不用意なティーンエイジャーのような人だ。感じた瞬間に行動し、後で必ずツケが回ってくる、そんな『の太くん』みたいなコミカルなタイプ。そのママがちゃんと考えた上で選択したのだと思うと、驚くを通り越して感動すらした。

そう思うと、これ以上反対することが出来なくなってしまった。でもそもそもあたしが反対したところで、ママは自分の思うようにしかない。あたしは十五で、まだママに振り回されるしか道はなかった。

あたしは血の味がする唾を飲み下してから、深く息を吸い、ゆっくりと吐いた。

小さい頃に見つけ出した、あたしの拒絶反応緩和方法。肺を大きく膨らませる圧迫感と、吐き出す筋肉の緩和の気持ち良い感触が、あたかもあたしの中に新たな受容場所を作り出しているみたいだ。ママが初めて帰って来なかった夜、知らない男の人がいきなり家に居た時、『来る』と言って来なかった学校の三者面談。込み上げるパニックを宥める為、何度も深呼吸を繰り返した。十五年の歳月の



中で嫌ってほど練磨されたおかげで、この方法は魔法のように効いてくれる。息を吐き終えたと、あたしは意識して全身の力を抜いた。強張った顔の筋肉を一気に弛緩して、パツと笑顔を作り出した。

「分かった。ママが幸せなら、あたしもそれでいい」

ママはあからさまにホツとした顔をして、いそいそとあたしの手を引いて外へ連れ出した。

アパートの駐車場には場違いなセダンの高級車が停まっっていて、ママが手持ちのキーでそのロックを解除したので、あたしは呆気に取られた。

「この車、ママなの？」

「そうよ。松平さんが買ってくれたの。さあ乗って！新しい家に行くわよ！今日から生活できるように、全部揃えてあるんだから！」

『松平さんが買ってくれた』

あたしはママのその台詞を、口に入ってしまった苦い砂のように噛み潰した。

ママはあたしの背中をぐいぐい押して車に乗せると、自分は運転席に乗り込んで、鼻歌を歌いながらエンジンをかけた。車は驚くほど静かに、滑るように進み出した。

あたしは不安に駆られた。

この車は滑らかに動くジェットコースターのようなのだ。あたしを乗せて、とんでもない恐怖の真ん中へとひっそりと運んで連れて行く。そんな妄想が、あたしの脳を蝕んだ。

\*\*\*

高速に乗って小一時間、降りて三十分ほどで、ママは車の速度を緩めた。あたしはいつの間にか眠ってしまったみたいで、ママの声で目が覚めた。

「美奈、もうすぐよ」

目をこすりこすり窓の外を見ると、陽が沈みかけていて、西の空が太陽の名残で黄金色に染まっていた。東の空には群青色の闇が迫っている。燃える金・オレンジ・赤・ピンク・紫・青・沈黙の濃紺：壮大なグラデーションは、西から東へかかる大きな虹だ。不思議で荘厳な光景。昼と夜の狭間。あたしはこの時間が好きだった。この空には、あらゆる色が溢れている。

「きれい……」

あたしはそつと呟いた。吐息に混じるくらいの声だったので、ママは気付かなかったようだ。あたしはママと自分の感動や感情を分かち合ったことが無い。ママどころか、誰とも。だから、自分の独白を誰にも聞かれないようにする癖がついていた。

「美奈、見て！あれよ、あの家！」

ママが弾んだ声をあげたので、あたしは仕方なく黄昏の空から目を引き剥がし、フロントガラスの奥を見やった。

閑静で新しい綺麗な住宅地。周りの瀟洒な家々の中の一つの敷地に、ママは車を入れた。駐車スペースはゆくに二台は止められる。

車を降りて家の外観を見上げた。

大きく美しい。明らかに有名建築家によって設計されたと分かるスタイリッシュなデザイン。ポーチに大きなオリーブの木がぬっと伸びている。その小洒落た異国の樹のくすんだ葉の色が、この建物とあたし達との違和感を象徴しているように見えた。

ママが無表情で立ち尽くすあたしの手を引いて中に入った。大きな玄関は天井の大きな窓まで吹き抜けになっていて、昼には陽の光りがたつぷりと入って明るく清々しいだろう。リビングルームはゆったりと広く、大きなプラズマテレビが座り心地の良さそうなソファの前に陣取っている。ダイニングテーブルは四人がけで、その先には機能的なオープンキッチンが覗く。

「お料理練習しなくちゃね！」

ママがいたずらっぽく笑ってウィンクしてきた。ママはほとんど

料理が出来ない。だから家事一切はあたしの担当だった。『これからは代わるとでも言うつもり？』皮肉っぽい台詞が浮かんだが、口には出すつもりは無い。それは単なる役割分担だと分かっていたから。ママはお金を稼ぎ、あたしは家のことをする。母子家庭では当然のことだ。

バスルームやサンルームをざっと見た後、二階に上がった。寝室は、ママの主寝室の他に四つあると言う。あたしは呆れ返った。

「ここ、ママとあたしだけで住むんだよね？」

「多くて困ることも無いでしょ？ あんたのは南側の一番日当たりのいい部屋よ」

ママは「こつちこつち」と言いながら、嬉しそうに一番奥の部屋へ進んだ。

そこは十畳ほどの広さの気持ちのいい空間だった。やんわりとしたクリーム色の壁紙に、大きな出窓。その脇にはあたしと同じ位の高さのしゅつとした葉っぱの椰子の樹がある。学習机は赤茶色のアンティーク風で、その上には最新型のパソコンが置かれている。なんだかちぐはぐだ。部屋の右側にクリーム色と渋いティーオレンジ色のカバーのかかったセミダブルのベッド。ベッドの反対側の壁は、一面クローゼットになっていて、開けてみると服が一杯かけてあった。どれも今まで触れたことも無いようなブランド物ばかりだ。

ここまで来ると、あたしはもう驚かなかった。ただ怖かった。快適な生活が送れると思うとホッとしたし、ありがたいとは思ったけど、行き過ぎた現実には罪悪感を強め、それを受け入れるしかない自分に嫌悪感を抱かせた。そして車の中で感じた得体の知れない恐怖は、じわじわと存在を強めていた。

「全部揃ってるから、このまま住めるわよ！」

ママがはいいだ声を上げた。

部屋の隅に汚いスニーカーがぼつんと置かれていて、その中に今までのあたしの持ち物が入っているんだと何となく分かった。多分ママが予め持ってきたんだろう。

あたしはあのスニーカーと同じだ。

薄汚れていて、ここには全然そぐわない。

そしてたったあの中に納まるだけの物で、あたしはここから飛び出していける。

そう思うと、呼吸が軽くなった。

## 2 結香

### 二 結香

当然のことながら、数日の内にあたしは転校した。中学三年生での他県への転校だったので驚かれたが、別に友達も居なかったため未練は無かった。

新しい学校はなんと私立で、あたしは転入のために試験を受けなくてはならなかった。学校ではただ黙って授業を受けているしかなかったため、成績はかなり良い方だった。難なく合格したけど、もしかしたら頭が悪くても入れたのかもしれない。後日、その学校に松平氏が多額の寄付をしていることが分かったから。

そこは中高一貫のお嬢様学校で、学校の隣には立派な寮もついていた。女子高と聞いて、あたしはホッとした。女子も男子も敵だったけど、少なくとも女子はあたしをいやらしい目で見たりしない。気を張らなくてはいけない方法が、一種類に減ったのは喜ぶべきことだ。

この学校でもあたしは浮いた。転校生だったから当然かもしれないけど、それ以前にあたしは他人への接し方を知らなかった。話しかけても芳しい反応を示さないあたしを、クラスメイト達は遠巻きに見るだけだった。

転校して一週間が過ぎた頃には、あたしに話しかける人は殆んどいなくなった。その方が良かったのでホッとしていた。一人がいい今までと変わらない待遇があたしを安心させる。

ところが、運命の日にはあたしのすぐ傍に迫っていたのだ。

あたしはその日のことは、全部クリアに覚えている。あれはあたしの人生の中で、最良の出来事の一つだと自信を持って言える。

その日の四限目は体育で、先生がバドミントンの練習にペアを組め

と言った。周りの子達が早々と組になっていく中で、あたしは黙って突っ立っていた。このクラスの人数は奇数で、あぶれるあたしはいつも先生と組むことになっていた。

「なあ、高橋美奈さん。あたしと組まへん？」

そう妙なイントネーションで声をかけてきたのは、背の高い、クリツとしたアーモンド型の目が印象的な女子だった。ポニーテールが良く似合っている。でも、今まで見たことが無い。

あたしはきつと怪訝な顔をしていたのだろう。その子は器用に右の眉だけを吊り上げ、茶化するようにニヤッと笑うと、あたしにラケットを差し出した。

「あたしを知らんって顔やな。でも一応クラスメイトなんやで。季節外れのインフルエンザで寮で寝込んだから、会うのは初めてやけどな。あたしは北川結香。よろしくな、転校生さん」

ぽかんとするあたしを尻目に、結香はさつさと配置について、あたしに向かってシャトルを打ち上げた。思わず反射的に打ち返すとしてやったりとばかりのニタリとした笑いを見せて、あたしにウイंकを寄越した。

「上手いやん」

からかうような口調だった。それが癪に障った。

運動神経はいい方だと内心自分でも思っている。体育で出来ないことは何一つ無かった。

でも、あたしのは単に小器用にこなしているだけだ。ずば抜けた運動神経の人間は身のこなしですぐ分かる。結香もその一人だった。振り下ろすラケットに向かって真っ直ぐに伸びた腕、腕に呼応してしなやかにしなる背筋、リズムカルなステップを踏む足。彼女の身体のパーツ全てが完璧な調和を持って、さながら音楽のように躍動する。

明らかにあたしより上手い彼女が褒めたことに、何故か屈辱感と自尊心を刺激され、滅多に無いことに、あたしはこの時攻撃的な気持ちになったのだ。

飛んできたシャトルをしっかりとフォームを作って本気で打ち返した。適当にやり過ぎて注目を引かないようにするなんてことは頭からすっかり消えていた。彼女を負かしたい！そんな挑戦的な怒りに駆られていた。

結香は目を爛々とさせていて、喜々としてそれに応じているように見えた。

打ち合いは次第に熱を帯び、打ち出されるシャトルは勢いにテクニカルな緩急がついた。それでも何とか相手の打ち易い球を保っていたのが、ついに結香が手首のスナップを利かせた激しいスマッシュを繰り出したことで、練習は完全に試合と化した。鋭い攻撃と手堅い防御が戦略的に繰り広げられ、ステップのスピードが跳ね上がる。一步も引かずのラリーは白熱し、お互いの動きとシャトルの行方の方に神経が集中する。その外のことは、一切視界から消えた。あたしは自分の荒い息遣いと、身体が発する熱と、そして大量の汗が服の中を伝うのを感じた。アドレナリンが流れ込み、熱く滾った血が全身を駆け巡る。

爽快と興奮。

それまで感じたことのない快感だった。

受け切れなかったシャトルがあたしのラケットをかすって床に落ちた。

「おっしやあ!!」

結香が雄叫びを上げて力強くガッツポーズを決め、あたしはがっくりと膝について四つん這いになった。

「ああーーーーっ!!ちくしょーーーー!!」

自然と叫び声が出た。叫んだことなんか一度も無かったし、こんな口汚い言葉を使ったのだって。でも身体はくたくたで、そんな自分に驚く余力は残ってなかった。

「……きもちいい……」

あたしは目を瞑って呟いた。

「そやる。あたしもやわ」

すぐ近くで独白に答える声がして、パツと目を開けると結香が隣に来て座っていた。

「なかなかやるな」

しれつと言うので、あたしはブツと吹き出してしまった。

「よつく言うわね！」

あたし達は顔を見合わせて、同時に笑い出した。お世辞にも上品とは言えない、ぎやはははは！っていう笑い方で。

お腹の底から笑う。

そんな初めての経験と一緒に、あたしは親友を得たのだ。

\*\*\*

北川結香は言ってみれば随分とぶっ飛んだ人物だった。

本人は全く意識していないようだったが、とにかく目立つ。標準語の中でただ一人頑固に方言を使っているのも異彩を放っている理由の一つだが、何よりも彼女は人を惹き付けるカリスマ性を持っていた。百七十センチ近くあるスレンダーな体にボーイッシュな美貌で、一見気さく（と言うより、あたしに言わせればちゃんぽらん）に見える行動は緻密に計算されていて、何をやっても憎らしいほど完璧にこなしてしまう。学年トップの座を誇り、新体操部のエースで、前生徒会長という華々しい肩書きを持ち、中等部の注目を一身に受けている生徒だった（女子校ではありがちなことに、一部の生徒からは『オスル様』と呼ばれ、崇拜すらされていたようだ）。それくらい人を惹き付けてやまない魅力を持ちながら、結香は決して人に群れなかった。人だかりを自ら作るくせに、ニヤリと皮肉気に笑ってするりとそこから身をかわす。自分だけのテリトリーを保ち続ける孤高の獣のようだった。

その彼女のひととの距離が、あたしには丁度良かったのだと思う。



最初のバドミントンの勝負から、結香はあたしと行動するようになった。高慢な言い方になるけど、最初はどちらかと言うとあたしがそれを許したと言っても良い。それまでのあたしは警戒心が強過ぎて、いくら快感を分かち合った相手とはいえ、自分の傍に誰かがいるって状況にどうしても慣れなかったからだ。

結香はあたしが神経過敏になっっているのに気付くと、すぐにあたしとの距離を大きく取った。あたしが息苦しくない距離を測り、それでも離れようとしなかった。自分でも驚いたことに、あたしは彼女が離れなかったことを心から喜んだ。

あたし達は互いに慎重に窺いながら、徐々に距離を縮めていった。今思えば滑稽なほどに時間と神経を費やしてしまったが、それだけの価値はあった。多分結香にとっても。結果、あたし達はお互いの間に殆んど距離が無いほど近づくことが出来たのだから。

勿論、あたしの、そして結香の性格からして、あたし達の関係はベタベタしたものじゃなかった。もっとシンプルで、必要な時だけお互いが在る、そんな感じ。あたしは依然として結香以外の人間とは関わらず、結香はそれに准ずることも無く、例のごとく飄々と群れの中心にいたりすり抜けたりをしていたが、何となく気が付くと一緒にいる。誰かがあたし達のことを『熟年夫婦』とからかって呼んだことがあったが、確かにそれに近い（熟年にはまだ達したことはないけど）。

あたし達はアイデンティティのあり方が根本でよく似ているに違いない。

半年も経つ頃には、あたしの中に結香の定位置が設けられて、そしてあたしも彼女のテリトリー内の存在になっていた。

結香の『相棒』とされたあたしは、何故か周りから一目置かれる存在となった。確かに勉強も運動も結香とは好敵手だったけど、今までそんな出る杭は打たれる要素でしかなかったから、評価されることになるとは思ひもなかった。友達で自分の評価が変わるということに反感を覚えたし、今更他人にどう思われようが関係ないと言

いたかったが、疎まれることも無く嫌がらせされることも無い平穏な環境には、正直安堵を覚えずにいられなかった。

ある日、結香がニヤニヤ笑いながらやって来て、あたしの掌にポンと可愛い包み紙にくるまれたものを置いた。

「ホレ、ハシミ（タカハシ・ミナの真ん中を取って、彼女はあたしをこう呼んでいる。素直にミナを取らないのが如何にも彼女らしい）」

「何？ またもらったの？」

『オス ル様』な彼女は後輩達から習慣のように手作りのお菓子をもたらっており、あたしはそのご相伴預からせてもらっていたので、今回もそれだと思ったのだ。

彼女はあたしの問いに、例の右の片眉だけを吊り上げる、斜に構えた笑みを見せた。

「いや、コレはハシミにやって。あたしは渡してくれて頼まれただけや」

「あたしに!？」

驚愕して左手の中のピンクの物体を凝視した。

何の意図があるのだろうか!？

結香ファンのやつかみを買ってしまったか？

お菓子の中に針とか毒とか入ってたのか?!

邪念に苛まれて戦々恐々とひたすらに硬直していると、結香が呆れたようにあたしの肩を小突いた。

「何を石になつとんのや。可愛い後輩がくれたんや、開けたりい」

このピンクの物体一つに脅えていると思われるのは癪だったので、おっかなびっくり包みを開くと、中にはこれまたピンクのアイジングとアラザンで派手にデコレーションされたカップケーキと、ハート型のカードが入っていた。

『麗しのマリー様へ』

書かれた丸文字に呆然と見入る。

「…マリー様って…」

「マリー・アントワネットやるな。あたしがオスルやから」

「誰が？」

「当然あんたやるな。コレはあんたへのプレゼントなんやから」

「……あたしがマリー・アントワネット……」

「これからはパンが無けりやお菓子を食べんとあかんのやるなあ」

結香がさも同情するように首を振りながら言ったが、口元がピクピクしているので笑いを堪えているのが丸分かりだ。

あたしがキツと睨み付けると、それを合図に結香がブーツと吹き出した。お腹を抱えて笑い転げる。

「結香！あんたのせいだ！とんだとばつちりを！！」

憤慨して見せたが、あたしもついに我慢し切れなくなって笑い出した。

「あたしの気苦労がコレで分かったか！」

結香が引きつる声で言つて、あたし達は二人で涙が出るほどゲラゲラ笑い合った。

かの名作漫画のキャラクターに例えられては、毎回何とも言えない困惑した表情を浮かべる彼女の気持ちがよく分かった。見栄えはいけど堪らなく着心地の悪い服を着せられて、豪華だけとにかく座り心地の悪い椅子に座らせられているような、そんな気分。嫌じやないけど、いたたまれない。うん、『いたたまれない』、これは正鵠を得た表現だ。

笑いの発作がおさまった後、あたしはカードをしげしげと眺めて溜息を吐いた。

「せめて『アンレ』にしてくれば良かったのに」

マリー・アントワネットは顔だけが取り得の傾国の美姫だ。あまりにもママを髣髴とさせ過ぎる。

すると結香がギョツとした顔で言った。

「あかんよ、そんなん！そんなことしたらあたし達は恋人同士になつてしまうやろ、気色悪い！それに『アンレ』には、ハシミは背えが足りひん」

確かに。『オスル』よりも背の低い『アンレ』では様にならない。

あたしはフンと鼻を鳴らしてカップケーキに噛り付いた。

アイジングたつぷりのケーキは、頭が痛くなるほど甘かった。

### 3 妊娠

#### 三 妊娠

その年の冬が過ぎ、あたしが義務教育を終えようとする三月、ママが妊娠した。

父親は言うまでもなく松平氏だ。

ママが嬉しそうにバッグの中から何かを取り出す。

「これ、赤ちゃんのエコー写真よ。まだ二ヶ月だから黒い丸にしか見えないけど」

ダイニングテーブルの上に置かれた白黒の写真を、あたしは遮二無二見詰め続けた。そうすればあたしの眼力でそれが消えて無くなるかのように。

あたしは震える手で目の前の皿を押しやった。食べかけのカレーはもう一口も入りそうに無かった。もうカレースプーンを持っていなかったが、その写真を手に取ることはできなかった。

「知ってるの？このこと、松平さんは」

あたしは聞いた。声が上擦ったけど、構ってられなかった。

ママは自分の皿をシンクへ下げる為に立ち上がりながら、僅かに首を傾げて言った。

「勿論。認知もしてくれるって」

あたしはテーブルに両肘を立てて、ゆっくりと頭を倒して両の掌で受け止めた。そうしないと眩暈を起こしかねなかった。

それがどういふことか、ママは分かっているんだろうか？

愛人という立場だけでも厄介なのに、その子供となると……。松平家の、取り分け奥さんの怒りと苦悩を思うと、どこかへ逃げ出したくなった。息子さんもだ。自分の母親が産んだのではない、半分以上だけ血の繋がった弟か妹が知らない所で増える。屈辱を覚えるに決まってる。あたしならきつとそうだ。そして彼らの怒りの矛先は、

ママやあたしだけじゃなくお腹の子供にも向けられるだろう。何の罪も無い、赤ん坊に。

あたしは胃がキリキリと痛み出すのを、他人事のように感じていた。あたしはいつから自分の苦痛をこんな風に遠くから受け止めるようになったのだろうか？

「やめて。ママ。お願いだから産まないで」

あたしは搾り出すように言った。

自分と同じ境遇の子が生まれるのだ。その繰り返しを見るなんて、あたしには耐えられない。

ママはぶたれたみたいなお顔をして、弾かれるように顔を上げた。どうしてそんな顔が出来るんだろう？ママには何故分らないんだろう？

「酷い子ね。喜んでくれないの？」

ママが詰った。あたしは泣きたくなかった。熱い衝動が込み上げてきて、気が付いたらママに向かって怒鳴っていた。

「喜ぶ？あたしみたいに惨めな思いをする子供が増えるのを、喜べって言うの！？」

あたしは噛み付くように叫んで、目を見開いて立ち尽くすママを置いて自分の部屋に駆け込んだ。

後ろ手にドアをしっかりと閉めると、あたしは物心ついて初めて、大声を上げて泣いた。

どのくらいの時間が経ったのか、一瞬分からなかった。あたしは泣きながらベッドに突っ伏して寝付いてしまったようで、躊躇いがちなノックの音で目が覚めた。

「美奈？」

ドアを通してぐもったママの声がした。

あたしは一瞬子供っぽく無視しようかと思ったけど、やめた。馬鹿みたいだ。

ママを傷付けたところで、お腹の命が消えるわけじゃない。

「何？」

「……ごめんね、美奈。酷い母親で」

あたしは今度は返事をしなかった。

その通りだ。ずっとそう思ってきた。ママのこと、母親だなんて思いたくなかった。でも、だからって謝られて、あたしにどうしろって？ 謝られても困る。謝ってほしいんじゃない。

でも、一方でそんなことを言わせてしまった自分にも腹が立った。ママはどう転んだってママだ。あたしはママの一番じゃないけど（もしかしたら五番ですらないかもだけど）、愚かで不器用なりにあたしを愛してくれているのだ。世の中には親に虐待されて死んでいく子達もいるのに比べたら、あたしはずっと幸運だ。そうでしょう？  
そして、あたしはきつとママを愛してる。

「美奈？」

またママの声。

「うん？」

「あのね、あたし、この赤ちゃんを産みたいの。だって、こんなどうしようもないあたしの所にも来てくれたんだもん。……赤ちゃんってね、お腹の中でモゾモゾ動くの。あんたもお腹にいた頃、一生懸命『ここにいるぞ！』って主張するみたいに動いたのよ。そんな時、あたし一人じゃないんだ、この子がいるんだって思えて、泣けるくらい幸せだった。美奈が産まれた時、やっと会えたねって本当に嬉しかった。この子も、同じよ、美奈。生きていて、ここにいて、一人じゃない。産まないでなんて言わないで……」

あたしは言葉がすぐに出てこなかった。頭が真っ白になって、それなのに不思議と落ち着いていた。一拍の間が置いて、言葉がするりと口をついて滑り出た。

「ママ、あたしを堕ろそうと思ったことはなかったの？」

それは一度も聞いたことの無い質問だった。ずっと疑問に思ってきたけど。

天涯孤独で施設で育ったママは、十八で身籠って相手の男に捨てられた。十八だ。あたしに毛が生えたようなもんだっтарう。それなのに、お腹の中の、どう考えてもお荷物にしかないものを、何故産んだりしたのか。

いつそのこと生まないでくれたら良かったのにと、捻くれた考えを抱いたこともある。でももしあたしが心底からそう思っているのなら、とつくに自ら命を絶っていたはずだ。そうしなかったのは、あたしが生まれたことを本能的に後悔していないからだ。

「そんなこと、一回も考えたことなんか無いわー！」

ママがビクリするほど大きな声で叫びながら、あたしの部屋のドアをドンッと叩いた。続けざまに何度もドアを殴っているのだらう、ドンドンと太鼓のようなリズムで振動が響く。

「一回も無いわよー！！美奈！あたしはあんたを授かって後悔したことなんて無いー！！」

ヒステリーを起こしかけている。

あたしは呆気に取りられ、それから笑いだした。

そうか。

ママはあたしを望んでた。

身を包む柔らかなベールのような安堵感があたしに広がった。

望まれて生まれた。

それは、あたしの存在を許す唯一つの証のように思えた。

あたしは生きていて、ここに存在していて、それでいいのだ。たったこれだけの事実を、自分がどれほど切望していたのか気付いてもしなかった。子供だったのだ、あたしは。実際まだ十五歳でしかなかった。

あたしの笑い声を聞いて、ママはドアを叩くのをやめた。

ドア越しに向かい合ってしばらく佇んでから、あたしはそつとドアを開いた。ママが傷ついた表情であたしを見ていた。

「妹か弟が出来たら、あたしが名前を付けてもいい？」

あたしは言った。



ママは間誤付いた顔をしたが、それからホッと息を吐き、肩の力を抜いて答えた。

「勿論よ！」

ママは変わらないだろう。きっと今まで通りだ。

それなら、あたしがこの子を育てよう。

あたしがこの子の母になるんだ。

## 4 翼

### 四 翼

高校生になった。と言ってもエスカレーター式なので大した感慨も無かったけど。それでも受験して高校から入学してくる外部の子達もいたので、入学式はそれなりに粛々と行われた。

父兄を伴って門の前にたむろする人ばかりを眺めながら、あたしは桜の樹の下をぼんやりと歩いていた。暖冬だった影響か、四月の桜なのに三分咲きだ。

「ハシミー！」

呼ぶ声がして振り返ると、結香が大きく手を振りながら駆け寄ってくる場所だった。後ろには彼女に良く似た長身の男の人を従えている。親類には違いはないだろうが、父親にしては若過ぎる。見たところ二十代前半くらいだ。

「結香。入学おめでと」

あたしのシニカルな口調に、結香もニヤリとして応じる。

「あんたもな。ああ、コレ、あたしの下の子貴の北川宗司。今日ウチの親仕事で来れへんからって、無理矢理遣されたらしいわ。来んでもええって言うたんやけどな。兄ちゃん、コレ、あたしの親友のハシミ」

紹介された結香の兄は、にっこりと笑って礼儀正しくあたしに右手を差し出した。

美形の結香の兄だけあって、とてもハンサムだ。結香が女にしては鋭さのある美人だとすれば、宗司さんは男にしては優雅な美青年だった。収まっている顔のパーツがほぼ同じものののに、男女の違いで受ける印象が正反対になるのはとても興味深い。

「よろしく、ハシミちゃん。お噂はかねがね伺ってるよ。ウチのは

ねっかえりと仲良くしてくれてありがとう！」

あたしがぎこちなく右手を重ねると、彼は温かい手でぎゅっと握り返した。

「いえ、こちらこそお世話になってます」

あたしはいつもの作り笑いを浮かべて慇懃に言った。

すっかり気を許した結香のお兄さんとはいえ、男には未だ抵抗がある。身体が条件反射のように緊張してしまうのだ。

あたしのしゃちこばった態度を崩そうと、結香がすかさずちょっかいをかけてくる。

「そおやでー！あたしはお世話してやっとなのや。感謝しい、ハシミ！」

「ね、社交辞令って言葉知ってる？」

「若いモンが『社交辞令』とか爺むさい四文字熟語体现しなやー、全く！」

「あんたはさしずめ『傍若無人』かな」

「『枯木寒岩』！あんたの脳年齢は絶対傘寿を超えとる！」

「『饒舌多弁』」

あたし達がいつもの丁々発止のやり取りをしていると、隣で突然大爆笑が起こった。宗司さんがひーひー言いながら抱腹絶倒している。

「すげえ！！何その激レアな四文字熟語、どこで覚えんの！？結香とまともにやりあえる女の子、初めて会った！ハシミちゃんサイコ！！！」

あたしはあんぐりとしつつも、珍物扱いされて皮肉を返さずにいられなかった。

「それ褒めてませんよね？」

「どういう意味や、ハシミ」結香が低い声で口を挟む。

「ひやははは！あ、いやいや、褒めてますよ勿論！愚妹にいい友達が出来て本当に嬉しいよ！」

クックククと堪えきれない笑いを洩らす様子は、忌々しいほど真

実味がない。

「『拳動不審』!」

あたし達が声を揃えて指をさすと、宗司さんはまたもや呵呵大笑した。あたしは可笑しいやら呆氣に取られるやらで緊張も吹っ飛んだ。大人の男の人がこんな風に転げまわって笑うのなんか、初めて見た。

宗司さんはもう自分でも笑いの発作をコントロールできないらしく、最後には

「も、もうやめて!悪かった!」

と途切れ途切れに懇願する始末だ。

「あたしら別に何もしてないやろ。全く二十一にもなるのに、アホやな、宗兄は相変わらず。そんなんであの大学で浮いとんのじゃないの?」

結香は腰に手を当てて、生意気そうに口をへの字に曲げた。

すると宗司さんがムツとした顔を作って、皮肉気に右の眉だけ上げた。

驚いた。こんな普通じゃない癖まで一緒なんて。だって片眉だけを上げるなんて芸当、揚げ物惣菜と同名の某有名モノマネ芸人でもなけりゃ、簡単にできるもんじゃない。眉毛は普通両方上がる。

DNAってのは驚異だ。

「失敬だな、妹よ。お前の兄は大学でもかなりの人気者だ。案ずるな」

「自分で言うか普通」

兄妹の会話を聞いていて、ふと感じた違和感の原因を見つけて、あたしは思わず聞いた。

「お兄さんは方言を使わないんですね」

結香は故郷三重県の方言を貫いているのに対して、宗司さんは標準語を使っているのだ。

あたしの問いには結香が飛びつくように答えた。

「そっなんや!このアホ兄は東京の大学に入った途端、三重弁使わ

んくなつてしまつてな！全く不甲斐ないと言つか薄情と言つか！」

噛み付くような物言いに、宗司さんが怒り出すのではとあたしは危ぶんだが、彼は困つたように妹の頭をポンポンと叩いただけだつた。そして今度は三重弁で語りかけた。

「アホか！郷に入れば郷に従うのが大人ちゅうもんや。不甲斐ないとか薄情とか言つとる間はまだ何も分かつとらん証拠や。お前はもうちよい柔らかさを身に着けんとあ、そろそろ。一徹も大事やけど、硬いだけじゃポキンと折れるのが関の山やで」

微笑みながら妹を見詰めるその瞳は、ただ穏やかで優しくかつた。

あたしは憧憬に胸がきゅつとなるのを感じた。あたしが欲しかったものがそこにあつた。彼の視線や仕草にあるのは、愛だ。何があつても揺らがない、懐の大きな愛情。

結香に強い羨望を抱いた。羨ましかつた。血の繋がりがあるといふだけで、無条件に愛される。そのありがた味を、彼女は分かっているのだろうか？あたしがもし彼女の立場なら、それを何よりも大事にして絶対無碍にしたりしないのに。

宗司さんへの思慕は、この時に芽生えた。

彼のような温容で大きな愛情を持てる人間になりたいと思つた。

彼を目標に生きれば、あたしもいつかそういう愛を手に入れられる気がした。いや、絶対に手に入れなくてはならないのだ。

今年の秋には、あたしの弟か妹が生まれるのだから。

あたしは彼のような愛情で、その子を包んでやるのだ。目一杯愛して、絶対に寂しい思いをさせず、満たしてやりたい。そしたらその子はきつと、結香のように鷹揚で快活で誰からも愛される子になるのだ。

あたしは夢見るように思い描いたその光景を、脳裏に強く焼き付けた。

\*\*\*

四月の終わりになって、ママの悪阻がだいぶ治まってきた。

それまでは見るもの食べるもの全て吐くので、もともと痩せ型だったママの身体は、骨と皮だけになってしまい、あたしはかなり心配した。医者につき添って行って話まで聞いたが、通常の現象だから心配なくて良いと言われただけだった。

「まあ、戦争中は悪阻なんかなかったそうですからね」

とその医者が嫌味っぽく言ったので、ママは怒り狂って即座に産婦人科のかかりつけを変えた。

「あのクソ爺、男のくせに何が分かるってのよ！悪阻になったこともないくせに！冗談じゃないわ！」

家に帰ってもブツブツ言うママを休ませるために、宥めながらベツドに追いやった。この時ばかりはママの言い分が正しいと思った。

病院を変えたママの決断は正しい。あのハゲは産婦人科を辞めて麻酔科の医者にもなるべきだ。

ご飯を炊く匂いだけで気持ちが悪くなるというので、主食はもっぱらパン類になっていた。何種類か試した結果、何でもない食パンが一番喉を通るようだった。あたしは決して偏食ではないが、さすがに三ヶ月の食パン攻撃には気が滅入っていたので、悪阻が治まってくれたことをらしくもなく神様に感謝した。

ママの気分の良さそうな日を見計らって、久々に白米を炊いた。ママの好物の茶碗蒸しと銀ダラの味噌漬けも作った。悪阻が酷かった時も食べられた、柚子を利かせたキュウリとわかめの酢の物もある。あたしの料理はN Kの『今日 料理』が基本だ。学校から帰ってすることもなくテレビを見ていてその番組を見つけた。折角なら生産性のあるものとそれを見ている内に、作り方を覚えて実践するようになったのだ。だから料理をしない親の子であっても、かなりの腕はあると自負している。

夕食の支度ができたので呼びに行こうとしたら、ママの方からダ

イニングへ降りて来た。

「ああ、いい匂い！美味しそう！」

ママがうつとりとダイニングテーブルの上を眺めた。顔はまだ青白いものの、食べ物匂いを嗅いで気分が悪くならないのは久し振りだったので、あたしはホッとして笑った。

「良かった。食欲が湧いて来たみたいね」

「あたしの好物ばかりね！ありがとう、美奈」

「胃がビツクリするから、少しずつ良く嚙んで食べてね。残していから無茶しないで」

あたしが柔らかに炊いたご飯を差し出すと、ママは上目遣いにこつちを見て恥ずかしそうに言った。

「ごめんね。なんだかあたしが美奈の子供みたい。世話を焼かせるばかりで」

あたしは鼻を鳴らした。

「今更何言ってるの」

「ありがとう」

「わかってる。ほら、冷めない内に食べて」

ママのお腹の赤ちゃんを認めて以来、あたしのママへの無理難題な願望のようなものは消えてなくなった。不思議なことに、赤ちゃんを含めてママを守るのはあたしの役目だと思った。今までは、自分をママに守って欲しいという欲求を感じることはあっても、逆なんて思いもしなかったのに。

赤ちゃんの存在が、あたしの何かを変えたのだ。

あたしは強くなれた気がしていた。今までよりもずっと。この家の中に居ても、息をするのが少し楽になったようにすら思えた。

ママは良く食べた。頬には赤みが差して、顔色がぐんと良くなった。

四ヶ月目に入るママの腹部はまだ平たいままだったけど、これだけ食べられればどんどん大きくなるだろう。いつの間にか赤ちゃんを心待ちにしている自分がいて、あたしは苦笑した。『墮ろして欲

しい』とまで言ったくせに。

あたしにはもう既にその子を愛し始めている自覚があった。

何しろ、その子のために手作りのテディベアまで作っているのだから。

このあたしが手作りのテディベア！

そんな感傷的なことをしようなんて自分でもビックリだったけど、でもやったからって誰バチは当たらない。だって赤ちゃんはあたしみたいに捻くれてないはずだし、そういう感傷的なことをしてもらう権利があるはずだ。ママがしない以上、あたしがその役をやらなくちゃ。

何故テディベアかというのは、赤ちゃんが生まれると、その子の産まれた時の身長と体重と同じ大きさのテディベアを贈るという記事を、ネットで見たことがきっかけだった。ウエイトベアと言うらしい。お腹の中の赤ちゃんが望まれて生まれて来るという証を示してやりたくて、でも絶対松平氏のお金で買う以外のものを贈りたかったので、あたしはこの案に飛びついた。

テディベアは、中学の時に家庭科で一度作ったことがあった。小さな布切れがパズルのピースのように形作っていく工程はとても面白かった。針をちくちくとやる細かで単純な作業は、余計なことを頭から追い出すのに都合よく、また自分で物を作り出すという作業はあたしの自己満足を大いに満たしてくれた。要するに、それはとてもあたしに向いている作業だったのだ。

思い立つといてもたつてもいられず、あたしは学校帰りに手芸用品店へ行き材料を買い込んだ。プレゼントにするテディベアは生まれてからじゃないと作れないが、練習して悪いことはない。一旦作業に取り掛かると、あたしは没頭してたつた二日で一体仕上げた。出来は完璧とはいい難かったが、ともかく作り上げたことにあたしは満足した。

一体終わるとまた一体…と、あたしは取り憑かれたようにテディベアを作っていた。数をこなすごとにデイトールにこだわり、



これまた手作りの洋服や小物といったオプションがつくようになった。

あたし、かなりの凝り性だったんだ。

そんな自分に対する新たな発見もあったり。

作った数が二桁になる頃には、あたしは学校にまで道具を持ち込んで、休み時間にせつせと針を動かしていた。

結香は動物園のサルでも見るようにあたしを眺めて、

「また珍妙なこと始めたもんやなあ」

と呟いた。好奇心旺盛な彼女は、「そんな面白いんか？どれ、あたしにもやらせてみ」と針を取ったも、ものの三十分でさじを投げた。

「あかん。無理や。こんなちまつとした細いことやつとれん。向いてへんようや」

あたしは笑った。やらせてみるまでもなく、結香には単純な手作業は向いてない。彼女は鷹揚で軽率ではないが気が短いのが欠点だ。同じクリエイティブな仕事でも、すぐに結果が現れるものの方を好むだろう。例えば、料理とか。

そう考えたところで、先週の料理実習で彼女が作った何ともユニークな味の肉じゃがを思い出して、あたしはブンブンと頭を振った。「駄目。あんたには料理のセンスってもんが皆無だ」

「おうおう、出し抜けに失礼ぶっこいてくれるもんやな。何やの、<sup>なん</sup>その憐れむような目線は」

結香は文句を言いながら、あたしの机の上に置いてあった完成品のデイスを取った。

それは掌に収まるほどの小さいもので、アンティークのレースで縁取ったワンピースと帽子を着せ、首には真鍮のどんぐりのチャームのネックレスをぶら下げてある。デイスの顔は愛らしく、なんともつばらな表情に見える。

なかなか秀逸な出来だと思っている内の一つだった。

結香はそれに乗せた掌を掲げるようにしてしげしげと観察し、ほ

「とっつと溜息を吐いた。」

「感心するわ、マジで。ようこんな作れるなあ。売ってるものと変わらんわ。ってか、売ったらいいのに」

あたしはカラカラと笑った。本気にはしないけど、良い褒め言葉だ。

「どうやってよ？」

けれど結香は至極真面目な顔で説明した。

「ネットでさ。ネットオークションで、この手の手作りのぬいぐるみが凄い値段で売れとんで。知らんの？」

「そうなの？」

あたしは驚いてきいた。

今まで思い付きもしなかったが、酷く興味をそそられた。

このટેიベアがお金になるかもしれない??

あたしは自分のお金を持ちたいとずっと思ってきた。だってあたしの周りにあるものは、お金も含めて全て松平氏に施されたものだ。物を買うたびに苛まれる罪悪感、ママが愛人になって一年を超えようとする今も消えようとしない。それどころか、あたしが生き続ける限り、借金が嵩んでいつている気がしてならない。

あたしはあたしのお金が欲しかった。バイトをしたかったけど校則で禁止されているし、家に帰ってからしなくてはならない家事を考えると、諦めざるを得なかったのだ。

もしこのટેიベアでお金を稼げるとしたら、舞い上がるほど嬉しい！校則にも違反しないし、家事の合間に来る。全く持って申し分の無いバイトといえる。

「ね、本当に売れると思う？」

あたしは恐る恐る言った。結香はあたしの真剣さに眉を上げた（この時は両眉だった）が、

「あたしはそう思うで。まあ、申し訳ないがこんなに興味があるわけやないから、あんたのと売ってんのとの細かい差あは分からんけど。ネットオークションに物は試しに出してみたらええやん。あ

たしも古着なんかを売ったことあるけど、拍子抜けするほど簡単で

と、いかにも彼女らしいロジカルな助言をくれた。

それからあたしにいくつか市場に良さそうなオークションと、その手続きの仕方を教えてくれた。

あたしは帰宅後すぐにそれらをネットで調べ、手続きをした。彼女の言う通り、とても簡単だった。それからネットオークションで売られているデイベアを見てみることにした。あたしが出品しようと思っているサイトのオークションでは、人気作家が三人ほど存在しており、彼女（彼？）の作品はどれも個性的でデイトールにこだわった秀作だった。たくさんファンがついた不動の地位を確立していると言える。

けれど、あたしには自分のデイベアとそれらとの違いは殆んど無いように思えた。丁寧さやデイトールへのこだわりには差がないし、個性と言う意味ではあたしのデイトも負けてはいない。

俄然やる気が出てきた。

サイトからオークション出品の許可が降りるまでの一週間、あたしは売れている作家達のブースを研究した。ネットオークションでは、客は実際に商品を手にとってみる事が出来ない。だから、パソコンの画面に映る画像や文字・文章など、簡潔に言えば眼に映る情報の印象が最大の決め手になる。

許可の通知が届くとすぐに、あたしは出品に取り掛かった。無料のテンプレートなどを利用して自分のブースを華やかで可愛らしく演出し、写真の取り方やコメントなどを出来る限り綺麗なものにして自分が一番満足している一体のデイトをオークションに出品した。

開始価格は三千円。人気作家のデイトは、三千円開始で最終値が五万円になったものもある。出品期間は一週間。

さあ、一步は踏み出した。

この世界から飛び出していける翼が、あたしの背中に生えかけている、そんな気がしていた。

一週間後、あたしの初めてのオークションが終了した。

あたしは自宅のPCの前に張り付き、その一部始終を観察していた。オークションは一週間の期間があったが、実際に入札が始まったのは最終日だった。出品者だけが確認出来る、商品にどれだけの人が関心を持ってブースを訪れたかを確認出来るカウンターが設定されており、それを見る限りでは、あたしのデディは最終的には五十人の人の関心を惹いたらしい。

入札者がいないまま最終日を迎えただけに、かなり落胆して期待をかけずにPCを眺めていたのだが、終了一時間前になって初めて入札者が現れた時には、興奮を隠せなかった。

「やったー！！」

叫んだ！もう夜中だったのに。たった三千円でしかなかったけど、一人でもあたしのデディを買おうという人が現れたことに、もう単純に嬉しかった。

でもそれもつかの間、驚いたことに、もう一人の入札者が現れ、さらにもう一人が加わって、高値がどんどん更新されていく。終わり十五分で、最後まで残った二人の入札者によって競りの激しさはピークを向かえ、終値はなんと八千五百円までに昇った。

八千五百円！！！！

あたしは歓喜にもだえながら、ベッドにうつ伏せに倒れ込んだ。

「すごい……！」

自分が作ったものに、その値打ちがついたのだ。何とも言えない興奮が全身を駆け巡り、あたしはぎゅっとシーツを掴んだ。

すごすぎる！

このままたくさんさんのデディが売れてくれれば、自立して生きていく為の足がかりの資金が作れるかもしれない。

ママの愛人を頼らずに生きていける。

それはもっと大人にならなければ実現しない夢のように思っていた。

でも、夢見ていた自分に手が届くかもしれない。

あたしは歓喜に浸りながら、ふかふかだけど居心地の悪いベッドの上で、初めて幸せな夢を見た。

目覚めた時に、内容は忘れてしまっていたけど。

## 5 カズマ

### 五 カズマ

「な、夏休み、あたしの実家に来おへん？」

一学期の期末テストが終了した日、学食のラーメンを啜りながら結香が言った。あたしはごくりとうどんを飲み込んだ。学食のメニューは麺類以外食べれたもんじゃない。結香曰く、『この白飯はムシヨの飯や!』。あんたは刑務所に居た経験があるのか？

「無理。ママがいるもん。ご飯作らなきゃ」

「ママ、ママって、あんたのママは赤ちゃんか!?!? ご飯くらい自分で食べれるやろ!」

「まあそりやそうなんだけど……」

あたしは言葉を濁した。妊娠七ヶ月になるママを置いてどこかへ行く気にはなれなかった。安定期に入ったとはいえ、その間に何かあったらと思うと気が気じゃない。でも、ママの妊娠を結香にすら教えていなかったので、説明の仕様が無い。だってあたしが母子家庭だって知っているし、松平氏との芳しくない関係を誰にも知られなくなかった。

「ハシミのこと電話で話したら、連れて来いってうるさいんよ、ウチの家族。宗兄も会いたがってるし」

宗司さんの名前が出てきてドキツとした。当たり前だけど、入学式以来会っていない。彼の柔らかな微笑みや、優しい眼を思い出す。彼にもう一度会えると思うと、嬉しさに胸が高鳴る。

でも無理だ。ママを置いては行けない。

「でも……」

あたしが言い渋ると、結香はすかさず口を挟んだ。

「夏休みに友達連れて帰るんは実家の恒例行事みたいなもんやの。宗兄も誰か連れてくるみたいやし、東京の中学に行っとる弟もやる。」

あ、でも一番上の兄貴はもう社会人やから、夏休み無いんと違うかな？おとももおかも、ウチらが毎年どんなん連れて来るか楽しみにしとんのや。そんな感じやし、大騒ぎになると思うけど別に遠慮は要らん。まあまだ時間あるし、考えといて」

それを聞くだけで、彼女がこういうざつくばんな性格になった理由が分かった。大らかと言うかオープンというか……いずれにせよ、あつたかい印象を受ける。そういう家庭で育ったのだろう。あたしが結香に惹き付けられるのも、その辺が理由なのかもしれない。

「兄弟がそんなにいたんだ？」

「まあな。八歳上の太一兄、五歳上の宗司兄に一つ下の武蔵。女はあたし一人や」

「可愛がられて育ったんだろうね」

結香が片口を上げてせせら笑った。

「ははあ、あらゆる意味でな。あの環境じゃ、どんな子おでもまともな女子には育たんやろな。遊んだ玩具は戦隊物で習い事は空手、兄妹喧嘩はプロレスで勝敗を決めた。あたしがスカート穿いたんは、中学の制服が初めてや」

「……なるほど」

スカート穿いてちゃプロレスは出来ない。

オスル様の原点はそこにあつたのか。いや、オスル様はプロレスはしないだろうが…。

「ちなみに空手は四人全員黒帯や」

「……それは遅いことで……」

もうコイツを怒らせるのはやめよう。マッスル勝負になった時、あたしなんかひとまりも無い。恐るべし、北川四兄妹。良く似た綺麗な顔した四兄妹が、道着を着込んで気張っているところを想像して、あたしは笑いを禁じえなかった。

美貌の空手家、北川四兄妹。少女マンガにしかありえない設定。コミカルかつシニールだ。

結局のところ、あたしはその年の夏休み、結香の実家に二週間お邪魔することになった。というのも、ママが松平氏とハワイにバカンスに出かけてしまったからだ。ママはあたしも連れて行きたがっていたが、言語道断。誰が好き好んで親の恋人と旅行なんかしたいもんか。しかも費用は全て向こう持ちと来る。借金を不要に重ねるつもりは毛頭無い。

心配なのはママの身体だったが、安定期に入っていて医者の許可も下りていたし、妊娠してから家の中に閉じ籠りがちだったママの気分転換にはいいと思った。何よりママが幸せそうだったから。詰まる所、ママが一番幸福なのは、松平さんという時なのだ。

そこに反感を覚えなかったといったら嘘になるが、もうすっかり諦めていた。要するに、ママはママでしかないという、例のフレーズを繰り返すだけ。

それに実を言うとおあたしも、結香との夏休みを楽しみにしていた。ママと離れる二週間。正直言って、開放感に浮き足立つほどだった。三重への旅費や諸費用は自分のお金から出した。あたしのデイベアは好調に売れ、かなりの顧客もついてきており、この頃には銀行の通帳の残高は新車で小さな車を一台買えるほど貯まっていたから、何の支障も無かった。自分のお金で行動できる嬉しさは格別だった。

終業式の日、一旦家に帰って着替えて荷物を取り、結香の待つ寮へ向かった。一緒に駅へ向かう予定だった。

ところが寮に着いてみると、寮の門の前にシルバーのハリアーが停まっており、その隣に結香と二人の男の人が立っていた。あたしに気付くと、結香が手を振った。

「ハシミー！こっちこっち！」

「ごめん、遅くなったかな？」

「いや、全然。それより、宗兄が予定変更して今日帰郷することにしたらしくて、ここ寄ってウチらを拾ってくれることになったんや」



結香はそう言つて体を斜めに捻つて、後ろに立つ男の人二人を見えるようにした。

あたしの目はすぐに宗司さんを探し当て、思わず微笑がこぼれた。今日彼に会えるなんて思いもしなかったので、心の準備が出来ておらず、心臓がドキドキした。

「お久しぶりです、宗司さん」

宗司さんは優しく笑顔を返してくれた。

「久しぶり、ハシミちゃん。なんか大人っぽくなったね！君が実家に来てくれることになって嬉しいよ！二週間楽しめるといいけど」

「あたしも楽しみにしてます」

「それと、こつちが俺の友達のカズマ。同じ大学で同じ研究室なんだ。カズマ、結香の親友のハシミちゃん」

宗司さんが肩を引いて隣の男の人を紹介したので、あたしは初めてそつちに目をやった。

途端、射竦めるような真つ黒い瞳と出合つてぎくりとした。

その人は真つ直ぐにあたしを見ていた。聳えるほどの長身から見下ろされる視線は、傲慢さがにじみ出ている。同じくらい背が高い宗司さんの視線が、少しも見下ろされた感じがしないのは、恐らく人となりなのだろう。この視線だけで分かる。柔和で鷹揚な宗司さんに比べて、この人は高圧的で自信家。それもそのはずだ。彼はとても男前だった。少し荒削りな印象の顔は線が太く、それでいて驚くほど端整だった。中でも鮮烈なのはその目だ。力強く荒々しい光りを放つて、妙に色香がある。黒曜石のような生々しい閃きを浴びた女性は、難なく彼の手に堕ちるのだろう。

あたしは一気に警戒心を張り巡らせた。この手の男性に対する障壁は、何よりも硬くしなくてはならない。

何よりも、あたしの嫌悪するタイプ。

彼はあたしからじつと視線を外さないまま、手を差し出した。

「よろしく。俺も宗司の家に一月ほどいさせてもらう予定なんだ」

「こちらこそ、よろしく願います」

あたしは指先をその手に乗せて、丁重な笑みを浮かべて答えた。慇懃無礼があたしのバリアーだ。

すると彼はあたしの指先を超えて、しっかりと掌全体を自分の大きな手に握りこむと、親指をそつとあたしの手首の内側にかすらせた。ギョツとして手を引つ込めようとしたが、あたしを掴んだ手はびくともしなかった。

その尊大さに猛烈な怒りを覚えて、不覚にも顔に血が上るのを抑えられなかった。

動揺のあまり顔を真っ赤にするあたしに、彼はふつと甘い笑みを浮かべた。

「ハシミちゃんと呼んでも……？」

手を放して欲しい一心で頷くと、ようやく力を緩めた。あたしは素早く手を引き抜いた。

「俺のことはカズマと」

彼はそう言ったが、あたしはもうくると踵を返していたので、答えることは無かった。背後からくくつという低い忍び笑いが追って来る。

あの綺麗な顔に拳を見舞いたいと言う衝動をぐつと抑えつつ、素知らぬ顔で結香と他愛も無いことを話しながら、やはりここへは来るべきではなかったと言う暗澹たる思いが、胸を渦巻いていた。

そして事実、この時親友の実家へ行くというあたしの選択は間違っていたのだ。

\*\*\*

三重までの道程はとても長く感じられた。シルバーのハリアーはカズマのもので、当然彼が運転手となった。助手席には宗司さんが

乗り、後部座席にはあたしと結香が乗り込んだ。前後に別れたので、この忌々しい男との接触が避けられると安心したのもつかの間、妙に視線を感じて目を上げれば、バックミラー越しにあたしを観察するカズマの眼があった。息を飲んで目を逸らし、二度とバックミラーを見ることは無かったが、カズマの妙に熱っぽい視線があたしを追っているのが肌で感じられた。お陰であたしはいっぴくなく落ち着かず、この密室の車内から逃げ出したくて堪らない衝動を抑える為に、無駄な緊張を体に強いることになった。まるで肉食獣に狙われたウサギになった気分だった。

拷問と思えるほどに長い道のりを終え、ようやく目的地に辿り着く頃には、あたしは文字通りくたくただった。同時にカズマに対する評価は、落ちるところまで落ちていた。

不埒。不適切。不道徳。

これだけ『不』が付く形容詞で評される人間も珍しいだろう。

近寄らない。関わらない。いっそのこと口を聞かない。

三原則が提唱される警報フェーズ6。パンデミック勃発レベルだ。要するにこの男は、ヒト感染を起こす新型インフルエンザ並みに凶悪かつ危険だったこと。

「WHOもビツクリだ」

あたしがボソツとぼやくと、車から荷物を下していた結香が怪訝な顔をした。

「WHO？誰？」

「いや、そつちじゃない。世界保健機関の方。新型インフルエンザの脅威について考えてたの」

「……世界保健機関……えらい季節外れな思考回路やな」

そこは放つといってもらいましょう。あたしは笑顔でやり過ごして自分のバッグを持った。

結香の実家は豪邸だった。美術館のようないでたちの建物を『家』と呼んだし、靴を脱がない玄関ではお手伝いさんが出迎えてくれた。何てことだろう、彼女はお嬢様だったのだ。

何となく、結香と上流階級を結び付けて考えることをしなかったが（普段の彼女の言動を思えばそれも当然だが）、あたし達の学校は基本お嬢様学校だ。どこぞの社長令嬢や、芸能人の娘、元華族だの皇族と縁続きだののご令嬢が半数だ。当然半数は一般庶民だけど。普段そんなことを気にかけて接していないので（と言うか、基本的には結香以外の人に接することは無い）すっかり頭から抜け落ちがちの事実だが、結香がお嬢様であっても何ら不思議ではない。

案内されたリビングルームは吹き抜けで、高い天井から降り注ぐ自然光が柔らかく部屋全体に降り注いでいる。ただっ広い桜材のフロアリングは高級感に溢れ、美しい庭を一望できるとでかい一枚ガラスの前には、あたしでも分かる北欧の有名家具デザイナーのソファーが陣取っている。

ああ…これは紛れもなく上流階級。昔あたしを虐めた主犯格の女子がそうだ。あの子は地方議員の子だった。授業参観の日にあの子の母親があたしを見る眼つき…あれは、軽蔑と嘲笑だ。あたしは胃が擦じれた。

「おかん！ハシミ連れて来たでー！」

結香が無頓着に大声で呼んだ。あたしはゴクリと唾を飲み込んだ。この家の雰囲気から言って、有閑マダムが出てくるに違いない。素行や仕草が洗練されていると言い難いあたしに、嫌悪の眼を向けられたら…そして万が一ママのことがバレたりしたら……。冷静に考えれば有り得ないことでも、心の奥底でいつも抱えている恐怖の渦が、こんな些細なことで堰を切って流れ出し、一気にあたしを飲み込んだ。

緊張に胃がせり上がり、苦いものが喉を刺す。すっと手足が冷たくなり、血の気が下がるのを感じた。

ふっと眩暈を起こしかけたあたしの二の腕を、誰かが力強く掴んで支えた。

「大丈夫？」

低く心地好いバリトンが耳に響いた。あたしはチカチカと白み始

める視界に、朦朧として腕の主に謝った。相手が誰なのか確かめる余裕が無い。

「すみません」

「貧血だ。ソファーに横になるといい」

そう聞いた途端、あたしはふっと体が浮くを感じ、啞然とした。膝と背中につしりとした腕を感じる。頬に当たるＴシャツのコツトンの感触と、男物の香水の香り。わずかに汗の匂いが混じっている。貧血を起こしてるはずなのに動悸が激しくなる（ああ心臓がこっただけしっかり働いているんだから頑張ってくれ、あたしのヘモグロビン！）。なんとあたしはお姫様抱っこをされてソファーへ運ばれているらしい。あたしは結香ほどの身長は無いにしろ百六十六センチあり、体重も五十キロ近くある。米袋五つ分。にも拘らずこの腕の主は、子犬でも抱くように軽々とあたしを抱え上げ運んでいた。やがて壊れ物のようにそつとソファーに降ろされ横たえられたが、あたしは目を開けることができなかった。貧血で意識がハッキリしない状態でも、嫌な予感がしたのだ。

「大丈夫か！？ハシミ！」

結香の驚いたような声がした。駆け寄ってくる気配も。

「カズマさんありがとな！ハシミが具合悪いの全然気付かへんかったわ！」

「いや、暑い所からいきなり涼しい所に入ったんで血の気が引いたんだと思う。それより、冷たい水と濡れタオルを持って来てくれるかな？」

「やっぱり！！あたしは呻きたくなるのを必死で我慢した。あたしをお姫様抱っこしたのはカズマだったのだ！一番借りを作りたい人間だったのに」。

するとあたしの思いを見抜いたかのように、くすつという笑い声がすぐ傍から聞こえた。反射的に目を開けると、揶揄するような笑みをたたえたカズマの顔が目の前にあって仰天した。あたしの上に屈み込むようにして顔を覗き込んでいる。影になった美しい顔の中で、

濡れたオニキスのような瞳がキラリと閃く。

「そんなにきつく噛むと切れるよ」

囁くように言っと、長い指であたしの下唇に触れた。その時初めて、あたしは自分が唇を噛み締めていることに気付いた。カズマは親指であたしの前歯から唇を解放すると、そのままスツと撫でた。目を見開いて硬直するあたしの目の前で、カズマはゆっくりとその親指を自分の口へ持つて行き、あたしと目を合わせたままそれを舐めた。心臓がぎくりと音を立てた。ふつくらとした官能的な唇から艶かしい赤い舌がチラリと覗き、あたしの鳩尾に熱いものが貫いた。何かを言わなくてはと脳を廻らすも、何一つ単語らしいものが浮かんでこない。代わりにアドレナリンがどっと放出され、あたしの心臓を馬鹿みたいに走らせた。カズマはそんなあたしの様子をじつと眺め、おもむろにあたしの頬にかかっていた解れ毛を撫ぜた。

「綺麗な髪だ。柔らかな枯葉色……何故こんな引つつめて隠してしまうんだ？」

あたしは答えられなかった。声が喉に詰まって出てこなかった。ただ首を横に振って拒絶を示した。カズマは小首を傾げて思わし気にそれを見て、小さく頭を振った。

「髪をおろすべきだ。こんなに綺麗なんだから」

言うなりおさげを留めてあったゴムを引き抜き、長い指でその髪を解し梳いた。きつく締められていた規制から頭皮が急に解放されて、あたしは丸裸にされたような気がした。

そして猛然と怒りが込み上げた。

「やめてよ！」

気が付けば、叫んでカズマの左頬に渾身の平手打ちを食らわせていた。カズマの顔が真横に振り切れる。

ざまあみろ。

思った矢先に後悔した。あたしを睨むカズマの眼に、捕食者の歡喜が宿ったからだ。今この瞬間に、あたしは完全に標的になったのを悟った。全身が総毛立った。同時に下腹部にずしつとした熱を熟

み、その反応の激しさに身が震えた。

それは生まれて初めての鮮烈な経験だった。痺れるような、恐ろしいような刺激。何だろう、これは。あたしは半ば呆然として両手を下腹部に当てた。

「もう貧血はいいみたいやな」

妙に間延びした声が割り込んで、あたしとカズマの間に張り詰めていた緊張が解けた。振り向くと、結香が水の入ったグラスと絞ったタオルを手にこちらを見ている。一部始終を見ていたに違いない。表情がシニカルなのに、眼が爛々と煌めいている。

完全に面白がっている。あたしは再び呻きたくなった。

結香に玩具を与えてしまった。弁慶に薙刀。虎に翼。鬼に金棒。まったく！弁慶も虎も鬼も、彼女のメタファーとしては打って付けだ。

「あらあらごめんなさい、着替えてたもんやから……」

バタバタという足音と共に小柄で優しそうなおばさんが現れた。流れからいって結香のお母さんだろう。想像とは全く違い、身なりは上品だが雰囲気がとても大らかで柔らかい。宗司さんと良く似ている。こんな瞬間でなければ、大いにホッとしたことだろう。

「おい、カズマ、お前の荷物は二階の客間に……」

立て続けに宗司さんの登場。

「あらっ！もしかしてあなたハシミちゃん？どうしたん？貧血か？」心配そうにおばさんが駆け寄ってくる。宗司さんも慌ててそれに倣う。

あたしは急に囲まれてどうしていいか分からなくなり、ソファーに寝そべったまま硬直した。助けを求めて親友を見たが、彼女は三步離れた場所でニヤニヤ笑っているだけだ。明らかに助けようという意志が見られない。鬼め、覚えてろ。

あたしが無言なので、宗司さんが隣にいるカズマに向かって言った。

「ハシミちゃん大丈夫？おいカズマ、どうなってるんだ？……あれ、

お前その顔どうしたんだ？」

「あらホンマ。くつきり手形が付いとんで、カズマくん」

「うああ」あたしはついに呻き声を上げた。それからハッと気付いて、喜々として口を開きかけている親友を威嚇するように一瞥した。「それはな、この色男がハシミに手え出そうとして引つかかれたんや」

結香がいきいきと弾んだ声で説明する。翼の生えた虎には効果は無かった。あたしは彼女にアイアンクローをかます想像をして自分を慰めようとしたが、無駄な努力だった。実際にやらないで気が収まるはずもない。

「何だつて！？おい本当か、カズマ！」

宗司さんが気色ばんでカズマの胸ぐらを掴んだ。だが当人は肩を竦めただけで、怯む様子も無い。それどころかニタリと微笑みすらした。

「可愛い仔猫は爪が鋭いみたいだ」

宗司さんがザツと青褪めた。

「仔猫！仔猫て！豆腐の角に頭ぶつけてもう死ぬアホか！笑えねえよ！妹の友達にまで手え出そうとすんな！女子高生だぞ未成年！」

「いかにもそそる要素だ」

「病気かお前ふざけてんじゃねえよ！俺は真剣に言っただ！淫行だぞ、淫行！！」

「三重県には淫行条例があるのか？…まあ心配するな、俺は紳士だ。合意に達しない限りそういう真似はしないから」

「紳士の辞書に淫行なんてボキヤがあつたら世も末だろ！ってかデメそんな真似しようもんなら俺が責任もって去勢した後その雁首警察に突き出してやるから覚悟しとけ！ああだからそういう問題じゃねえんだ、冷静になれ！お前とは年の差があり過ぎるって言っただよ！」

「たかが五歳差だ。それに十六なら、結婚だつて出来る年齢だろ？つまりは判断力があるってことだ。あと虚勢は勘弁してくれ」



「詭弁か！今度は詭弁か！！弁護士目指せこの外道！！」

やや（？）パニック気味の宗司さんを見無視してカズマがあたしを振り返る。貧血と混乱で判断力に欠ける頭でも、それを無視するべきだと分かっていたので目を瞑った。見ざる。

「ハシミちゃん、君誕生日はいつ？」聞かざる。無論言わざる。

「七月十六日。この間十六になったところや」

頼みもしないのに結香が代弁した。あたしは親友に対する復讐を固く誓った。アイアンクローで済むと思うな。

「ほら、全く問題無しだ」

「いやいやいや大問題だろ！！」

宗司さんが怒気を越えて何だかもう絶叫すると、黙って成り行きを見守っていたおばさんがいきなり「ハイ！ハイ！」と挙手した。挙手！挙手って！何なのその学級会なノリ。

カズマが議長然と、どうぞと無言で右手を指し向けた。おばさんはコホンと咳払いした。だからそういう小芝居は要りませんから！

「お母さんとお父さんは十歳離れてんで、宗司。結婚したんはお母さんが十七。出来ちゃった結婚や」

宗司さんが愕然と絶句し、結香は大爆笑、カズマは満面の笑みを見せた。あたしは上半身を捻ってソファーに突っ伏した。

あたしを蚊帳の外に、あたしを生贄にした乱痴気騒ぎの火蓋が切られている。

もういつそのこと気絶したかった。面白がる奴ら全員の首を絞めた後で。

## 6 月光

### 6 月光

北川家に招待された客は、他に二人。いずれも末弟武蔵くんの友達で、まだあどけなさの残る中学生だった。長兄の太一さんはお盆にならないと帰って来れないらしい。武蔵くんは中学生とは思えないくらい背が高く、結香にはあまり似ていなかった。美形には違いないが、鋭さが無く甘い雰囲気。お母さんとそっくりだった。結香と宗司さんはお父さん似だ。夕食の時に会ったお父さんは、結香をそのままゴツく鋭くして男にした感じだった。意志が強く豪胆でウイットに富んでいる。結香を構成する全ての要素は、お父さん譲りのようだ。

北川家の温かさはこの夫婦に由来するのだとすぐに分かった。お父さんが火ならお母さんは水。一見正反对だが、互いに補い合うような、完璧な調和を持って馴染んでいる。仮初めとはいえ、この家族の和に加われる幸運を身に染みて感じた。機能している家庭というものを知らないあたしにとって、こんな理想的なそれに触れる機会は極めてありがたい。生まれてくる弟妹に、完璧でないにしろそれに近いものを与える努力が出来る。

一家の大黒柱の北川哲郎氏は、某有名高級温泉リゾート会社の社長だった。もともとこの地の地主の家系で、先代の時に広大な所有地の一つから温泉を掘り当てたことでさらに繁栄したそうだ。つまり筋金入りの地方豪族。だが業界屈指の企業にまで登り詰めたのは、出生によるラッキーだけが理由ではない。高級温泉宿に過ぎなかったものを、哲郎氏が国内最大級の遊園地とプールを隣接して建設し、当時目新しかった近代的なリゾート地に変えたのだ。鋭い先見の明と絶妙な経営感覚が無ければ成し得ないことだ。

そんな刃の切っ先のような大企業の社長が、家庭で見せる顔はいかにも家庭的な夫で寛大な父親とくるから、世の中つて不公平だ。それとも持てる者故の余裕が、この幸福を生むのだろうか？

いや。多分違う。松平氏は北川氏を超える富豪だけど、ママという愛人に逃げている。松平氏の家庭が幸福であるはずが無い。恐らく松平氏自身、幸福でないから、満たされないからママを求めるんだ。北川家は幸福で、満ち足りている。幸福の定義は、持つか待たないかという条件で分類されているわけでは絶対に無い。北川家の人々が幸福であるのは、彼らが善良であることと、幸せである為の（無意識下であるにしろ）努力をしているからに他ならない。

その努力がどういったものであるかを知るわけでもないのに、あたしは勝手にそう信じた。多分信じたかったのだ。

幸せは、降って来るような偶発的なものではなく、奮励を重ねることで確実に得られるものであつて欲しかった。だってそれならあたしにも手に入れられるかもしれない。でしょう？

北川家の人々の接客態度は完璧だった。あたし達は古くからの友人が親戚のように彼らの和の中に温かく迎えられた。中でも素晴らしいのは結香のお母さんだ。最初あたしが想像したような気位の高い女性とは正反対の、その辺のおばちゃん的な気さくで温かい人柄の女性だった。あたしが『母』に求める要素がぎっしり詰まったような人。彼女は初対面のあたしを、自分の娘と同様に扱ってくれた。結香に対する口調であたしに話しかけ、手伝いをさせ、時には小言すら言った。

結香はあたしに済まなそうに

「すまん。おかんちよつとお節介なトコあるから……」

と謝ったが、あたしはとんでもないと首を振った。本心からだつた。

「そんなこと全然無いよ！むしろ嬉しかった。あたしママに怒られたこと無いから……」

娘に対する無関心がそうさせたのか、あるいはそれ故の僅かにで

もある罪悪感か……いずれにせよ、ママがあたしに何かを説いて含めるほどの道理をわきまえているとは思えない。

すると結香は驚いたようだった。

「怒られたことが無い！？あんだっただけ模範生なんや！で 杉くんか！！」

あたしは笑うに止めた。ママの話をこれ以上掘り下げられるのは嫌だった。

そんな完璧とも思える北川母にも唯一の欠点があった。それは何かにつけ、カズマとあたしをくつつけようとする事だ。どうやら、結香の『目の前にある面白そうな玩具には、全身全霊で飛び付く』というはた迷惑な性質だけは、彼女から遺伝したもののようだ。

おばさんから用事を頼まれるのは大歓迎だったが、カズマと必ずペアを組まされるのには正直ウンザリしていた。実際にあの男と二人きりにさせられていたら、あたしはきっと二週間を待たずにここから逃げ出していただろう。けどありがたいことに、宗司さんが毎回助けてくれた。彼はあたしとカズマを二人きりにしないために、必ず付き添ってくれた。

あたしはカズマを避けたくはあったけど、宗司さんが間に入って構ってくれることが嬉しかった。どんな理由であれ、宗司さんと過ごせるのは願っても無い。

「カズマは親友だけど、女癖が良いとは言えないから」

ある午後、二人で頼まれた買い物に出た時、宗司さんはそう切り出した。おばさんがカズマを呼ぶ前に、宗司さんがその役を引き受けてくれたのだ。

真夏の十七時はまだ真昼だ。油蟬のけたたましい声が焼けたアスファルトにこだまする。スーパーまで徒歩五分、じりじりとした暑さに汗が噴出す。

「そうなんですか？」

あたしは聞いたが、全く意外ではなかった。カズマはもてるだろう。あの水も滴る容姿に加えて、女に触れるときのあの淀みのない仕草。

女に対する自分の影響力を十二分に分かった者の尊大さが滲み出ている。裏を返せば、その尊大さが女を腑抜けにし、また惹き付ける。カズマは真夏の篝火のような男だ。女達は焼き殺されると分かっているが、羽虫のようにその中に飛び込まずにはいられない。

「そうなんだ。言いたくは無いけどね。あいつは狙ったものは絶対に逃がさない。手に入れるまで追い詰める。でも……」

「当ててみましょうか？ 長続きがした例が無い、でしょう？」

宗司さんは意表をつかれたのか、パツと顔を向けた。汗ばんだ額に柔らかな髪が一筋張り付いている。あたしは何だか可笑しくて、ちよつと頬が緩んだ。

「そう。良く分かったね」

「少し注意して観察すれば分かることですよ。いくらあたしが冷たくしてもカズマさんはこの状況を楽しんでいます。彼にとってはゲームみたいなものなんでしょうね。彼が捕食者であたしが被食者。多分『追う』って行為が刺激的で、興奮剤なのかも。でも、食べちゃえば終わり。そこで興味も失うからゲームオーバー。でしょ？」

宗司さんは啞然とあたしを見て、それから大声で笑った。

「すごいな。カズマに追われて、ここまで冷静に分析できる女を初めて見たよ！それがまだ十六の女の子なんだからな！君には驚かされてばかりだ！」

「多分食べさせてしまえば諦めてくれるんでしょうが、あたしだって馬鹿じゃないですから。何の得もしないのにみすみす与えるつもりはありません。そもそも、あたしは餌じゃないですし。食べれば死にかねない毒もあるって、彼が理解してくれるのを祈ってます」

あたしが皮肉っぽく肩を竦めると、宗司さんはふっと目を眇めた。「ハシミちゃんが毒でも、カズマはきつと躊躇わずに口にするよ。」

……すごく甘そうだな」

その眼差しの危うさに、あたしはたじろいだ。不意に場の空気が薄くなった気がして、次の空間を求めてぎこちなく歩を進める。スパーまではあと少しだ。

「あたしは甘くなんかないです」

「…そうかな？まあいいよ」

宗司さんは苦笑混じりに言っ、後ろからポンポンとあたしの頭を叩いた。幼い子にするような仕草に、あたしはホッとして体の力を抜いた。あたしは宗司さんのこういうところが好きだ。いつもあたしの欲しいものを察してくれる。

「ハシミちゃんの冷静さと意志の強さは充分に分かったけど、カズマへの警戒は忘れないで欲しい。あいつには魔力みたいなものがあるから」

「魔力？」

「手練手管じゃない、奴そのものの匂いっていうのかな…巧く言えないけど、あいつは人を惑わす。いくらハシミちゃんのガードが固くても、あいつが本気になったら手に負えない。君が傷つくのは見たくないんだ」

あたしは思わず後ろを振り返った。最後の彼の台詞には、あたしを思いやる気持ちが込められていて、胸を打たれた。

こんな風にあたしを心配してくれる人が今までいただろうか？結香がいる。でもそれは対等な立場からだ。宗司さんの心配は、あたしを守ろうとする上の立場からのものだ。こんな風に頭から包み込むように思い遣られたことは無かった。

ああ、あたしはやっぱりこの人が好きだ。

「ありがとうございます」

あたしは微笑んで、ゆっくりと噛み締めるようにその一言を口にした。言の葉、音に乗せる気持ち。そんなものを実感しながら。

「え？」

「心配してくださって。本当に気をつけます」

あたしが繰り返すと、宗司さんが瞬きをした。

「ああ、いや。うん。……俺もなるべく目を離さないようにするから」

宗司さんはそうはに cand、もう一度あたしのあたまをポンポン

と叩いた。

ムツとした生温い風があたし達の間を通り抜けた。  
風からは、夕立の匂いがした。

\*\*\*

北川家の人達はアクティブだ。夏とはいえ、外にいるのを好む。

その日も夕食をテニスコートほどある庭でバーベキューをしようと  
い出した。やるからには徹底する主義でもあり、ケータリングサー  
ビスに準備と後片付けをさせるなどという愚行を許さなかった。

「自分の尻は自分で拭うのが男や！」

というのが北川家の家訓だそうで、現代の日本に欠けているその  
旺盛な自立心には心から賛同するも、娘の結香にその教えが一番深  
く根付いているのが皮肉だと薄ぼんやり思ってしまうのは、恐らく  
あたしだけであるまい。

その日は朝から準備に大忙しだった。用具を買い込み、食材を買  
い込み、テニスコートほどもある庭に簡易テーブル・椅子・グリル  
などを組み立て、食材を洗って切り、火を熾した。北川家は初心者  
である場合も、やることひとつひとつを本格的にやらなくては気が  
済まないらしい。

「オールオアナッシングの精神って、一途だけど妥協が無さ過ぎる  
と思うの……」

所詮インドアな根暗女なあたしがどろんとした顔でばやくと、結  
香に痛烈なデコピンをかまされた。

「お前は文句もいちいち面倒臭いんや。坊さんか！涅槃だの寂滅だ  
の言い出す前に、頭空っぽで体だけ動かすってことを覚ええ！」

それこそ涅槃の境地ってことなんじゃ……。

ツッコミたいところだったが、もう一撃喰らうのは御免だったの  
で口を噤んだ。

やっと食事にありつけてホッとした途端、ごつつり残る後片付けを、暑さの抜けない屋外で汗をかきかき頑張った。夜八時頃にはすっかりグロッキーになったあたしは、シャワーを浴びて汗と煙の匂いを流し、ベッドに直行した。ちゃんと眠る前にアウトドアという言葉と存在を呪うのを忘れなかった。

目が覚めたのは真夜中だった。活気に満ちた大きな家がしんと静まり返っていて、みんなが眠ってしまった後だと分かった。

食べ過ぎてしまったせい、ひどく喉が渴いていた。そのままではもう一度眠れそうも無かったので、真つ暗な廊下をなるべく物音を立てないように足を忍ばせ、寝巻き姿のままキッチンへ向かった。下の階に降りると、リビングのドアから淡い光が漏れているのに気付いた。誰かがまだ起きているのだ。あたしはそつとドアを開いて中を覗いた。庭に面した大きなガラス戸に向かって、ソファアの背もたれに浅く腰掛けているカズマの後姿があった。薄闇の中に、輪郭に揺らぐ光りを纏いながら浮かび上がるその姿は、どこかおぼろで妖しく、昔話に登場する古の神々を思わせた。部屋の照明は点いておらず、漏れていた光はガラス戸から入る煌々とした月光だと気が付いた。そう言えば、今夜は満月だった。バーベキューの最中で見た低い空に浮かぶ大きな月は、太陽と見紛うほど赤かった。今は銀色になって紺碧の天上に誇っている。

『あいつは人を惑わす』

宗司さんの言葉を思い出す。確かにそうなのかもしれない。カズマは満月に似ている。満月もその美しい魔力で人を狂わせるといふあたしは警戒するのも忘れて、一時その姿に見惚れた。どう足掻いても、カズマは美しい。後姿でさえ均整の取れた彫刻のようだ。

「入らないのかな？」

不意に耳に忍び込むようにバリトンが響いて、あたしはドアの外で飛び上がった。カズマはこちらを振り返って微笑んでいる。

「気付いてらしたんですか」

あたしはドキドキする心臓を悟られないよう、平然を装って言う



た。敢えて語尾を上げず質問にしなかった。嫌味と取れなくも無かったが、カズマはただ不思議そうに首を傾げた。

「何故か君の気配はすぐに気付いてね。…どこにいても誰といても君が傍に来ればすぐに分かってしまうんだよ」

「心外ですね。あたしとしては、他人様に影響の無いよう日々聡叡にしていたつもりですが…何故でしょう」

つらつらと今度こそ嫌味を言つてやると、カズマは困ったように腕を組んで甘く睨んだ。

「何故か分かったら苦労はしないよ。…そんな怯えた猫みたいに噛み付いてばかりいないで、入っといで。ここに何か用があつたんじゃないのか？」

やんわりと窘められると、そうしないのが子供染みて見える。あたしは渋々中に足を踏み入れた。そのままりビングを通り越してキッチンへ向かおうとすると、カズマが体を起こしてあたしの隣に並んだ。

あたしが睨み付けると、カズマはニツコリした。

「喉が渴いたんだろう？バーベキューはかなり塩分が高い」

あたしの両肩に手を置いてぐるりと向きを変えさせ、キッチンのスツールにストンと座らせた。

「ちよつと…！」

抵抗しようとするあたしの唇に人差し指を置き、しつと言つて黙らせる。

「黙つて座つておいで。キッチンをちよつと失敬して、いいものを作つてあげよう。大丈夫、北川夫人なら分かつてくれるよ」

カズマはそう片目を瞑つてみせた。それから勝手に冷蔵庫を探り、オレンジやリンゴといった果物を出し、飾つてあるワインセラーから赤を一本取り出した。

「コラゾン・デル・インディオ…チリか。悪くない」

独りごちながら、引き出しを何箇所か開け閉めをしてようやくコルクオープナーを見つけると、慣れた手つきで栓を抜いた。電磁調

理器の上に置かれてあつたミルクパンにそれを注ぎ、砂糖と、スパイス棚からシナモンスチックを取り出してその中に放り込むと、火にかけた。

その間にデザートナイフでオレンジとリンゴの皮をむき、輪切りにスライスする。

その所作があまりに淀みなく自然だったので、あたしは驚いた。

「料理されるんですか？」

思わず聞くと、カズマは目を上げてあたしを見た。

「まあね。一人暮らしだし、自炊もするから。意外だった？」

「意外でした。外食されてる方がイメージです」

あたしが素直に答えると、カズマはハハッと笑う。気取らない笑いだっただ。

この笑い方をするカズマは嫌いじゃない、とあたしは思った。

「外食も嫌いじゃないけど、毎日だと嫌になるもんだよ。俺の母があまり外食しない性質だったせいか、体が自炊を求めるんだ」

そう言うカズマの表情は優しく穏やかだったが、瞳の奥には苦渋のような色があった。

この男の口から『母』という単語が出るのは、どう考えても不似合いのはずなのに、極自然に感じられるのは何故なんだろう？でも、家族のことなど歯牙にもかけない酷薄な人間だとも思えないから。

…曖昧で掴みどころの無い男だ。

カズマは沸いて来たミルクパンの火を止め、切った果物を中に入れた。食器棚から大きめのグラスを取り出し氷を敷き詰め、その上で半分残ったオレンジを大きな手の中でぎゅっと絞った。橙色の果汁が迸って氷の中に流れ落ち、擦れた皮から柑橘類の爽やかな香りが立ち上り広がった。それだけでも美味しそうだ。けれどカズマはさらにその中に、ミルクパンの中身をそつと注いでいく。ワインの熱で氷がパチパチと音を立てて弾け解けた。

そうして出来上がったオレンジ色と紅色が混じりあつた美しい飲み物を、カズマはあたしに手渡した。

「はいどうぞ。アルコールは飛ばしたから大丈夫」

あたしはグラスに鼻を寄せた。爽やかで芳醇でスパイシーな香りがした。とてもいい匂いだ。口をつけて一口飲んだ。

美味しい。

程よく甘くてとても飲み易い。喉が渴いていたせいもあり、あたしはごくごく喉を鳴らして飲んだ。

気が付くと、嬉しそうな顔であたしを見詰めるカズマと目が合った。その不可思議で優しい視線に、あたしはどぎまぎした。

「美味しい？」

カズマが聞いたので、あたしはまだお礼も言っていないことに気付いて、慌てて頷いた。

「はい。とっても。ありがとうございます」

「お礼と言っちゃ何だけど、君に一つお願いがある」

カズマが含み笑いをしてそう言ったので、あたしは警戒心が一気に蘇った。それを見たカズマは両手を顔の横に上げて、「まいっ」と溜息を吐いた。

「おいおい。また怯えた猫に逆戻りか？俺はそんなに外道じゃないよ。無茶なお願いをするつもりは無い」

「…内容によります」

あたしは慎重に答えた。カズマの態度は真摯に見えたが、丸ごと信じるほど愚かじゃない。もう一口飲んで、グラスをテーブルに置いた。何かされる前に逃げられるよう、一歩下がって体制を整える。あくまでさり気無くしたつもりだったが、カズマの眼には明らかだったようだ。彼は額に片手をあてて仰向き、呻くように悪態を吐く。

「ちくしょう、全く信用されてないみたいだな」

「自業自得だと思いますけど」

冷たく切り返すと、彼は力なく浅く笑った。

「は、その通りだな。君を怖がらせるようなことばかりしてきたんだから。でも俺だってどうしようもないんだ。君を見た途端、歯止めが利かなくなってしまう。こんなこと初めてだ……君は本当に予

想をはるかに上回るよ、ハシミちゃん。俺は君みたいな初心で若い子を追いかけたことなんて一度もない。こんなことしてるなんて俺自身信じられないくらいだ」

カズマは熱に浮かされるように言った。その表情は空気を奪われた人のような苦し気で、あたしはたちまちこの場から逃げ出したい。彼が求めるのが何であれ、あたしには応えることが出来そうにない。それなのにそこに浮かぶ病のような熱に触れたくて仕方なかった。こんな矛盾する衝動を抱えて、一瞬声を上げて笑いたくなかった。

あたしは一体何がしたいの？そしてカズマはあたしをどうしたいのだろう？

あたしが問いかけるようにカズマを見た。彼は焦がするような眼であたしを見ていた。

「俺は君が欲しい」

カズマは言った。断じたと言ってもいい。そこには彼特有の傲慢さが滲み出ていて、あたしには全く違う台詞に思えた。

『君は俺のものだ』

「あたしは誰のものにもなりません」

咄嗟に反抗心がものを言わせた。勿論あたしの本心だった。誰のものにもなるつもりはない。あたしは自由になりたい。自分独りでも生きていけるほど強くなって。誰かに縛られるのなんか願ひ下げだ。

それなのに、心の奥で屈したい自分が叫び声を上げていて、あたしを震撼させた。

何ということだろう。確かにこの男は人を惑わす。カズマに会ってからというもの、穏やかな湖水のようだったあたしの心中は始終さざめき、攪乱した。カズマの存在が、一貫性を崩壊させ撞着を生み、あたし自身に揺さぶりをかける。地場を崩され不安定な場所に立たされた気分だった。不安が体中を駆け巡った。

あたしは両腕で慄然とする自分を抱き締めて、カズマを睨んだ。

この男の存在が苛立たい。

カズマは熟んだ視線をふっと和らげ、諸手を挙げて降参を示した。「だからといって、俺に気持ちを君に押し付けるつもりは無い。俺達は出だしが悪かった。俺は君に惹かれるがあまり言い寄って怯えさせ、君は俺をあからさまに警戒する……こんな図式はうんざりなんだ。手を伸ばす度に距離が遠くなるのはもう真つ平だ！……最初からやり直して欲しい。誓うよ。もう君を怖がらせるようなことはない。だから、俺を避けないで欲しいんだ。友達になりたい」

あたしは拍子抜けした。友達？

「それだけですか？」

「そう。それだけ。ご存知の通り、俺は君に恋してる。好きな子から嫌われるのは身を切られるより痛い。それくらいなら友達でいい。安全な友達になるよ。宗司のような」

安全な友達。

その単語はあたしに安堵と同時に、妙な喪失感を与えた。けれどあたしはそれを断固無視した。安全はあたしの最も欲するところだ。乱されること無く、この休日を平穩に幸せに終えたい。これは休戦協定に他ならない。残す休暇はあと一週間。張り詰めた雰囲気打破し、愛すべき北川家の皆と楽しく過ごしたい。彼の申し出を拒絶する理由は無かった。

「勿論、友達は大歓迎です」

あたしは言った。カズマはほっと息を吐いて、はにかむように唇の端を曲げた。

「じゃあ、握手だな」

あたしは差し伸べられた手を取った。初対面の時、手首を指でなぞられたことを思い出して、カツと赤面してしまったが、カズマは気付かない振りをしてくれた。何しろ、『安全な友達』なのだから。「友達になったんだから、敬語はやめてもらおうかな」

手をゆっくりと放し、カズマが言った。自分の手にカズマの手の温もりを感じながら、あたしはぼんやりとその手で拳を作った。

「でも、カズマさんはあたしより五つも年上ですし」

あたしが躊躇うと、カズマはにやりと笑った。

「手始めに、『さん』を取って欲しいな。カズマ、言ってごらん」

「…カズマ」

言わないと食い下がるのが眼に見えていたので、あたしは呟いた。するとカズマは、宝物をもらった子供ののように目を輝かせて微笑んだ。その表情に、あたしは頭からドスツと何かに貫かれたように衝撃を受けた。

なんて顔をするんだろう！

この男からこんな表情を引き出せるとは思わなかった！それも、ただ名前を呼び捨てただけで！

あたしの驚愕を余所に、カズマは嬉しそうに続けた。

「いいね。じゃあ俺はハシミって呼んでいい？」

あたしは深く考える間もなく頷いた。

自分の鼓動が全身の内側に響く。跳ねるようにスキップしている。何かに小さな亀裂の入った、微かな音が聞こえた気がした。

## 7 プール

### 7 プール

『友人』としてのカズマの態度は完璧と言って良かった。彼はあたしを熱っぽい眼で見ることをしなくなったし、過度のスキンシップも求めない。会話を妙な方向へ持っていくことも決して無かった。彼は人当たりのいい紳士に徹していた。丸ごと信用していたわけではなかったあたしも、彼が約束を守っていると認めざるを得なくなり、態度を和らげるのにそう時間はかからなかった。

そして色眼鏡を外して見ると、彼が考えていたような悪党ではないことが分かった。確かに尊大なところは否めないが、決して無情ではない。それどころか、あたしを含めて全ての人たちに対して、とても親切で如才ない。彼のその温雅さは訓練で手に入れられる類のものではなく、当たり前前として血や肉のように備わっているものだ。あたしの刺々しい慇懃さとは正反対の、育ちの良さがハッキリと見て取れた。特に結香のお母さんに対しては温かい敬意を示していた。恐らく自分の母親に対してもそうなのだろう。あの飲み物を造ってくれた時、自分の母親を語る口調がすごく優しくったのを覚えている。

また頭の回転が速く、ユーモアがあつて、会話が機知に富んでいる。あたしは話の流れで何度か議論を交わしたが、毎回非常に実のある内容となった。白熱したにも拘らず気まずい雰囲気にならなかったのは、彼が方向や空気を巧みにコントロールしてくれたからだと分かっていた。カズマは分別と洞察力のある大人だった。

あたしはカズマと過ごすのが苦痛ではなくなった。苦痛どころか、物凄く楽しかった。宗司さんへの安心するような憧憬ではなかったが、カズマに対しても尊敬を感じていた。けれど同時に、カズマは

あたしの中の何かを刺激し興奮させ、あたしはそれがとても怖かった。そもそもあたしが誰かと議論するなんて（結香の戯れは別として）！誰の興味を引かないように冷静を保って生きてきたあたしは、感情を引き出してしまう彼を本能的に恐れた。

カズマの方は、あたしからそういう反応を引き出すのを、明らかに楽しんでいるようだった。いくら冷静を貫こうと堅く心に決めていても、カズマはいつの間にかあたしを議論へ引き込み、難なくバリアーを突き破ってしまうのだ。そして決まって、あの少年のような笑みを浮かべてあたしを見るのだ。

そうなってしまうのは、あたしに原因がある。あたしの中に、カズマがバリアーを踏みつけて侵入するのを、喜々として受け入れたがるもう一人の自分がいるからだ。実際、過ごしている間は恐怖を忘れるほど、カズマとの時間は楽しいものだったから。身震いするような恐れは、大抵独りの時間に襲ってきた。つまり、寝る時間。一日を終えベッドの中で、あたしは毎晩カズマとの冷徹な距離を確保しようと心に誓った。そして無念極まりなく、これまでのところその誓いは毎回破られる結果に終わっていた。

ある朝、カズマが無然と言った。

「君はカタツムリか」

「は？」

あたしは不機嫌に唸った。窓から降り注ぐ朝の陽光でこの上なく爽やかだったダイニングの雰囲気が一気に急落した。宗司さんがトーストを片手に硬直している。

蝸牛。その軟体動物の見てくれに好意を抱く女性は、どう考えても少数派だろう。あたしは論無く多数派に属する。つまり、『カタツムリは気持ち悪い』。結果から言おうか？この男は朝から喧嘩を売ってることだ。

いい度胸だこの無礼者。

カズマはコーヒーマグを片手に、椅子の背もたれにふんぞり返るようになてあたしを睨んでいる。



「一回一回殻に引き籠らないといられないのか？昨日折角一日かけて殻から引き出したと思ったのに、今朝になってみるとまた殻の中に逆戻りだ。毎日毎日その繰り返し。その冷たい殻の中はそんなに居心地がいいのか？」

その的を得た表現にあたしはついカツとなつて言い返そうとしたが、その前に結香が茶々を入れた。

「カズマさん、ちゃうちゃう。ハシミはお子様やから低血圧なんや頭に血い廻るまでにはもう少し時間を見たつて」

子ども扱いされてムツとしたが、カズマとの直接対決を避けられたので黙っていた。カズマもそれ以上口を開かなかつたが、詰るように向けられる視線が納得していないことを表している。

すかさず宗司さんが眉を顰めてカズマの肩を小突いた。

「お前ね、ハシミちゃんにちょっかい出すのはいい加減にしとけよ。朝から悶着起こそうとするな」

「悶着を起こそうとしてるのは俺じゃない」

カズマは仏頂面でそう言った。んん？コラコラ待て待て？あたしだってそんなこと目論んでないぞ？

噛み付きたいのはヤマヤマだったが、そうすれば宗司さんが困るのが分かったので諦めた。代わりに、絶対零度の無関心を貫いた沈黙を選ぶ。

空気を読んだ結香が今日の予定を相談し出して話題が逸れた。非常にありがたかつたので、あたしは心の中でアイアンクローの貸しを削除してやつた。

「なあ、あたしら今日はプールに行くつもりやのん。宗兄達はどうする？」

「プール？ウチの施設の？」

「そらな。タダやしデカイし。この時期やし人は多いやろうけど」

ここへ来てからまだ一回も北川グループの遊園地やプールに行っていないかったので、結香がタベ誘ってくれたのだ。

「武蔵たちは？」

「中学生たちは今日遊園地の方に行くみたいやで」

すると宗司さんは思案顔でコーヒーを飲んだ。

「じゃ女の子二人か。……仕方ない。俺達も行くぞ、カズマ」  
カズマは当然のように頷く。

男二人の横暴な言い草に、結香は憤慨して腰に手を当てた。当然あたしも腹が立った。

「仕方ないってなんやの！感じ悪い！ええよ、行ってくれんで！頼んでへんやん！」

「他に予定があるんでしたら、そちらを優先なさってください。あたし達は構いませんから」

あたし達の完全無欠な正論を、彼らは救いようがないとでも言うように顔を顰めて一蹴した。しゃがった。

「世間知らずもいいところだ。俺達の予定は大したものじゃないから気にしないでいい」

「狼の群れにむざむざ君達を放り込むつもりは毛頭無い」

あたしはあんぐりして言葉も無かったが、結香の方は文句を言う余裕があった。

「あたしらは自分も面倒くらい自分で見れる！保護者面せんといて！あたしを幾つやと思てんの！十六やで！」

結香が吼えると、彼らは顔を見合わせてこれ見よがしに溜息を吐いた。

「余計悪い。論外だ」

「全くだな。危なつかしくて目が離せない」

傍若無人な男共は二人してすつくと立ち上がり、二の句を告げないあたし達に人差し指を立てて見下ろした。

「プールへは俺達も同行する。異論は受け付けない。行くなら日差しが強くない内がいい。十五分で支度をしろ。日焼け止めを忘れるな。俺達は車で待ってる」

「出し抜こうなんて考えるなよ。後で酷いぞ」

そう言っさつさとダイニングを出て行ってしまった。

あたしはあまりのことにワナワナとして呟いた。

「何なのアレは！時代錯誤も甚だしい！封建制の遺物か！？」

「本ッ当に相変わらずや！ウチの男共は！！あたしを何やと思ってるのや！？個人の主義主張を認めるーーー！！あたしにも人権はあるーーー！！」

結香は齒をギリギリ言わせて、終いには雄叫びを上げた。

「相変わらず？もしかして北川家の男って皆あなの？」

「そうや！太一兄はもっと酷い。昔っから、あたしのやることなすことに口出しして、過保護にもほどがある！小学生の頃クラスの四五人の男女で映画に行くって言った時も、兄貴二人付いて来たんやで！？強面高校生が二人！！信じられるか！？それからあたしは誰にも誘われなくなった！」

顔を真っ赤にして語る結香に、あたしは同情した。

それは酷い……。

「気の毒に……」

あたしがそつと肩に手を乗せると、結香は諦めた顔つきでふっと笑った。

「ありがとう。悪いな、ハシミまで巻き添えにしてもうて。宗兄はこうなったら梃子でも動かんから、今日はもうしゃーない。あの保護者面と行くしかない。我慢したってな」

あたしは下唇を突き出しながら鼻息で同意した。

「それにしても、カズマさんまであんなだとは思わんかったな…もつとドライな人かと」

「そうだよ！宗司さんには結香に口出す権利があるかもしれないけど、あいつには無いでしょう！」

あたしが思い出して愚痴ると、結香は眉を上げてあたしを見た。

「アホやな。カズマさんのはあたしに対する保護欲じゃなく、あんなに対する独占欲や」

「やめてよ！そんな権利こそ、あいつには無いでしょー！」

あたしがギョツとして喚くと、結香は不思議そうに首を傾げた。

「なあ、何でカズマさんじゃアカンの？」

「はあ?!」

「だってええ男やん。外見は極上やし、肝も据わってる。多少軽く見えるけど、不誠実ではないと思うで。複数同時ってのは彼のルールのに無いらしいし。豪胆な強引さも、ハシミには合ってると思うけどなあ」

「結香まで冗談言わないでよ!あたしはあんな尊大な男は嫌なの!宗司さんみたいに優しくて懐の広い人がいい!」

思わず言ってしまった、結香の啞然とした顔を見て我に返った。しまった!

「宗兄?あんだ宗兄が好きなん?」

あたしは手で口を覆った。顔に血が集まるのが分かる。

「いや、その、宗司さんみたいな人、素敵だっと思うの。すごく懂れてる。それだけだよ!」

慌てて言い募ったが、しどろもどろで赤面しては説得力が無い。結香はそんなあたしを見て、眉間に皺を寄せそれから首を何度も傾げて、何かを考察している様子だった。

「よう分からんな」

「何が?」

「あんだと宗兄は……。どう言ってもいいか分からんけど、合ってない。宗兄はあんだには柔らか過ぎるし、あんだは宗兄には固すぎる。水で火を熾すようなもんや。あんだに必要なのは翼や。宗兄にはあんだを温めることはできても、飛ばすことは出来ひん」

あたしはただ驚いて結香を見詰めた。宗司さんと合ってないと言われたことに対しては、不思議と全く気にならなかった。多分彼女に悪意は無く、単なる印象を口にしたに過ぎないのだろう。

それよりもあたしの心を捉えたのは、あの一言だ。

『あんだに必要なのは翼や』

何故彼女に分かったのか。あたしが翼を欲しがっていること。ずっと自由を求めて足掻き続けているということ。

「どうして分かるの？」

あたしは呆然と聞いた。結香は言外のその目的語を正確に読み取って、あっさりと答えた。

「何でかな？ただ分かるんや」

結香になら、全てを話してもいいのかもしれない。

何かが解けるようにそう感じた。彼女に全てを話そう。ママのことも、あたしの出生のことも、前の学校で何があったのかも、そして松平さんのこと、ママの妊娠のことも。

「結香に聞いて欲しいことがあるの」

あたしは言った。結香は黙って微笑んだ。彼女のお母さんとそっくりな安心させるような笑みだった。

「ええよ」

その時、外から車のエンジン音がして、玄関から声が上がった。

「おーい！結香！ハシミちゃん！」

あの横暴者達がすっかり支度を終えてしまったようだ。

結香は片眉を上げて肩を竦めた。

「続きは帰って来てからやな。とりあえずあのファシスト共を黙らせるのが専決や」

「或いはタイラントか」

調子を合わせたあたしに、結香は満足げなしたり顔をしてみせた。「いずれにしろ、単なる男や」

さすが北川結香。不屈の戦士だ。あたしは親友のオトコ前つぷりを心から称賛した。願わくば、彼女のフレキシブルな強かさを、我が身にも備えられんことを！

\*\*\*

プールは大盛況だった。平日とはいえ夏休み期間だから、当たり

前なのだが。

「あり得んくらい的人口密度やなー」

結香がウンザリした口調で言った。真紅の無地のビキニを着ている。鍛え上げられたしなやかな肢体にシンプルなデザインが映える。あたしは黒と白のストライプのビキニだったが、ショートパンツとタンクトップの付いたタイプだった。

「あんた服着て入るんか？」

と結香はからかったが、この大きな胸を露出させるのは抵抗がある。日陰を探してウロウロしている所へ、ポンと肩を叩かれた。宗司さんがカズマだと思って振り返ると、全く知らない男の顔が目の前にあつてぎよつとした。

「君達、二人？」

にきび面の男が笑顔で言った。辟易した顔をする前に、結香が聞こえよがしに舌打ちしたので、あたしは吹き出しそうになった。

「ちつ。ナンパか」

言われた相手は、何を言われたのか理解できない様子でポカンとしている。結香が構わずあたしの手を引いて大きなパラソルの下へ移動しようとする、男は慌てて前を遮った。結香の眉が不穏に上がる。

「ね、ちょっと待ってよ」

「お兄さん、痛い目見ん内にそこ退いた方がええよ」

結香が満面の艶やかな笑みを浮かべて言った。マズイ。この笑顔は物情騒然の前触れだ。

結香は気が短く手が早い。この男は軽佻浮薄だが、ナンパしただけだ。黒帯の脅威に曝されるほどの罪は無い。問題を起こす前に、礼儀正しくお断りするのがスマートってもんだ。

あたしは咄嗟に落ち着かせようと結香の腕を掴んだ。だが間の悪いことに、それと同時にもう片方の腕を男が掴んだ。男は薄ら笑いを浮かべている。

「痛い目って？ 具体的にどういう目？」

ああ、馬鹿が……。この女の挑発にだけは乗ってはいけないのに……

「知りたいか？」

結香がせせら笑いで応じる。あたしの手の下で彼女の筋肉が収縮するのを感じた。

「結香！やめな！」

あたしは引き離す為に、すばやく男と彼女の間に体を滑り込ませた。それがいけなかった。男が今度はあたしの肩を抱いたのだ。

「こっちの彼女は優しそうだな！」

ぞわつと背筋に怖気が走る。あたしは即座に意志を翻した。

「うっ、やっぱりやつちゃってオスル！」

あたしが呻くと、予想外に低い声が上がから降ってきてそれを受けた。

「了解」

肩の男の腕の戒めが解け、力強い腕があたしの頭を引き寄せて剥き出しの堅い胸の中にさらった。ムスクのような肌の匂いが鼻腔を刺激し、あたしはクラツと眩暈がした。

「いてえ！！！」

喚き声でハツと目を上げると、男が大きな手で顔面を驚掴みにされて身悶えしていた。おお、生アイアンクロー。初めて見た。成程、痛そうだ。

「ホラ、痛い目見ただろう？他人からの忠告は聞くもんだ」

響きのよいバリトンが珍しく擦れている。表情は笑顔を保っているが、眼が笑っていない。しかし眼を見ずとも、激怒しているのは全身から漲る殺気で一目瞭然だ。隣では結香が憤然とカズマを睨みつけている。獲物を横取りされた猛獣のような面持ちだ。あたしは虎と狼に挟まれた気分になった。一刻も早くこのにきび面を放してやらなければ、血を見ることになる。あたしは力を込めてカズマの腕にしがみ付いた。男の頭蓋骨を掴んで張り詰めた筋肉が、あたしの重みで撓んだ。

その瞬間、男がカズマの手を逃れた。そいつがそのまま逃げ出す

と思っていたあたしは、完全に意表を突かれた。なんと男は雄叫びを上げながら、カズマに向かって殴りかかったのだ。カズマと男の間にいたあたしは、迫る拳がスローモーションの動画のように見えた。体が自然と前に出た。

「ハシミー！」

結香の悲鳴が聞こえた。

同時に側頭部に重い衝撃を感じ、あたしの世界は暗転した。



## 8 崩壊

### 8 崩壊

目を開けると、白い天井が見えた。全く見覚えが無い。人の話し声や動き回る音、機械音がざわめきのように聞こえ、覚えのある独特な匂いが鼻をついた。ぼんやりと記憶を探り、これは消毒薬の匂いだ、と思い出す。病院の匂いだ。もう少し周りを見ようと身じろぎすると、寝かされているベッドの腰の辺りが大きく傾ぎ、そこに人がいるのに気付いた。目の前にぬっとカズマの顔が現れた。髪は乱れ、顔色が悪い。

「ハシミ！良かった！気が付いたか！！」

その悄然とした顔に驚いて、あたしは思わず手を上げて彼の頬に触れた。彼はすぐさまその手を自分の手で包み込み、自分の頬に押し当てた。彼の体の震えが手に伝わってきて、胸に温かい感情が流れ込んだ。

「どうしたの？」

あたしは出来るだけ優しく聞いた。彼を慰めたい。

彼はあたしの手を握ったまま、目を開いてあたしを見た。酷く脆い眼だ。

「君は殴られて気を失ったんだ。すぐに病院に運ばれて検査を受けた。CTもMRIも異常はなく、脳震盪だということだ。念の為今日入院しなくてはいけない」

「ああ……」

あたしは溜息を吐いた。思い出したのだ。

「あのにきび君はどうなったの？逆上した結香が殴り殺していないといいけど……」

「後で来た宗司が半殺しで止めたよ。あんなクズの心配なんかするな」

「心配してるのは結香の方よ。傷害罪なんかで訴えられたら洒落にならないでしょ。有段者なのよ」

するとカズマはフツと頬を緩めた。張り詰めた雰囲気少し和らいだ。

「君はいつだって冷静なんだな。そしてロジカルだ。尊敬するよ」

その口調には皮肉っぽさは欠片も無く、彼がいつもの余裕を失っているのを知った。彼が手を伸ばしてあたしの側頭にそっと触れた。鈍い痛みがして眉を顰めると、カズマはビクツと手を引いた。

「ごめん！痛かった？」

「少しね。そこ殴られたのね？」

「ああ……ちくしょう、あいつを殺してやりたいよ！君が俺を庇って殴られたのを見て、心臓が止まるかと思った！何であんな馬鹿な真似をしたんだ！？俺を庇うことなんてなかったのに！」

「だって咄嗟に体が動いちゃったのよ」

あたしは素直に言った。カズマがあまりに必死で、そして狼狽しているの、あたしまでいつもの捻くれた態度は何処かへ行ってしまったようだ。でもこの状況は何だかとても自然で居心地が良かった。そう言えば、敬語も使っていない。習慣で使わずにはいらなかったのに。

「君は馬鹿だよ。俺が君を守りたいのに、逆に君に守られてどうするんだ。男の面子つてものを考えてくれないと」

カズマがようやく冗談を言ったので、あたしはホツとした。憔悴しているカズマなんて見たくない。カズマは横柄なくらいがいいのだ。

「ホント男って馬鹿ね。下らないものにばかり執着して。男の子なんて、女にとっては犬の餌ほどの価値も無いのよ」

茶化して鼻を鳴らすと、カズマが微笑んだ。

「君はそうやって男を踏みつけにするんだな。気を付けないとスタスタにされそうだし！」

話しながらもあたしの手を握ったままだった。親指でゆっくりと

あたしの手の甲を撫でている。その仕草は最初あたしを警戒させたものとそっくりだったはずなのに、あたしは全く嫌悪を感じなかった。心地よくさえあった。

「キスしてもいい？」

不意にカズマが言った。あたしを真っ直ぐに見詰める眼は穏やかだったが、裏に苦悩が隠されていた。あたしは不思議と慌てなかった。

「どうして？」

カズマは目を眇めてぶるつと体を震わせた。ぎゅつと目を閉じて、あたしの手を握る手に力を込めた。

「君の意識が戻らなかった時、死ぬほど怖かった。体の芯が冷たくなって、目の前が真っ暗になった。その恐怖が体の奥にこびり付いている気がしてならない。君の温かさに触れて、君が生きてるって感じたいんだ」

その様子が切羽詰っていて、あたしはまたもや慰めたくなった。

「馬鹿ね、あたしは大丈夫なのに。ただの脳震盪でしょ」

そう呟いて苦笑した。抱き締めてキスをして安心させたい。そう思っている自分に気が付いて驚いた。

この大きな男が愛しい。

何故だろう？ あんなにも脅威に感じた男なのに。

こんなに弱々しい様子を見たからだろうか？ 今のカズマは、尊大な表面の中にある丸裸の傷つき易い少年だった。彼自身、彼そのもの。尊大さもひっくるめて、彼が愛しい。

「キスして」

あたしは囁いた。彼にキスして欲しかった。彼をもっと近くに感じたい。

カズマは驚かなかった。微笑んで、あたしに屈みこむように顔を寄せた。

唇が重なる。

想像よりもずっと柔らかく、温かかった。キスは最初はついに

ように、軽く優しいものだった。その内にあたしが彼の唇の感触に馴れ、お互いの息が絡み合い始めると、カズマは喉の奥で一つ唸り、一気にキスを深めた。あたしの唇を割り、舌が侵入してくる。一瞬怯むあたしを宥めるように背中を撫で、ゆっくりと口内をまさぐる舌で愛撫を繰り返される内に、あたしは我知らずキスを返していた。

あたしはキスに味があるのを知った。カズマの味と匂いだ。

頭に霞がかかったようになり、朦朧とした意識の中、下腹部が次第に熱を帯びるのを感じた。体中がひどく敏感になった気がした。キスが唇から逸れ、顎を伝って首筋に向かい、感じ易い耳の後ろに行った。ゾクリとして思わず頤を反らせたあたしは、首筋から脳へ鋭い痛みを感じて悲鳴を上げた。

カズマが弾かれたように体を起こした。息が上がって、厚い胸が上下している。

「ごめん！頭を動かさないように言われてたのに！」

あたしは言葉も無く片手を上げた。大丈夫と言いたかったが、あたしも息が上がってしまったていて、まともに喋れそうになかった。

あたし達は荒い息のまま、無言で見詰め合った。それから唐突に笑い出した。カズマは肩をゆすってクツクと笑い、パイプ椅子にどっかりと腰掛けて天を仰いだ。

「初めてのキスだったのに、ムードもへったくれもあつたもんじゃないな！」

あたしはただクスクス笑った。おためごかしのムードなんか要らなかつた。もともとあたしはロマンチストじゃない。

「次はちゃんとするよ。君が回復したら」

カズマは熱っぽい眼で約束した。あたしは『次』という単語に胸が躍った。次があるのだろうか？

ノックの高い音が響いた。

「はい」

あたしの代わりにカズマが返事をする、ドアが開いて結香と宗司さんが入って来た。

「ハシミ！良かった、気が付いたんか！」

あたしの目が開いていることに気付いて、結香がベッドに駆け寄る。カズマは気を利かせて場所を譲った。

「心配したで！もう、受身も知らんくせに喧嘩に入ったらアカンやろ！」

「結香、そういう問題じゃない。お前は少し反省しろ！ごめんねハシミちゃん。コイツのせいで」

入ってくるなりの兄妹漫才で、あたしは笑った。宗司さんは購買で買ってきた飲み物やパンなどをあたしに渡した。

「吐き気がしなかったら少しずつ食べてもいいみたいだよ。食べる？」

あたしは首を振った。食欲は無かった。

「それと、保険証は持つてる？お母さんに連絡した方がいいんじゃないかな？」

宗司さんがてきぱきと言った。どうやらカズマがあたしに付いていた間、宗司さんと結香が医者から話を聞いてくれたみたいだ。

「保険証はあたしのバッグの中にあります」

あたしが窓際の棚に置いてあったレスポを見つけて指差すと、カズマが頷いてその中を探った。

「母には…母は今海外にいたので、連絡しなくても大丈夫です。幸い怪我也大したことなくあったみたいだし」

「そうか…。ウチの親がハシミちゃんのお母さんに謝りたいって言うもんだからさ。お預かりした娘さんに怪我させてしまったって大慌てでね」

「とんでもない！おじさんやおばさんのせいなんかじゃありませんから！」

その時、ガシャン！と大きな音がした。驚いて音の方を見ると、カズマが棚に並んで立てかけてあったパイプ椅子を倒して、呆然と立ち尽くしていた。手にはあたしの保険証を持っている。

「カズマ？」

訝し気な宗司さんの声が部屋に浮かんで消えた。

「君の名前…ハシミじゃないのか」

カズマが空ろな声で言った。あたしはそのただならない様子に、胃が強張った。

結香が笑った。

「何や、そんなことか！びつくりした！ハシミはあたしが付けたあだ名や。本名はそこにある通り、高橋美奈。『ミナ』じゃ面白いから、真ん中取って『ハシミ』ちゅうこと」

「タカハシ…ミナ」

カズマはまだ飲み込めないように、あたしの名前をなぞるように呟いた。それから視線を部屋にぐるりと漂わせ、あたしを見つけると焦点を据えた。だがその眼は、あたしを通り越して、あたし以外の何かを見ていた。

「高橋美奈…君のお母さんは…今海外にいると言ったな。誰と一緒になのかな？」

いきなりママの話題を持ち出されて、あたしの心臓がビクリと痙攣した。突然足元に大きな亀裂が走り、奈落の底へと導く穴が開いたような気分だった。正体不明の恐怖が襲う。

あたしの無言に何かを感じ取ったのか、カズマの眼に怒りが走った。その鮮烈さにあたしは竦みあがった。カズマの口元に残忍な笑みが広がる。

「君のお母さんの名前を当てたら驚くだろうね？……美奈」

あたしは息が出来なかった。

カズマは知っている！

瞠目したあたしに、カズマは顎をピクリと引きつらせた。歯を食いしばっているのだ。

「君の母親の名前は、高橋紀子。そうだろ？」

カズマはネズミをいたぶる猫のような顔をしていた。あたしはその憎しみに燃える顔を締め出すために目を閉じた。さっき彼が見せた笑顔が脳裏に浮かび、割れた鏡のようにバラバラに崩れていった。

畳み掛けるようなカズマの嘲笑があたしを切り裂く。

「おいカズマ、お前何を言ってるんだ？」

「よく聞け、宗司。この可憐で純情そうな彼女の母親は、俺の父親の金を貪る愛人だよ！そして俺の母を鬱病へと追い込んだ張本人だ！どうして今まで気付かなかったのかな？興信所から届いた親父の愛人の写真に、君はそっくりなのに！」

カズマが叫んだ。

カズマが松平氏の息子……。

あたしはこの瞬間、死にたいと思った。息を止めた。

何故あたしはここにいるんだろう！？何のために！！

「お前の母親は俺の母の神経を切り刻んだ。明るかっただ母はヒステリックになり、どんどん衰弱していった。大量の睡眠薬を飲んだのは今年の二月だ。死にかけているのを辛うじて俺が発見した。それ以来母は完全におかしくなり、父そっくりの俺の顔を見ることにも耐えられなくなってしまった！分かるか？！お前の母親が俺の母を殺しかけ、狂わせたんだ！！」

「いい加減にしろ、カズマ！！」

宗司さんが怒鳴った。カズマは止めなかった。

「目を開けるよ、美奈」

カズマの低い声があたしに命令した。

「ええ加減にせえ、タコ！ハシミは怪我したばかりなんやで！！宗兄、コイツ叩き出して！！」

「目を開けて俺を見ろ！！」

カズマが結香を無視して激しく一喝した。あたしはゆっくりと瞼を開いた。そうしなくてはならなかった。

憎悪と嫌悪に満ちたカズマの眼が、あたしを射抜いた。

「売女の子は売女か。その可愛い顔に危うく騙されるところだったよ」

バシッという破裂音が響いた。結香があたしの姿を隠すように立ち塞がり、カズマに拳を見舞っていた。

「失せろ、虫けらが」

結香が歯の隙間から唸り声を出した。

カズマは左頬を撫でながら鼻白んだ。

「虫けらはその女だ」

そう言い捨てると、カズマは静かに病室を出て歩き去った。

\*\*\*

その後のことはあまりよく覚えていない。気が付くとあたしは退院していて、北川家の客間のベッドに寝かされていた。カズマは昨夜の内に帰ったと宗司さんが教えてくれた。何も心配しないようにとも言った。

結香はあのことには一切触れずに傍にいてくれた。ベッドから出ようとしないうちを外へと連れ出し、あたしと一緒に食事を探ったりと、雛を守る親鳥のように世話をしてくれた。

彼女は、あたしが現実から完全に目を逸らしてしまわないよう、形だけでも日常生活を送らせようとしてくれていたのだ。

そうして三日が過ぎた時、あたしはようやくブレがちな眼の焦点を合わせることが出来た。約束どおり、結香に全てを話した。彼女は全く口を挟まず、黙って聞いてくれた。彼女の性格からしてあり得ないほどに。

全てを話し終えた時、結香があたしを抱き締めた。温かな腕の中で、あたしは息を飲んだ。涙を堪えなくてはならなかったからだ。

「アホやな。早く話したったら良かったのに。独りで担ぐのは大変やっただろうに。あたしがほんの端っこでも、一緒に担いでやれたのに。ホンマ、アホやなあ」

結香は泣いていた。ボロボロボロボロ涙を流して。その涙があたしの涙腺の蓋を開けた。



あたしは泣いていいのだ。

鼻と目に体中の血液が集中したように熱くなり、蛇口のように涙が流れ出る。あたしは堰を切ったように泣いた。声を上げて、結香にしがみ付いて。泣いて泣いて、目が解けてしまうほど泣いた。体が痺れたように疲れ切っていて、あたしは驚くほどすんなりと深い眠りに誘われた。

## 9 再生

### 9 再生

目の暗むような暑さがようやくおさまり、風が秋の気配を運んできた。

臨月に入り、ママのお腹はスイカのようにパンパンになった。胎動にあわせてママのお腹がはつきりと形を変えるので（例えば、赤ちゃんの足型とか）、ギョツとなるほどだった。

赤ちゃんの性別も分かった。弟だ。

予定日まであと一週間。あたしは全ての準備を万端に整えてその日を待った。

学校では気もそぞろとなり、あんまりしょっちゅうママに電話をかけるものだから、結香が呆れて言った。

「まるであんたが出産するみたいな取り乱しようやな！」

「産むのはあたしじゃないけど、育てるのはあたしだもん」

全てを知っている結香は、異を唱えず苦笑するに止めた。

あたしは悩んだ挙句、カズマ、つまり松平一馬のこと、そして彼の母の状態のことを、ママに告げるのを出産を終えてからに延ばすことに決めた。利己的かもしれないが、あたしは弟が生まれるのに障害となることは何だって避けたかった。弟には何事も無く無事で生まれて欲しい。

一馬のことを思い出さない日は無い。特に夜には。彼に関しては、あたしは笑えるほど自虐的な行為を繰り返している。月光に浮かび上がる姿や、あの甘い飲み物を作る姿、あたしに向ける笑顔や、あの身体が震えるようなキスを思い出しては、彼の投げ付けた言葉で全てを粉々に打ち砕く。

『虫けらはその女だ』

あたしの原点、虫けら。確かにその言葉に打ちのめされた。一馬

との間に短期間でも存在していた恋を、呆気なく粉碎された。

そう、あたしは確かに一馬に恋をしていたのだ。思えば、初めて見た時から彼に惹き付けられ、そんな自分に怯えて警戒した。彼を、というよりは、自分の気持ちをだろ。彼に恋をして、ママのようになりたくなかったのだ。けれどそんな抵抗も空しく、気が付けば彼への恋にどっぷり浸かってしまっていた。あたしの初恋は、自覚した途端、壊れてしまった。

過去の自分を穿り返された形で終わった初恋は、苦くて痛い経験になってしまったが、あたしはもうただ踏みつけにされる虫けらじゃない。あたしには全てを知った上で共に居てくれる友人がいて、まだ生まれていないが守るべき者も存在する。僅かながら、自分で稼ぐ術もある。その自信と、子供の頃から手放すことの無かった自尊心が、あたしを立ち直らせた。

もしかしたら、夜毎一馬を思い出すという自傷行為は、自分に教訓を与える為に必要なことなのかもしれない。だってその度にあたしは強くなっている気がするから。

はは、我ながら呆れたマゾっぶりだ。もしかしたら、サドなのかもしれないけど。

身体を酷使して自らを強靱にするアスリートの心境を、今なら理解できるって言ったら怒られるかな？

あたしを踏みにじった一馬を恨んではいけない。彼は正当なことをしたまでだ。最初にママが彼らを踏みにじり、松平氏に養われていることで、あたしも間接的にそうしてきていたのだから。寧ろ、ずつと覚悟してきた罰が現実になっただけというところか。

一馬のお母さんが深刻な鬱病を患っているのは事実だと、後から宗司さんが教えてくれた。夫と酷似した息子の姿を見ることで、夫人が精神的に追い詰められてしまうので、独り暮らしを始めたのだとも。

「丁度その頃、松平氏の弟が亡くなったりと、あの家で不幸が続いたのも理由なのかもしれない。一馬も松平夫人も、その亡くなった

叔父ととても仲が良かったらしいから。勘違いしないで欲しいのは、それは君のせいではないということだ。原因はあくまで一馬の父親と、残念だが君のお母さんにある。ハシミちゃんには何の罪も無いんだ。一馬が君を責めたのは全く不当だと僕も思ってる。でも一馬の友人として、一馬にもそうしないではいられなかった理由があるんだってことだけは、伝えたかったんだ」

宗司さんは言った。あたしは微笑んだ。

彼はいつも誠実で公正。とてもニュートラルだ。ぶれない正しさを持っている。それは彼の鷹揚さと優しさに基づくものだ。あたしはそんな彼が好きだし、尊敬している。彼のような人間になりたいと思う。

でもそれは恋愛感情とは別なのだと、今なら分かる。あたしは彼を男として見ていなかった。そして彼があたしをそういう対象として見ていないからここまで近づけたのだ。宗司さんはあたしを結香と同様に、つまり妹として扱っている。その状況があたしには温室のように心地好い、そして都合のいい環境だったのだ。事実、ほんの少しでも性的な示唆をされたら、あたしは一緒に空間にいることにさえ耐えられないだろう。

だが、一馬は違った。一馬は最初から男としてあたしにぶつかってきた。怖がって逃げ惑うあたしに、それを許さず真っ直ぐに向き合うことを求めた。あたしは逃げながらも、彼に惹かれるのを止められなかった。

ああ、全く。本当にどうしようもない。要するに、これが恋というものなのだ。人智を超えたところで発生し、否応無しに引きずり込まれる。手に負えない。とにかく、あたしの手に余る。

一馬が恋の息の根を止めてくれたのは幸いだった。これ以上あたしが馬鹿な真似をしない内に。散々ママの馬鹿な真似を見てきたのだ。あたしまで馬鹿になって弟に同じ想いをさせるわけにはいけない。

チャイムが鳴った。またぼんやりしている内に授業が終わってし

まった。ノートは真っ白だ。あたしは溜息を吐いてノートを閉じた。後で結香に借りよう。教科書をしまっていると、結香が寄って来てノートを差し出した。

「ホレ、どうせまた要るんやろ」

「…サンキュ。悪いね」

「今度の実力テストは、あんたに抜かれる心配はなさそうやな」

「…言つてなさいよ。分かんないわよ？ママの出産が終わったら、挽回するんだから」

結香が片眉を上げた。しまった。気が漫ろなのはママのお産のせいだと強調したのがかえってマズかった。だがそれを口に出すほど彼女はKYじゃない。

「昼ご飯行くで。食堂？」

「購買でいい」

食べる気がしない。牛乳が何かを飲んで済ませよう。

「ハシミ、あんた痩せたな」

結香がこきおろすように言った。あたしは下唇を突き出した。確かに体重は三キロ減っていた。

「やっぱ食堂。カレーうどん大盛り」

挑むように睨むと、結香はにやりと笑った。

「全部食べたら、あたしが奢ったる」

あたしは笑った。自分は幸せ者だと思う。

だがカレーうどんは最後まで食べられなかった。ママから電話がかかってきたのだ。

「もしもし？ママ？」

「美奈。破水したわ。今タクシーで病院に向かっている」

「すぐ行く！」  
あたしは携帯を切って立ち上がった。結香を見ると、手をさっと振って促した。

「行き！あとはあたしがやっつくで。財布はあるな？」

「ありがとう！」

あたしは食堂を飛び出し、駆け出した。

\*\*\*

病室に着くと、ママがお腹を横にして横たわっていた。子宮の収縮を測る機械を付けられている。

「美奈！」

「ママ!どう?」

「まだ前駆陣痛よ。子宮口は四センチしか開いてないし」

子宮口は十センチまで全開しないといけない。

「そう、じゃあいよいよ生まれるんだね」

あたしはゆっくりと息を吐き出しながら言った。緊張と興奮を同時に感じていた。

「そうみたいね」ママは浅く笑った。

「今の内に何か食べたほうがいいんじゃない?」

「食べたわ。美奈が作っておいてくれたおにぎり」

「そう。…他に何かして欲しいことは? 必要なもの入れたバッグは持ってきた?」

そわそわしているあたしとは正反対に、ママはゆったりと構えていた。

「大丈夫よ、ちゃんと持ってきた。ねえ美奈落ち着いて。生まれるまでにまだ時間がかかるだろうし、そんなにバタバタなくていいのよ」

可笑しそうに宥めるので、あたしはいつもと立場が逆になった気がした。

「随分落ち着いてるのね、ママ」

ママはふつと微笑んだ。

「初めてじゃないもの。あんたの時は不安だったけどね。でも初め

ての時も、不思議とうるたえたりはしなかったわね。絶対に大丈夫  
って、変な自信があつたの」

「自信？」

「……自信って言うか…、希望？確信？複雑ね。あんたも子供を産  
む時にきつと分かるわ」

「今も感じてるの？」

ママは黙ったまま頷いた。力強く、女らしく。まるで母親のよう  
な微笑で。

その微笑みは、怒涛のような衝撃であたしに気付かせた。

この人は母親だった。

最初から、母親だったのだ。

ママのお産は遅々として進まなかった。真夜中を過ぎても子宮口  
はそれ以上開こうとはせず、陣痛も弱いままだった。経産婦は早い  
と言われているが、ママの場合は最初の出産から時間が経っていた  
のもあって、遅いのかも看護婦さんが言っていた。

ママより遅くに運ばれて来た産婦さんたちが、次々に赤ちゃんを  
誕生させていく。一日の内にこんなにたくさん赤ちゃんが生まれ  
るなんて思いもしなかったあたしは、新生児室にどんどん新しく並  
べられる小さなベッドを驚愕しながら見ていた。どの子も信じられ  
ないくらい小さい。なんて可愛いんだろう。

ベッドには名前と生まれた時の身長と体重が書かれたカードが差し  
てある。もう名前のある子もいれば、無い子もいる。

あたしは弟の名前をいくつか候補を挙げていたが、まだ選んではい  
なかった。顔を見てから決めたかったのだ。

「高橋さん」

不意に声をかけられて振り向くと、助産師の資格のある看護婦さ  
んが後ろに立っていた。

「一回お家に帰った方がいいんじゃない？あなたまだ制服だし、お

母さんのお産はまだかかると思うわ。もう日が変わっちゃったし」

あたしはきつぱりと首を横に振った。

「いえ、出産に立ち会う予定なんです。弟の誕生の瞬間を逃したくないので」

看護婦さんは軽く溜息を吐いて「そう」と言った。それからスタツフルームに引っ込んだかと思うと、マグカップを持って戻ってきた。

「はいコレ、ココア。ここは冷房が効いてるから、あったかい飲み物のほうがいいわ」

そう言っただけのたった飲み物をあたしに手渡し、待合室のソファへ促した。

「ここで少し横になるといいわ。お母さんの陣痛が進んだら、必ず起こしてあげるから」

あたしはとても眠れる気分じゃなかったが、親切にはありがたく従い、ソファに座ってココアを飲んだ。温かい飲み物が、意外にも美味しく感じられた。看護婦さんはあたしがココアを飲むのを見届けると、仕事へ戻っていった。

待合室の壁掛け時計を見ると、三時半だった。

今日：ではなくもう昨日終了だったデディーベアのオークションはどうなっただろうかと漫然と思いながら、携帯を開いた。結香からメールが何件か入っていた。心配しているようだったので、経過報告とお礼を打ったメールを返し、携帯を閉じた。ソファの背もたれに身体を預けながら目を閉じた。

「高橋さん！起きて！お母さんが分娩台に乗るわよ！」

揺さぶられてハッと目を覚ました。目の前にさっきの看護婦さんの顔があった。いつの間にか眠ってしまったのだと気が付いて、慌てて体を起こした。

「立ち会うんでしょう？準備をしなくちゃ！」

看護婦さんはテキパキと言って、引っ立てるようにあたしを連れて行った。あれよこれよという間に全身を消毒し、術衣と手袋、帽



子、マスクを着けられ、分娩室に入れられた。

分娩台にはママが額に汗を浮かべながら乗っていた。

「ママ！」

あたしが駆け寄ると、ママは苦しそうに顔を歪めてあたしを見た。  
「美奈：もうすぐよ…ああ！！」

ママが甲高い悲鳴を上げたので、あたしは青くなつてママの手を握った。汗で湿ったそのあまりの握力に驚愕した。痛い！女の人の力とは思えない。その強さに負けない力で握り返した。じゃないと痛くて耐えられない。

「高橋さん、まだまだ堪えて、堪えて…：ハイ、今だ！いきんで！！」

この場で唯一の男性である産婦人科医が音頭を取るように言った。ママが合わせて息を止めて身体を震わせる。綺麗な顔が厳しく歪み、赤黒く染まる。かつて無いほど荒々しく凶暴な顔だったけど、一番綺麗な顔だった。

「ハイ、逃して。ゆっくり息を吐く…：そうそう。赤ちゃんそこまで来てるからね、頑張つて。：もう一度いけるね？」

赤ちゃんはまだ出て来ない。再度の陣痛の波を、子宮収縮のメーターを睨みながら医師が測っている。ママの喘ぐような呼吸を聞きながら、自分がどうしようもなく無力に感じた。

ママはスッピンで半裸で、何の武装もせず剥き出しだった。剥き出しで戦っている。本能のままに、ただ人間として、母として。

あたしを産む時も、こんな風だったのだ。

「堪えて堪えて…：ハイ、いきんで！」

医師の合図で、ママが再び渾身の力を振り絞る。

「上手だ！そのまま頑張つて！頭が見えたよ！：よし！出た！逃して逃して！ハッハッハッだ！声を出して！」

ママが悲鳴混じりの声を出していきみを逃す。あたしはママの表情に釘付けで、看護婦さんに突かれるまで赤ちゃんを見るのを忘れていた。

「ホラ、弟くんが出てきたわよ！」

促されてその方向を見ると、全身を白脂と血に塗れた小さなものが、ママの体からずりりと引き出されるところだった。

あたしはひたすら呆然とその光景を見ていた。

あたしの弟！

弟は出て来るなり両手足をバタつかせたが、声を上げなかったのであたしはぎくりとした。すると看護婦さんが細長い管を小さな口に入れ、ガラガラと耳障りな音を立てながら、中の羊水を吸い上げた。管を抜かれた瞬間、割れんばかりの産声があたしの耳を劈いた。

なんて、なんて大きな声だろう！！

彼は命をうたっていた。

信じられないくらい小さな全身をいっぱいに使って、懸命に、純粹に！

それはとても、とても勇敢な声だった。

看護婦さんが弟の全身を綺麗に拭いた後、寝そべったママの胸の上に裸のまま置き、パクパクさせる口元に乳首をあてがった。彼は眼も開けないうちから乳首を探し当て、むしゃぶりついた。その様子はとても力強く、生命力に溢れていた。

畏怖にも似た気持ちでそれを見詰めていると、ママが疲労の滲む声で笑った。

「ふふ、見て。この子、美奈にそっくり」

あたしは驚いてママを見た。ママは満ち足りた顔をして笑っていた。

「似てる？あたしに？」

弟の顔はしわくちゃで、正直あたしにはこの子がどんな顔なのか良く分からなかった。可愛いとは思っけど、人間らしい顔をしているとは、まだ思えない。

「そっくりよ。あんたが生まれた時の顔と」

ママのその疲れているけれど、幸福に輝く口調と表情で、あたしの中で何かが弾けた。

ずっと欠けていたピースが埋まった。

これは再生だ。あたしは、弟と一緒に、もう一度ママから生まれたのだ。

涙が溢れた。見ると、ママもあたしを見詰めて泣いていた。

「ママ…ありがとう」

あたしに弟をくれて。あたしを産んでくれて。

ママとの間にあった壁が、雪が解けるように消えていくのを、あたしはこの時確かに感じていた。

\*\*\*

分娩室を出ると、窓の外の夜が白み始めていた。

太陽が輝く薄紅を纏って東の空の端に片鱗を現している。大好きな夕暮れとよく似た、七色のグラデーションが大きな天空に描かれている。あたしは朝焼けの空を始めて見た。静謐な夕焼けとは違い、全てが力強くきらめきに満ちている。

何て美しく、大きいのだろう！

全てが息づいている！

窓を開けて、外の涼やかな空気を肺いっぱいに取り込んだ。

決めた。

あたしの弟の名前は、あかつき 暁。

全ての命の象徴。

始まりの空だ。

## 10 混乱

### 10 混乱

ママと暁の経過は良好で、予定通り五日で退院することになった。退院の前日、学校を休むというあたしをママが止めた。

「大丈夫よ。その日は松平さんが来てくれるから。暁の出生届を一緒に出しに行くつもりなの」

松平氏のことをすっかり失念していたあたしは、急に失望感が胸に広がるのを抑えられなかった。だが、松平氏は暁の父親なんだし、認知してもらう以上、無碍にするわけにはいかない。何より、ママは彼を愛しているのだ。

だが、ママが松平氏に会う前に言っておかないといけないことがある。一馬の件だ。

暁が生まれてから、ママとの距離がぐっと縮まり、あたし達はとても満足の行く関係を結んでいた。やっと親子になれたと言ってもいいほど。だからそれに水を差すようで言えずにいたが、よく考えれば、そんな今だからこそハッキリと言えるのかもしれない。

「ママ、言っておかなきゃいけない話があるの」

あたしはそう口火を切って、全てを話した。この夏のこと、一馬が父親の浮気を調べさせていたこと、松平氏の妻がどんな状態であるかを。

ママは黙ってあたしの話を聞いていた。話し終わると、蒼白な顔で目を閉じた。

「ごめんなさい、美奈：あたしのせいね。あたしのせいで、あなたの恋を…」

「違う違う！あたしの恋はあたしの責任でしかないし、もう終わったことよ。そんなことを謝って欲しいわけじゃないの。問題は、松平さんの家庭にママが及ぼしてしまっている影響のことよ」

あたしが手を振って遮ると、ママは怯えたように首を左右に振った。

「知らなかったのよ、彼の奥さんが鬱病になってしまったなんて……！彼は奥さんとはもう家庭内別居状態で、お互い割り切ってるって……」

あたしは溜息を吐いた。ママはママだ。コミカルで軽率。そして恋は盲目という真理を、あたしは今や身をもって知っている。頭痛の種だが、仕方ないのだ。

「……ママ、悪いけどそれは、不倫をする愚にもつかない男の嘘の定番だよ。昼ドラでも使い古されてる。それを信じたママは馬鹿だと思っけど、問題はそこでもないの。真実を知って、どうするか。松平さんは、他人を不幸にしてまで手に入れたいものなの？」

あたしは容赦なく突きつけた。ママにはそれに直面する義務があるからだ。ママは固唾を呑んで考えている。まるでぶたれた犬みたいな貌だ……。

「ねえママ。あたしは責めてるわけじゃないのよ。責める権利はあたしじゃなく、松平さんの奥さんや息子さんにしかないの。あたしはママにとって一番良いことをしたいと思ってる。ママはどうしたい？あたしはママを知ってるから、ママが他人を踏み付けにして幸せを感じられるとは思えないの。確かに自分勝手に無分別で愚かだとは思っけど、ママは悪人じゃないもの」

「随分な言いようね」ママがふくれっ面をした。

「だって間違っただけでしょ」

あたしが切り返すと、ママはしゅんとした。もう四十手前なのに、少女のようにあどけなく見えるから始末に負えない。

「とにかく、よく考えてみてよ。暁のこともあるし、すぐに結論を出せるとは思ってないけど、絶対に考えなきゃならないことよ」

あたしが念を押すと、ママは頂垂れて痛々しいほど悲痛な面持ちで頷いた。

多分、松平氏との関係を始めて疑った瞬間だったのだと思う。マ

マはきつと松平氏とは別れるだろう。ママは馬鹿だけど、残忍ではない。

きつとあの家から出なくてはならないし、ママは働き口を捜さなくてはならないだろう。あたしは今の学校を辞めなきゃいけない。あの私立校の法外な学費は払えない。結香と違う学校になるけど、多分彼女との関係はそんなことじゃ壊れないから問題にはならない。

「ごたごたすることが山ほどあるし、今みたいな楽な生活ではなくなるだろう。でも大丈夫だ。あたしはもう何も出来ない子供じゃない。がむしゃらにやれば、ママと暁を守っていける。」

一馬と松平氏の奥さんにあたし達が出来る、償いの第一歩だ。辛いはずのその一歩は、あたしにとっては初雪の降った雪原に踏み入れる、神聖な一歩に思えた。ママとあたしは、暁と一緒に、きつと乗り越えていける。

\*\*\*

慌てた様子の担任の教師がやって来たのは、あたしと結香が次の授業の為に音楽室へ向かおうとしていたところだった。

「あなたのお母さんが事故に遭って病院に搬送されたと警察の方から連絡がありました。タクシーを呼びましたから、すぐに向かいなさい」

唐突にそう告げられて、あたしは頭が真っ白になった。言葉もなく立ち尽くすあたしの代わりに、結香が答えた。

「分かりました。私が高橋さんに付き添いますので、早退手続きをしてください」

結香に手を握られながら乗ったタクシーでも、あたしは愕然としたまま、全くまともなことは考えられなかった。だっていきなり親

が事故に遭ったなんて言われて、実感沸く人なんている？こんな時どうしたらいいか、マニュアルみたいなものがあつたらいいのに。

病院では警察の人が待っていた。その男の人は優しそうな目をした禿げたおじさんで、まずしたことは、あたしを椅子に座らせることだった。おじさんはあたしの怯えた表情を痛ましげに見詰めた後、ゆっくりと喋り出した。

「落ち着いて聞いてください。お母さんは車で悲惨な事故に遭われました。大型トラックが車道へ飛び出した自転車を避ける為に、対向車線へ大きく急ハンドルを切り、そのままお母さん達の乗った車にはぼ正面衝突しました。トラックの運転手は重傷を負い、車を運転していた松平幸助さんは即死されました。お母さんは病院へ運び込まれた時にはまだ息がりましたが、…二時間ほど前にお亡くなりになりました」

「うそ」

「冗談でしょう？今この人何て言ったの？ママが死んだ？

「残念です」

おじさんは目を伏せて謝るように言った。まるでおじさんがママを殺したかのように。

何故だかこのおじさんに無性に我慢がなくなり、あたしは憤然と立ち上がった。出来ることなら殴り倒してやりたい。

「ママに会わせて下さい」

押し殺した声で要求した。理不尽で不可解なこの状況を、その行為が救ってくれる気がした。ママに会いさえすれば全てが元通りになる。おじさんは躊躇うようにあたしを見て、それから隣の結香を見た。そして再びあたしを見ると、黙って頷いてあたしを促した。連れて行かれたのは地下の一室で、そこへ繋がる廊下はやたらひんやりしていた。

脳裏に赤いもやがかかり、不安定な警告を発し始める。急に四肢から力が削がれ、指先が戦慄き始める。あたしは部屋の戸を開けた。

目の前の光景が信じられなかった。

白い布をかけられた遺体が、寝台に乗っている。あたしは恐る恐る近付いて、感覚の無い手を動かしてそっとその布をめくった。

ママの青白い顔が現れた。目を閉じて、眠っているようだ。でも生気のすっかり抜け落ちた貌が、これがママの遺体である事を示していた。

「…嘘よ」

あたしは力なく呟いた。誰かに肩を掴まれて、支えられた。ぼんやりと視線をやると、結香が険しい顔であたしを抱いていた。

「結香：信じられない…。今朝電話で話したばかりだったのよ。暁に黄疸が出たから、紫外線療法の為に暁だけ残って、ママだけ先に退院するんだって。松平さんが十時に迎えに来て、一緒に役所に行って出生届を出してくるって…。ママ、今夜はあたしのハンバーグ食べたいって言うって…。それなのに、何でこんな…」

「ハシミ…」

「どうしよう。こんなこと、予想もしてなかった。今日、暁に会いに行つて、スーパでハンバーグの材料を買って帰るつもりだったのよ。それなのに…どうしたらいいの？あたし…ママがいなくなるなんて…ねえ結香、あたしどうしたら…」

あたしは足が萎えてその場に崩れ落ちた。パニックで胃がせり上がり、涙が込み上げて溢れ出した。真つ暗な谷底に突き落とされた気分だった。周りには何も無い。光も音も無く、暗澹たる深淵が広がるばかりだ。呼吸する空気までもが奪われそうになった時、温かな両手に頬を掴まれて引き戻された。

「しっかりせえハシミ！大丈夫や！あたしがおる！！あんたには、あたしも暁もおる！独りにはさせへん！」

結香が揺るぎ無い意志を込めて、あたしを睨みつけていた。揺るぎ無い力であたしを掴み上げ、逃がそうとしなかった。

「あたしはここにおる。暁もおる。忘れるな！」  
そうだ。

あたしには結香がいる。守るべき暁もいる。



あたしは涙を飲み込んだ。ひどく苦く大きく、飲み込むのは容易ではなかったけれど。

飲み込んだ。飲み下した。

そして、歯を食いしばって立ち上がった。

\*\*\*

葬式は小さな斎場で済ませた。弔問客は結香と担任の教師だけだったので、別に斎場を借りる理由も無かったのだが、人の死に目に遭遇したことの無いあたしは、一通りの儀式を滞りなく済ませてくれる業者に依頼するしかなかった。

通夜と葬式が済むまで、暁は病院で預かってもらうことになった。それでも、結香に頼んで火の番を代わってもらい、時間を作って二度暁に会いに行った。二度とも暁は眠っていて、満ち足りた様子で小さな口を動かしていた。もみじのような手は、あたしの指を何の躊躇いも無く握り締める。湿った温もりに、愛しさが込み上げた。母親を喪ったけど、あたし達にはお互いがある。それを思い出すことで、この一連の儀式を乗り越える力をもらった。

宗司さんが葬式に来てくれて、遺骨を抱えたあたしを車で家まで連れ帰ってくれた。結香が一旦寮に帰らなくてはならず、あたしを家の前に降ろしてくれた。

「結香を寮に置いたら戻ってくるよ。話があるんだ。それから一緒に暁くんを迎えに行こう」

宗司さんはそう言い置いて去って行った。家はしんと静まり返っていて、がらんどろみたいに中身が無かった。玄関で一瞬足を止めた。中に入るのが怖かった。両手で抱えた骨壺は大きく重たく、白檀の線香の匂いが染み付いた、つるつるした紫の布で覆われている。匂いも感触も全く肌に馴染まない。あたしは

一人になつた狼狽を振り払うように靴を脱ぎ、リビングに入った。骨壺をひとまずテレビの前のローテーブルに置いて、一步下がって眺めた。駄目だ。ここにはそぐわない。いずれ墓を買って納めないといけないのだろうけど、当分は傍に置いておくつもりだったから、家の中に相應しい場所を作らなきゃいけない。ママの場所を。

考えを廻らせていると、玄関のベルが鳴った。宗司さんが戻って来たのだと思つて、スマートフォンで確かめもせずドアを開き、あたしは度肝を抜かれた。

「一馬！」

そこに一馬がいた。

久し振りに見た一馬は、記憶よりも頬が削げ、髪が伸びて粗野な印象を強めていたが、相変わらず逞しく美しかった。あたしは止めなくてはいけないと分かっているのに、一馬から目を放すことができなかった。手を伸ばし、彼に触れたくて仕方なかった。ああ、あたしはまだこの人を愛している。この世で一番愚かな女だ！

一馬はあたしを見るなり、苦痛を堪えるように眉根を寄せ、口元をキツと引き絞った。眇められた瞳の奥には、狂おしいほどの葛藤があつた。細い絹糸を張り詰めたような一瞬の後、彼は弾けるようにあたしを胸にかき抱いた。あたしは人形のように、彼の腕の中で揺れた。力が入らなかった。

「親父が死んだ」

搾り出すように彼が言った。抱きすくめられ、彼の胸に頬を押し当てながら、あたしは涙が込み上げた。

そうだ。車を運転していたのは、松平氏だった。あたしがママを喪つたように、一馬は父親を喪つたのだ。今あたし達は同類だ。同じ感情を胸に持ち、持て余している。

「どうしたらいいか分からないんだ。親父を憎んでいたのに。あの愛人も一緒に死んだ。君の母親も。矛先がなくなってしまった」

一馬の体が小刻みに震えているのが分かった。泣いているのだ。一馬は見放された子供のようだった。放り出されて怯えて泣いてい

る。

あたしは胸を突かれた。この人は何にも悪くないのに、どうしてこんな想いをさせられなくてはならないのだろうか？悪いのは松平氏で、あたしのママで、そしてママを止められなかったあたしだ。悪いことをしたあたし達の咎が、全部彼の肩にかかってしまったのは何故なんだろう？

「大丈夫よ、まだあたしがいる」

咎を受けるべき者は、まだあたしが残っている。あたしは一馬の頬を自分の両手で挟み、濡れた瞳を覗きこみながら、懸命に言った。「あたしが残ってる。松平さんやママの分まで、あたしを憎めばいい。矛先は全部あたしが引き受けるわ。あなたの傷も痛みも丸ごとあたしに寄越せばいい」

一馬は呆然とあたしを見た。

「何故そんなことを言うんだ？俺はそんなことしたいわけじゃない。親父が死んで、暗闇の中を漂っているような気分だった。ただやりきれなくて……無性に君に会いたくなって、気が付いたらここに来たんだ。……だが……君に会って何をするつもりだったのか……」

一馬が混乱した眼を辺りに泳がせ始めたので、あたしは引き戻すために彼の首に両手を回して抱き締めた。一馬は父親の死に引き摺られたままだ。病院で結香があたしにしてくれたように、彼を引き戻して現実繋ぎとめてやらなくてはならない。

「あたしはあなたのお父さんのお金で生活をし、学校に行っていたわ。ママと同罪よ。あなた言ったじゃない。売女の子は売女だって。あたしがあなたのお母さんを追い詰めた」

一馬の眼に怒りの炎が閃く。体が強張り、抱いたあたしとの間に距離を作った。あたしの心は、その距離に悲鳴を上げて抗議する。彼に触れていたい。離れたくない。けれど、あたしが一馬を手に入れることは永遠に無いのだ。

そう、憎めばいい。心を喪つくらいなら。憎しみが今のあなたの糧なら、あたしがそれを与えよう。

「母はあなたのお父さんと一緒に亡くなったわ。あなたのお母さんではなく」

一馬の腕が解け、あたしを突き放す。激しい怒りに引きつった顔があたしを凝視している。

ああ、憎悪に歪んでいても、この男は美しい。

一馬はふらりと後ずさりして、玄関のドアに体をぶつけた。

「俺は……」

「憎めばいい、一馬。あたしはここにいるわ」

あたしが低い声で囁くと、一馬は激しい眼で最後にあたしを一瞥すると、身を翻して玄関を出て行った。

ドアに逞しい体を滑り込ませるまでの一瞬の後姿を、あたしは脳裏に焼き付けた。二度目の後姿。一馬はもう戻って来ないだろう。それでいいのだ。

## 11 復讐的

### 11 復讐的

「ウチの両親は君達を養子に迎えたいと言っている」

耳を疑った。その台詞を口にした宗司さんを、呆気に取られて眺めた。

ハトに豆鉄砲。多分そんな顔をしていたのだろう。宗司さんは苦笑して、あたしのコーヒーマグのカップを持った手元を指した。

「こぼすよ」

「あつ」

あたしは慌ててカップをソーサーに乗せた。

「君はまだ未成年で、暁くんはまだ生まれたばかりだ。このままだと、暁くんも君も施設に行くことになると思う。もしかすると、姉弟が離れ離れになってしまうかもしれない。多分、君はそれに耐えられないんじゃないかな？」

あたしは血の気が引いた。暁を失うなんて考えられない。あの子はあたしの弟で、子供だ。唯一の肉親。

「そんなこと、耐えられません」

「うん。だから、ウチの両親が君達を養子に迎え入れれば、全て解決するんだ。法律的にも現実にも、君達には保護者ができ、守られる。両親は君を物凄く気に入ってる。お袋は赤ん坊が大好きなんだ。間違いなく暁くんを可愛がってくれる。俺達も、新しい兄弟が出来ると思うとすごく嬉しいよ。上手くやっていけると思う」

宗司さんはあたしの手を取ってニッコリ笑った。どうしよう。

「ありがとうございます。そう言ってもらえて、とても嬉しいです。

でも、そのお話は受けるわけにはいきません。北川家の方達に、あたし達に対する責任を押し付けるなんてできません」

「責任なんて…」

反論しようとする宗司さんを手で制し、あたしは取り繕った笑みを向けた。

「あたしはママが生きてた時も、自分の責任は自分で取ってきてました。暁のことは、面倒を見るのがママから暁に代わるだけです。あたし、ネットオークションで自分の手作りのティディベアを売ることで、生活できるくらいのお金は稼いでるんです。学校を辞めれば、ティディ作りにかける時間がもっと取れるし、稼ぎも増やせます。ママはお金になるものは何にも遺さなかったけど、幸い借金も無かったから、自分達でやっていくことは出来ると思います。施設の方もあたしに稼ぎがあるのが分かれば暁を奪ったりはしないはずですよ。無駄な食いぶちは増やしたくないでしょうから」

「ネットオークションって、どれくらい稼いでるの？」

「月にもよりますが、だいたい二十万程度は…。数をこなせば、その倍はいけると思います。ずっと貯金してきたので、蓄えも少しはあります」

宗司さんはしばらくあたしを見詰めて、嘆息した。

「君みたいに自立心の旺盛な子はいないよ、ハシミちゃん。感心を通り越して、敬服するよ！でも君のその考えは、君の人生を考えた時に大きなリスクを冒すことになる。学校を辞めなくてはいけないのがいい例だ。君は成績優秀だし、結香の話だと学校生活も楽しんでるようだ。そうだろう？」

あたしは微笑んだまま俯いた。その通りだった。結香と出会って、学校生活が楽しいと思えた。勉強も好きだ。知識を得るのは、あたしにとって喜びだった。

宗司さんはもう一度あたしの手を取って握った。大きくて、温かい手だ。

「君はこれまで、誰かに頼ることが出来なかった。状況がそれを許さなかったからだ。でも、人は支えあって生きるものだ。人を頼るというのは、頼られた方にとっても喜びになるんだ。これを断る前に、支えたいと思っている俺達にとってそれが嬉しいことだって、

ちゃんと理解して欲しいんだ。その上で、よく考えてみて欲しい」

宗司さんは、おばさんそっくりの優しい笑顔を見せた。あたしの頭をばんぼんと撫ぜる。結香にするのと同じ仕草で、家族のようにあたしは戸惑いを隠せなかった。北川家の人達は大好きだ。あんな家族に憧れていた。でも、自分がその中に加わるなんて考えたこともない。手の届かない夢のような存在だ。あたしは北川家の一員になった自分を想像しようとしたが、できなかった。あの大きな温かい家の中にいる、あたしと暁……それはまるで、完璧な風景画にデジタル画像を貼り付けるようなものだ。多分、いくら努力しても、溶け込むことは出来ない。だってあたしはママの子供で、そういう風に育った。それは卑屈になっっているのではなく、ただ事実だ。ママを心から母親だと思えるようになった今、他の家族を羨む気持ちは消えた。北川家の理想を求めるのではなく、あたしはあたしなりの理想を築いていかなくてはいけないのだ。暁と一緒に。

あたしはぎこちなくコーヒーカップを手に取り、一口飲んだ。コーヒーはすっかり冷めてしまっていた。

携帯電話が鳴った。あたしはジーンズのお尻のポケットから引き抜き、開いた。暁を預けている産婦人科からだった。時間を見ると、迎えに行く約束した五時を過ぎている。

「はい、高橋です。すみません！すっかり遅くなって……」

「ああ、高橋さん！良かった！お葬式は無事済んだ？」

「はい、お陰様で。暁をすみませんでした！すぐに迎えに行きますので……」

「ああ、それがね。暁くんのお兄さんだという方がいらして、連れにいらしたのよ。初めて見る方だったし、お預けしていいものか分からなくて、あなたに確認の電話をしたの」

「は！？ウチは兄なんていません。誰が来てるんですか！？」

「松平一馬さんと仰る方よ」

全身の血の気が引いた。絶壁の上に立たされている気がした。「絶対に渡さないで下さい！！」

あたしは叫んで電話を切った。

一馬が暁を奪いに来た！！

憎めばいいと言ったけれど、矛先を暁に向けるとは思わなかった！！  
あたしの異変に気付いた宗司さんが、立ち上がって車の鍵を取った。  
玄関に駆け出すあたしに続きながら質問してきた。

「病院からだろう？何だつて？」

「一馬が来てるんです！暁を奪いに！！」

「嘘だろう！？」

「復讐するつもりなんです」

あたしは唸るように言った。宗司さんは鋭く息を吸い込んだが、  
無言だった。

宗司さんとBMWに乗り込みながら、あたしは込み上げる吐き気を  
必死で押し止めた。

神様、どうか暁を奪わせないで。

一馬を止めて。一馬に、暁を破壊させないで。一馬を愛している  
けど、彼が暁を壊せば、あたしは彼を絶対に許せない。

あたしに一馬を憎ませないで。

\*\*\*

新生児室の前に、一馬は立ち塞がるように立っていた。隣には心配  
そうな顔の看護婦さんが付き添っている。一馬は息を切らして駆け  
つけたあたしと宗司さんを、嘲るように見た。その腕に抱かれて  
眠る暁を見つけ、あたしは血が凍るような思いがした。

「男同伴とは恐れ入ったな。もう次の金ずるを見つけた訳か。宗司、  
お前は女の手管に惑わされるような奴だと思わなかったのに」

「そんなじゃないことくらい、お前だって分かってるはずだろう、  
一馬」



宗司さんは腹立たしげに言ったが、あたしは一馬の当てこすりを無視して両手を差し出した。

「弟を渡して。その子には何の責任も無いわ」

一馬はゆっくりと首を傾げ、わざとらしく眉を上げた。

「俺の弟でもある」

「いいえ、その子は……暁はママの子よ。あなたのお父さんの子供とどうして分かるの？」

あたしは唾を飲み込みつつ、用心深く言った。すると一馬は声を上げて笑い出した。それに驚いた暁が、両手足をバタつかせて目覚めた。泣き出すかと思われたが、一馬が危なげない手つきで揺すつたので、小さな溜息を吐いて再び目を閉じた。その仕草は意外なほど優しくて、あたしは返って不安になった。

看護婦さんが代わりうと手を差し出したが、一馬は首を振って断った。あたしは渡して欲しかった。一馬が暁を抱いていると、人質に取られたようで気が気でなかった。

するとあたしの不安を見て取ったのか、一馬が勝ち誇ったように笑った。

「この子が親父の血を引いているかどうかは関係ない。親父はこの子を認知していた。役所に届けを出した後、事故に遭ったんだ。この子にも親父の遺産が相続されることになる。俺はこの子の後見人になった」

「後見人？」

問い質したのは宗司さんだった。一馬はちらりと彼に眼をやり、すぐにあたしに戻した。一瞬苛立たしげな表情になった。宗司さんがこの場にいるのが気に食わないようだ。身内の話になったのに気が引けたのか、看護婦さんはあたしに目配せをしてナースステーションへ戻って行った。

「そう。遺産を相続する以上、この子が成人に達するまで、法的に財産を管理する後見人が必要になる。それが異母兄である、俺だ。同時にこの子の教育は俺に任されることになる」

あたしは鈍器で頭を殴られたような衝撃を受けた。

待つて。嫌だ。どうしてこんなことに！

「冗談じゃないわ！！暁はあたしの弟よ！あなたには絶対に渡さない！！遺産は放棄するわ！」

「それはこの子が決めることだ。だがまだ赤ん坊だ。つまり後見人である、俺が決めることだ。俺の弟は遺産を放棄しないし、俺の管理化で育てる」

「嫌よ！！暁はあたしの弟よ！唯一の肉親なのよ！あたしは絶対に暁から離れないわ！暁を返して！」

あたしは矢も盾も堪らず、一馬に飛び掛った。とにかく暁を取り返さなくてはいけない！だが一馬はあたしからすつと身を引いて攻撃を逃れた。

「危ないな。この子を落としたらどうする」

「いいから暁を返して！この子をあなたの復讐の的になんかさせない！！憎いならあたしを殴ればいいでしょう！？苦しめるのはあたしだけで充分なはずよ！！暁には何の罪も無い！この子は幸せになる権利があるのよ！」

あたしは半狂乱で泣き叫んだ。

ああ、どうして！あの時は一馬を救いたくて、ただそれだけのためにあたしを憎めと言った。けれど、それが暁まで巻き込むことになるなんて考えもなかった！あたしはなんて軽率で、愚かだったのだろう！これではママと同じだ！

泣き崩れるあたしの肩を、宗司さんがそつと抱いた。

「落ち着いて、ハシミちゃん。大丈夫だから。俺がそんなことはさせない」

「へえ？ナイト登場ってわけか？それで？お前に何が出来るんだ、宗司？」

「姉弟は俺の両親の養子に入る予定だ。俺の両親が彼女達の親権を得ることになる。そうすると後見人は必要なくなる。お前が納得するなら、遺産は放棄させよう」

宗司さんが一馬を見据えて言った。一馬の余裕が崩れ、齒軋りの微かな音がした。一呼吸置いた後、一馬は再び微笑んだ。

「いや、その必要はないよ、宗司。俺が弟を養子にしよう。俺は学生だが成人で、親父の会社に籍もある。血の繋がりのない他人の籍に入るより望ましいだろう」

「なあ、何故だ？一馬。何故ここまでしなくてはいけない？お前のお袋さんを追い詰めたのは、お前の親父と彼女の母親だ。ハシミちゃんには何の罪も無いし、ましてや暁くんにあるはずが無いのは、お前にだって分かってるはずだろう？お前が父親の愛人の子供を養子にしたとなれば、お袋さんだって傷付くんじゃないのか？」

宗司さんのやり切れない表情に、一馬が目を逸らした。身動きした暁を抱き直しながら、あやすように歩き回る。

「……お前には分からない、宗司。俺にすら分からないのに」

その眼は様々な感情が交錯して、ひどく空ろだった。

陰鬱な沈黙が降りた。

うろつきまわる一馬の足音だけが響いていた。

あたしは脱力して、何も考えられなかった。暁を失うかもしれない恐怖に、頭が思考を停止してしまった。唯一つ、自分が愚かだということだけが、脳を占領していた。

足音が止んだ。あたしは定まらない目の焦点をぼんやりと一馬に向けた。彼は何かを切望する飢えた眼であたしを見ていた。

何を求めているの？この人は何が欲しいの？

「君は俺に憎めと言った」

一馬は静かに言った。あたしはただ頷いた。

「俺はそうするつもりだ。だが、君が俺からこの子を守りたいというなら、そうすればいい。俺は止めない」

「……どういうこと？」

「俺はこの子の後見人となり、教育を管理する。君はこの子を育てる。俺の傍で。俺の家に住み、俺の指示に従い、逆らわないなら、この子の傍にいさせてやる」

「いい加減にしろ！一馬！！お前の言ってることは無茶苦茶だ！」  
宗司さんが喚いた。

だが一馬はそれを黙殺し、まじろぎもせずにあたしを見た。ひたすら、あたしの答えを持っていた。

あたしの答えは決まっていた。

暁を守る。守り抜いてみせる。

ただそれだけだ。

## 12 破裂

### 12 破裂

あたし達が住んでいた家は、やっぱり松平氏の名義だった。ママが死んだ以上、そこにいる理由はなかったたので、もともとするつもりだった。だから一馬がそのままそこに住むように言った時には驚いた。

「俺のマンションは一人暮らし用だ。俺がここに越してくる方が合理的だ」

一馬は無表情にそう言っただけだった。松平家の本邸に行くことになるのかと考えたこともあったが、よく考えれば、お母さんとあたし達を鉢合わせさせるわけが無い。恐らくお母さんにも周りにも、あたし達のことは内緒なのだろう。

もう一つ驚いたことに、一馬は今まで通りにあたしを高校へ通わせた。昼間はベビー・シッターを雇うと言う。

「でも、学費が払い切れないから……」

あたしが言うと、一馬はイライラして唸るように言った。

「一緒に暮している君がまだ未成年である以上、俺が保護者代わりと見なされる。君が高校を中退してしまうと、俺が世間に非難されるんだ！心配しなくても、ちゃんと返済してもらってから安心しろ！」

一馬に借りを作りたいは無かったが、あまりしつこいと睨から引き離されそうでした。それ以上言えなかった。代わりに担任に事情を話して、奨学金をあたってももらったところ、幾つかの制度があると言われたので、それらの試験を受けた。その全てに合格したので、一番待遇の良さそうな一つを選んで受けることにした。勉強して良かったと思う。

そのことを一馬に報告すると、不愉快そうに顎をしゃくっただけだった。

戦々恐々とした一馬との共同生活は、思ったほど辛くなかった。

松平氏創設のM&Fは世襲制ではないものの、一馬は松平氏の後継者として期待されているらしく、会社につめていることが殆んどだったからだ。二、三日毎に帰って来るが、寝に帰って来ているようなものだ。宗司さんの話だと、大学にも全然顔を出さないらしい。最も、一馬は今までに大方の単位を取ってしまっているらしく、出なくてはいけない授業はあまり無いそうだ。

「まあ、あんな大きな会社で必要とされてるんだ。大学を中退したところでダメージは皆無だよ」

宗司さんはそう言って笑った。一馬に対する確かな友情が垣間見え、あたしのせいで仲違いしてしまっている現状に申し訳無さが広がる。あたしのことがある前には、本当に中が良さそうだったのに……。宗司さんはあくまでニュートラルな人なので、あたしが冷遇されていないが気を配ってくれているものの、一馬に対して友人としての態度を取り戻しているのに、今では一馬の方がすっかり閉ざしてしまっている。

一馬の無愛想さは宗司さんにだけではない。出合った頃の人懐っこい青年はどこかへ行ってしまったようだ。常にイライラしていて、無口で、人を寄せ付けない。ベビーシッターさんが怖がって、雇い主である一馬に直接ではなく、あたしを通して話をしようとする始末だ。

一馬のストレスの原因は、多忙な仕事のせいだけではないだろう。多分、あたしの存在だ。現にあたしが傍に行くと、耐えられないと言わんばかりに席を立つ。話をしようとする、忌々し気な眼で睨みつけてくるくせに、目を合わせると顔を背ける。

あたしに復讐するつもりでこの生活を始めただろうに、逆に自分に打撃を喰らっているのだから、何となく気の毒だ。かと言って、暁から離れる気が無いあたしに出来ることは無い。

意外なことに、一番恐れていた一馬の暁への態度は、とても温かいものだった。

一馬は帰宅すると必ず、真つ先に暁の所へ行き、様子確かめた。起きている時は抱き上げてあやし、眠っている時は優しく柔らかな頬を撫ぜた。その仕草に愛情が無いとは思えず、あたしは困惑を隠せなかった。もしかしたら、一馬は最初から暁に憎悪を向けるつもりは無かったんじゃないだろうか。あくまで兄として、暁の面倒をみるつもりだったんじゃない？そうは思ってみても、これ以上あたしの愚かさで失態を繰り返すことは出来ず、あたしは戸惑いつつも決して一馬を信用しないつもりだった。

暁との生活は順調だと言いたかったが、甘かった。あたしは子育てと言うものをかなりナメてかかっていたのだと言わざるを得ない。まず、赤ん坊である暁には、当然のことながら理屈は通用しない。赤ん坊って、お腹が空いた時とオムツが濡れてる時くらいしか泣かないんだと思つてない？それ完全な勘違いだから。奴らは理由無く泣く。所構わず無く。下手したら生きているって事実に泣いてたりするのもかもしれない。あたしが寝てようがご飯食べてようがトイレつてようが、全くお構い無しということだ！あたしの世界は突如として赤ん坊一色に染め上げられた。半強制的に。これを俗に赤ちゃんナイズと言うらしい。

これで暁があんなに愛らしくなければ、絞め殺していたところだ。暁は本当に可愛い。姉バカだと言うなら言えば？あたしは本気でこの世で一番可愛い赤ちゃんだと思つている。パツチリしたお目めに、ちょこんと乗った鼻。哺乳瓶の乳首を吸うあの口の可愛いことは言うまでもない。すべすべのお尻は頬ずりしたくなるし、ちっちゃいのにちゃんと五本の指があるあんよは、食べちゃいたいくらいだ。眼に映る全てのものに興味深々で、手足をバタバタさせて表現する。赤ん坊の可愛らしさは、防衛本能のなせる業なのだそうだ。可愛らしさで大人の保護欲をくすぐり、守ってもらうことで生き延びる。成程、大いに納得できる。確かにあたしは暁のためなら命を投げ出せると思う。あの愛くるしい生き物は、何を差し置いても保

護してしかるべきだ。

慣れない育児に手古摺りながら、それでも暁はすくすくと成長している。

ある晩、昼寝をし過ぎたのか、暁がなかなか寝付かないので、いっそのこと眠くなるまで遊んでやろうと、リビングのラグにパジャマ姿で二人寝そべっているところに、一馬が帰って来た。四日ぶりだった。

あたしはパツと起き上がった。

「お帰りなさい！」

一馬はこんな時間まで起きていることに驚いたのか、目を瞬いた。それから見たくないものを見てしまったかのように目を背けた。

「…ああ。まだ起きてたのか」

迷惑そうに言われて、分かっているながらもあたしは傷付いた。一馬は帰って来る頻度を減らしているばかりでなく、帰宅してもあたしと顔を合わせないようにしている。一馬との距離は、一緒に暮らす前よりもずっと開いていつている気がした。憎まれているのは分かっているが、こんな風に無視されるのは居た堪れない。

「暁が寝てくれなくて…明日は土曜日だし、疲れるまで遊んでやろうと思って…あたしの部屋よりリビングの方が床暖房効いててあったかいから…その…」

顔を合わせてしまった言い訳をグダグダ述べているのに気付いて、あたしは舌を噛み切りなくなった。小さく舌打ちして口を閉じ、暁を抱いて立ち上がった。早くこの人の目の前から消えるべきだ。

「ごめんなさい。もう部屋に戻るわ」

「ここにいろ！」

鋭く命じられて、あたしはビクリして振り返った。言った本人も驚いているようだった。目を見開いて立ち尽くしている。

「…ここにいろ。部屋は暖まってないんだろ。暁が風邪をひく」

「…ああ」

成程。あたしは言う通りにして、もう一度ラグに座った。敷いて



あつたキルトの上に暁を寝かすと、手足を懸命に動かして喜んだ。背後で一馬がキッチンの方へ行くのを感じたので、ホッとした。

色鮮やかなガラガラを鳴らすと、暁のつぶらな目がそれを追う。おぼつかない動きで手を伸ばし、ガラガラを取ろうとするのが可愛くて、あたしはその遊びを何度も繰り返し返した。不意にコーヒーのいい匂いがして顔を上げると、一馬がマグを両手に持って立っていた。何も言わずにその一つをあたしの近くのローテーブルに置き、自分はソファアに座ってそれを飲んだ。

…あたしに？ってことで、いいんだよね？

「…ありがとう」

あたしはおずおずと礼を言った。熱い液体を暁の上に零さないよう、充分に離れた所までにじり寄って、それを飲んだ。

コーヒーはとても香ばしく、美味しかった。ブラックなのに、ちつとも強く感じない。

「これ、どこの豆？」

あたしが思わず聞くと、一馬は肩を竦めた。

「さあ？君の方が知ってるんじゃないか？キッチンにあつたのを使っただけだから」

「え、じゃあコレ、いつもと同じ豆なの？」

「…何だ？不味かったか？」

あたしはブンブンと首を振った。まさか！

「いつもよりずっと美味しかったから…同じ豆とは思えなかったの」「お世辞を言っても何にも出ないぞ」

一馬はクスッと笑ってまた一口飲んだ。

笑った！

あたしは胸が躍った。一馬の笑顔を久し振りに見た！ずっと不機嫌な一馬は、とても苦しそうで痛々しかった。もっと笑ってくれるなら、何だっとしてあげるのに…。

一馬への愛情で眼が暗みそうになり、慌ててコーヒーに目を戻した。

あたしはやっぱりママの子供だ。馬鹿で愚かでどうしようもない男に恋するあまり、自尊心すら投げ打ってしまっている。一馬はあたしを憎んでいて、見るのも嫌なほどだと分かっているのに、彼の好意が欲しいと思ってしまう。そもそも、同居に同意したのも暁のことは口実で、彼と一緒にいたかっただけかもしれない。憎まれてもいい。彼の姿を見ていられるのなら。

あたしの鉄壁の自尊心はどこへ消えたのだろうか？昔のあたしが聞いたなら、情けなさに涙するだろう。

あたし達は黙々とコーヒーを飲んだ。それしかやることが無かったので、あつという間にカップは空になった。チラリと盗み見ると、一馬のカップも空のようだ。てっきり用事が済んだのでここから去るだろうと思っていたのに、一馬は黙ったままソファに座り続けた。ただそこにいるだけで他人を圧倒してしまう彼のオーラをひしひしと背中に感じ、あたしは緊張に固唾を呑んだ。

「美奈」

名前を呼ばれて仰天した。その名で呼ばれたのは、ママが死んで以来だ。ママが死んでしまって、名前と呼ばれることはもう無いのだと思っていた。そう言えば、あたしの素性を知った時、一馬はあたしを名前で呼んで罵ったんだ。

苦い想いを噛み締めて振り向くと、一馬が苦し気な表情であたしを見詰めていた。何かを訴えるような切羽詰った色があった。

「ここにいてのを後悔してるんじゃないのか？」

あたしは鋭利なナイフで心臓を一突きされたような痛みを覚えた。一馬はあたしを追い出そうとしているの？憎いあたしがここにいてのが耐えられなくて、追い払いたいのだろうか？自分の負けを認めるのが嫌で、あたしの方から降伏を口にさせたいということ？一馬は暁を可愛がっている。無垢な弟から娼婦の娘を切り離したいのかもしれない…。

「……あたしに選択権は無いもの」

あたしは声を絞り出した。喉が震えそうになるのが、たまらなく

嫌だった。

一馬はあたしの言葉に顔を強張らせた。

「俺は強要はしなかったはずだ！君には北川家の養子になるという選択肢もあった」

「でも、それじゃ暁と離れ離れになったわ」

何故今更そのことを蒸し返すのか理由が分からず、あたしは確認するように呟いた。

一馬はいきなり立ち上がってあたしの手首を掴み上げた。

「その通りだ！だが要するに、君は俺を選んだんだ！」

そう吼えたかと思うと、力任せにあたしを抱き寄せてキスをした。唇に歯を立てられ痛みに喘ぐと、その隙間から強引に舌がねじ込まれた。驚く間も無く罰するように攻め立てられ、呼吸すら奪われてあたしは意識が朦朧とした。

「君は俺を選んだ！……俺のものだ！」

激しいキスの合間、唇と唇のほんの数ミリの狭間から、一馬はうわ言のように唸った。これは欲望だ。あたし達の間で最初から存在していた火のような欲望。男として女として、あたし達を否応無く惹き付け合う、強力な磁石のような引力。

あたしは心が半分に引き裂かれた。欲望を喜々として受け入れたがる自分と、それに嫌悪感を示す自分。情熱と自尊心。本能と理性。相反するそれらは、それでいてどちらも確かにあたし自身だ。

一馬の骨ばった大きな手が、あたしの首筋から肩、背中へと這い回り、体重をかけられて押し倒される。あたしの中の半分が、それを押し留めようと手を動かしたが、逆に手首を握られ、あっさりと頭の上に据え付けられた。感じやすい耳の後ろのくぼみにキスをされ、ぞくりとした。熱い疼きが全身を駆け巡る。

「やめて！」

あたしは震える声で言った。

「抗うな！これを……俺達の間にあるものを、否定しようとするな！」

一馬はあたしの肌の上で荒々しく警告し、鎖骨へとキスを移動する。あたしは嚙り泣きを洩らした。その強引さが、あたしを脅かした。

心の奥底にある暗く重い恐怖が頭を擡げた。

あたしと一馬の間にあるもの。それは欲望だ。

あたしは彼を愛しているけど、一馬は違う。あたしを軽蔑し憎んでいるのだ。

駄目だ。このまま欲望に吞まれてしまうのは簡単だけど、あたしはきつと後悔する。ママと同じ道を辿りたくない！

「あたし達の間には何も無いわ！」

体を擦って逃れようとすると、それが返って一馬の怒りを煽った。暴れるあたしを押さえつけるために馬乗りになり、パジャマの胸ぐらを掴んで一気に引き裂いた。布の裂ける音とボタンの弾け飛ぶ衝撃に、あたしは悲鳴を上げた。

「やめて！嫌だ！触らないで！」

「何も無いだって？冗談だろう？君自身がこんなにハッキリと俺の前に差し出しているというのに……」

中指と人差し指で、あたしの喉元から露になった乳房へとなぞる。目の前の一馬の顔は憤怒と欲望でギラギラと険しく、まるで知らない男のようだった。悲鳴が喉の奥で凍りつく。

一馬があたしの顔を覗き込んでせせら笑った。

嘲笑。

「今更何を純情ぶる？娼婦の娘だろう」

吐き気が込み上げた。

これが一馬の復讐なのだ。

あたしを娼婦として扱う。ママのように。

小さなあたしが、深く暗い水底へゆっくりと沈んでいく。纏わりつくような黒い水に頭まで浸され、目を見開いたまま息絶えた。あたしの中で、今、何かが確かに死んだ。

完全に脱力し、あたしはただ人形のように横たわった。力は欠片

も残っていない。壊れた蛇口のように、涙だけが漏れ出ている。涙も、ただの体液に過ぎない。きつと涙腺が壊れただけだ。

一馬があたしの顔を見詰めている。青ざめて、殴られたような洗面だ。あたしをこれだけ打ちのめしたんだから、もつと満足そうな顔をすればいいのに。だってあたしが憎めって言ったんだから。思う存分、完膚なきまで叩きのめしてくれればいい。一馬が満足してくれたら、ここを去ろう。

復讐の的になる心は、全部碎かれてもう残っていないから。

一馬が静かにあたしの上から降りた。あたしを見ようともしせず無言のまま立ち上がり、そのままリビングを出て行った。あたしは身動きもせず横たわったままだった。しばらくして外から車のエンジン音がして、一馬が去ったのを知った。

あたしはのろのろと体を起こし、暁の傍に這いずった。

暁は眠っていた。

あたしはタオルケットをそっとかけてやり、小さな頭を撫でた。それからあのスーツケースを探しに行った。

ボロボロの薄汚れたスーツケース。

ここから飛び出していく時が来たんだ。

## 13 迷路の先

### 13 迷路の先

結局のところ、あたしは結香達を頼るしかなかった。暁を連れて飛び出したところで、未成年のあたしではアパートを借りることも出来ない。暁を野ざらしにするわけにはいかない。結香の携帯に連絡すると、彼女はすぐに宗司さんと呼んだ。宗司さんはすぐに駆けつけてくれた。

「とりあえずは、ウチの実家へ行くよ」

あたしと暁を車に乗せると、宗司さんは急いで車を出して家から離れた。

「今一馬に出て来られると、間違いなく殴り合いになる。あいつの顔を見たら殴らずにはいられない。でもそうになると、君達の安全が確保できなくなるからな」

宗司さんは冗談めかしたことを硬い表情で言った。多分冗談ではないのだろう。

あたしは申し訳なく微笑んだ。

長いドライブの間、暁はとてもよく眠った。車の振動は眠りを誘うが、赤ちゃんにとってもそうなのかもしれない。

冬空を背景にした北川邸は、夏に見た時よりも大きく見えた。それでも両手を広げて迎え入れてくれているような温かさはそのままだ。

宗司さんが玄関のベルを押すと、おばさんが飛び出して来た。暁を抱いたあたしを見ると、何も言わずに暁ごと抱き締めてくれた。

「おかえり」

ただ一言、そう言ってくれた。

その一言で、張り詰め通しかったあたしの気が、初めて解けた。

\*\*\*

窓の外は雪景色だ。

あたしは暁を抱き上げて、外の雪を見せた。暁は物珍しげに手を伸ばして窓に触れようとしている。

北川家に来て一月になった。

暁はすすくと大きくなり、数日前に行った三ヶ月健診でも順調な発育だと太鼓判を押された。北川のおばさんもおじさんも暁を孫のように可愛がつてくれ、育児もすぐスムーズにいつている。

学校は休学扱いになっているが、辞めるつもりだ。こんなに休んでは奨学金から外れてしまいうしろ、学費も払えない。おじさんが払ってくれると言ってくれたが、断った。そもそも他県から通うことは出来ないし、暁を放り出すつもりも全く無かった。勉強はどうやっても出来るものだ。今は勉強が暁ほど重要だと思えないし、この先学びたくなれば、高等学校卒業程度認定試験を受けて大学を受験すればいい。幸いあたしには入試に備えたお金を充分に稼ぐ術がある。

おばさん達は養子に入ることを望んでくれているが、あたしはまだ決心がつかずにいた。あと二年もすれば保護者が要らなくなるし、何よりママが作った『高橋』の姓が無くなるのに抵抗があった。そうすることで、あたしがママの存在を全否定してしまうような気がしたのだ。欠点はいっぱいあったけど、ママを愛してる。だから出来ない。

一馬はあたしが飛び出した数日後、宗司さんに連絡を入れてきた。あたしと暁が北川家で保護されていることを確認すると、よろしく頼むと言いついたそうだ。

「正直もつと揉めると思ったんだけどな」

宗司さんは拍子抜けしたようだったが、あたしには不思議ではな

かった。

復讐が終わったのだ。

人を憎み続けるのは、とてもしんどい。あの時あたしを傷つけて、一馬も傷付いていた。あの時の血の気の無い顔を忘れられない。あの人は残酷な人じゃない。怒りと悲しみに捕われて、何かにあたらずくてはいられなかったただけだ。

あたし達は巻き込まただけだ。それでも、こんなに傷を負った。もう充分だ。

一馬が幸せでいてくれるといい。

彼の中の憎しみと怒りが綺麗に消えて、次の一步を踏み出してくれているといい。例えばそれが、あたしを忘れることであっても…。

あたしは苦笑った。

こんなになっても、まだ一馬を愛している。報われない想いを抱き続けるなんて、本気であたしはマゾなのかもしれない。いや、鞭打つのが好きなサドかな？どっちにしても変態まっしぐらだわ。

暁の湿った手があたしの頬に触れた。あーあー、と喃語であたしに話しかけている。

「んん？どうしたの、暁。お姉ちゃんとお話するの？」

あたしが甘い声でゆっくりと語りかけると、暁は真剣そのものの眼でまた喃語を繰り返す。本当にお喋りし合っているようだ。

「ハシミちゃん」

呼びかけられて振り向くと、おばさんが部屋のドアの前に立っていた。

「ハシミちゃんにお客様がいらしとるんやけど…」

おばさんは複雑そうな顔をしていた。

「お客様？誰ですか？」

あたしを訊ねて来る人なんか思いつかない。結香や宗司さんならそう言うはずだ。おばさんは困った顔をして腕を組んだ。

「それが…松平絹代さんなん。一馬くんのお母さん」

「……ハイ？」



素っ頓狂な声が出た。でも無理もないと思う。絶対に在り得ない人だ。頭が真っ白になった。おばさんはすまなそうな顔で暁を抱き取った。

「どうしてもハシミちゃんと話がしたいって仰るんよ。なんか切羽詰った感じで…鬱病患ってらっしゃるって聞いとったし、どうしたもんかと思つてな。でもあれやつたら、無理せんでもええよ。おばさんが上手く断つたから」

「……いえ、大丈夫です。会います」

どんな要件にしろ、わざわざここまであたしに会いに来たんだ。本来なら自分の夫と一緒に死んだ愛人の娘の顔なんか、絶対に見たくないだろうに。憤懣にしろ憐憫にしろ、よっぽどの用件があつてのことだろう。考えてみれば、この人こそあたしに憎しみをぶつけていしかるべき人だ。

あたしは覚悟を決めて応接室へ向かった。

北川家の応接室は、もっぱらおじさんの客人向けになっているので、とても重厚な雰囲気だ。男性っぽい作りの家具の中に、ほっそりとした小柄な女の人立っていた。

一馬のお母さんは、華奢で儚げな肌合いの婦人だった。飛び抜けて美しくはないが、整った顔立ちの人だ。こんな繊細な女性からあんな大柄な息子が生まれたなんて、ちょっと信じ難い。

松平夫人はすつと姿勢を正して、真っ直ぐあたしに向き合った。

「高橋美奈さんね」

「…はい」

「わたしは一馬の母です。あなたにお話があつて来ました。…少し長くなるので、良かったらかけてもらつてもいいかしら…?」

彼女が『松平幸助の妻』ではなく、『一馬の母』と自己紹介したことに多少驚きつつ、あたしは頷いて向い合せにソファに座った。「何から話していいのか…その、あなたはわたしの状態を一馬から聞いているかしら?」

「…ええと…はい。その、私の母のせいで、鬱病を患っていらつし

やってて…」

「夫とそっくりな息子の姿を見るのも耐えられない状態だと？」

彼女が後を引き取って苦く笑った。悲しそうな微笑だ。あたしは居た堪れず俯いた。

「そう。確かに鬱病を患っているわ。今日みたいに調子のいい日もあれば、ベッドから起き上がれないほどの日もある。…でも、それはあなたのお母様のせいじゃないの」

あたしはビツクリして顔を上げた。彼女は苦悶を浮かべて折れそうに見えた。

「…わたしにとって、これを誰かに打ち明けるのは本当に辛いことなの。誰にも言わずに秘めておくつもりだった。でもそのせいで、息子が破滅しようとしているのを見ていられなくて…！」

「一馬が破滅？　どういうことなんですか？」

「ああ、一馬は希望を失って自暴自棄になっっているのよ…。あんなあの子は見たことがないの。私のせいだわ！…もう何から説明すればいいか！」

彼女がおろおろとせわしなく視線を動かしてソファから立ち上がりかけるので、あたしは彼女の側らに移動して、そつと肩を抱くようにして止めた。パニックを起こしかけているんだろう。病氣のことを知らなくても、この人の神経が細いのは見ただけでわかる。

「落ち着いてください。大丈夫です。無理なさは無いですよ」

「いいえ、いいえ。あの子をあのままにしておくことなんか出来ない。あの子には何の罪も無い。全てはわたしの過ちから始まったことよ。……わたしと松平の結婚は政略的なものでした。わたしの家は地方の世襲制の信託銀行で、大地主の松平家との結婚は、お互いが小さい頃から決められていたの。けれどわたしには周囲に内緒にしていた恋人が居て…とても愛し合っていた。でも親に逆らうなんて出来なかった。なのに彼と別れることも出来なくて…結婚後も関係は続いていた。誰にも気付かれなかったわ。とっても慎重にして

いたし、主人は仕事に全精力を傾けていたから、私のことなんて眼中に無かったの」

早口で次々に繰り出される言葉は、彼女の中に溜まっていた膿のようだった。痛みを抱えながら吐き出している。あたしはその衝撃的な内容にも、彼女の悲痛な様子にも、呆然として聞き入った。

「子供を身籠った時も、主人は疑わなかったわ」

「え……」

それってつまり……。

「そう。一馬は松平の子じゃないの」

彼女は下を見たまま震えていた。あたしは言葉が出てこなかった。だって何を言えればいい？こんなことに正しい対応できるほど、あたしの人生のスキルは高くない。

「一馬が生まれて、問題が起こったわ。わたしと松平はO型なのに、あの子はB型だったの。わたしは困って、自分の血液型をB型だと偽ったの。主人はそれも疑わなかった。あの子は主人にそっくりだったから」

あたしは頭が混乱した。意味が良く分からない。

「……待ってください。一馬は松平氏の子供じゃないんですよね？何故似ることができるんですか？」

彼女は静かに頭を振った。

「一馬の父親は、松平の弟なの。あの兄弟は双子といってもいいほどそっくりなの。わたしの浮気が誰にも気付かれなかったのはどうしてだと思う？一つ屋根の下に居て、それだけ共に過ごしても何ら関係を疑われない立場だったからよ……」

彼女は自嘲気味な笑いを洩らした。涙を零しながらの皮肉な笑みが、こんなにもか細気に見えるものとは知らなかった。彼女は泣きながら話を続けた。その必死な姿には、何が何でも話し切ろうとする決意が見えた。

「秘密を抱えながらも何とかやって来た生活が壊れてしまったのは、三年前よ。わたしが急性虫垂炎で手術しなくてはいけなくなり、わ

たしの本当の血液型が松平にばれてしまったの。松平は激昂したわ。それまで一緒に住んでいたあの人…弟を追いつ出してアメリカへやっってしまった。わたしと一馬のことは、世間体を気にしてそのままにした。勿論夫婦生活は冷え切ったものになってしまったけれど、松平は一馬には何も言わないでいてくれた。多分、甥だと分かってても、息子として愛してくれていたのじゃないか。一馬に会社を継がせたいと思っていたみたいだし。松平の血をひく子供はあの子だけなの。松平が愛人を…あなたのお母様と付き合うようになったのは、当然のことだと思っています。それで松平が幸せでいてくれればいいと本当に思っていたのよ。何よりわたしが愛しているのはあの人…栄助だけだったから」

「それなら何故…」

「わたしが鬱病になったか？……それは、あの人アメリカで独りで亡くなってしまったからよ。末期の膵臓癌だったの。発見してから二ヶ月持たなかったそうよ。彼はそのことを誰にも言わなかった。あの人死んでしまったなんて今でも信じられない…死ぬと分かっていたら、どんなことをしても傍にいたのに！あの人を孤独なまま死なせてしまった！わたしに勇気がないばかりに、あの人的人生を壊してしまったのよ…！一馬に『お父さん』と呼ばれたいと言っていたわ。死ぬまで傍を離れないと誓ってくれた…それなのに…！」

彼女は咽び泣いた。その細い体をくの字に折り曲げて、痛みを堪えるかのように自分を抱き締めて…。あたしは何も出来なかった。ただ泣くことしか。あたし自身の心もパニックを起こしていて、これが現実だと思えない。

ママの最後の恋は、誠実なものだったのだろうか？ママと松平さんは、お互いに愛し合っていたのだろうか？

そうだとい。暁が正しい愛の結晶であればいい。

「それからあの子を見ることが出来なくなってしまった。栄助と瓜二つのあの子を見ると、罪悪感で胸が張り裂けそうになって…それ

で一馬は家を出たわ。それをあの子が松平の浮気が原因だと思ってしまうなんて、わたしには考える余裕がなかったの」

彼女は泣きじやくりながら、涙で濡れた手であたしの両手を握った。あたしは慰めたい気持ちでそれを握り返した。

「先週あの子がわたしの所に来たの。…拒絶して以来初めてだった。わたしはビックリしたわ。あの子があまりにも面変わりしていて、別人のようだったから……やつれ切って、打ちひしがれていたわ」

「何故……！」

あたしは思わず口走っていた。そんな一馬を想像するだけで辛い。一馬の復讐は終わらなかったのだろうか？一馬はまだ救われていないのだろうか？

ああ、一馬を抱き締めてあげたい。

もう傷付かなくていいのだと言って安心させてやりたい。

「一馬はもう充分傷付きました。もう幸せになつていいのに……」

あたしは祈るように言った。

すると彼女が顔を上げて、戸惑うほどじっとあたしの顔を見詰めた。

「あの子が好きなの？」

あたしは息を飲んだ。

ずばり聞かれてひどくうろたえた。だって一馬のお母さんで、しかもママの愛人の妻だ。そんな暴露をする相手としては不適切この上ない。

でも彼女の告白を考えて、正直に答えてもいいのかもしれないと思った。あたしはごくりと唾を飲んでから答えた。

「はい」

「あの子があんなに馬鹿なことをしたのに？間違った相手を憎んで的外れな復讐をしたのに？」

あたしが戸惑って彼女を見ると、すまなそうに微笑んだ。

「知っているの。あの子が全部打ち明けたから。わたしは仰天して本当のことを話したの。わたしの罪を告白するのはとても辛かった

けど、あの子の憔悴した様子は見ていらなかった。今すぐあなたに謝って許してもらえと。償いをしろと言ったの。あの子は傲慢な所があるけど、根は真っ直ぐでねじくれたことを許せない性質なの。それなのに、あの子らしからぬ暴拳を犯してしまった。それがあの子を参らせているんだと思ったから……。けれど真実を告げると、あの子は更に打ちのめされてしまった。罪悪感と自己嫌悪で悶絶しそうな勢いだったわ。わたしはあなたに謝りに行くように言ったら、あの子は出来ないと言った。あなたにあまりに酷いことをしてしまい、合わせる顔がない。きつとあなたは自分の顔を見たくも無いはずだって……。それで、この手紙をあなたに渡して欲しいと」

彼女は小さなバッグの中から白い封筒を取り出した。それをあたしの掌に乗せ、上に自分の手を重ねた。

「あの子を許してやって欲しいの。そして出来れば……会ってやって欲しい」

「手紙は受け取りました。彼に伝えてください。許すつて。あたしはあなたを恨んでないし、あなたの幸せを祈っているつて」

「……つまり、会う気は無いと？」

あたしが頷くと、彼女は明らかに落胆した。

「あたし達は、不幸の連鎖の上に関係を築いてしまいました。その土台は崩せません。会えばきつと不幸を重ねることになります。お互いに関わり合わないのが一番いいんです」

一馬は罪悪感からあたしに許しを請うている。勿論許そう。もともとあたしが彼を救いたくて、自ら断頭台に首を差し出したようなものだ。彼を責めるつもりは無い。

でも、一馬はあたしを愛しているわけではない。あたしは彼を愛していて、彼を想う気持ちが大きいあまり、愛して欲しいと言いかねない。一馬を目の前にして、体がまともな判断をした例がないのだ。一馬を困らせたくはない。

それに正直、もうこれ以上傷付きたくなかった。愛してしまった故に、一馬はあたしに致命傷を負わせる剣を手をしている。その剣を

もう一振りでもされれば、あたしは手もなく果てるだろう。

はは！死を賭けた大勝負に出るほど、あたしはドMじゃないってことなのかな。

「でもあの子はあなた無しに幸せになんかなれっこないわ」

彼女はなおも言い募ったが、あたしは微笑して首を左右に振ると、諦めて手を下ろした。

「一馬に伝えてください。ずっと幸せを祈ってるって。あたしと弟は大丈夫だからって」

最後にそう伝えると、松平夫人は残念そうな顔で去って行った。

## 14 夜明け

### 14 夜明け

あたしは手紙の封を切ることが出来ないでいた。

何の変哲も無い白い封筒。表に、男らしい角張った文字で、『美奈へ』と書かれてある。

一馬の書いた文字を見るのは、これが初めてだと気付いた。一馬のことを知っているようで、殆んど知らない。そう考えると、一馬はまるであたしの想像だった気がした。あの荒削りなハンサムな顔も、彫刻のような身体も、響きのいいバリトンの声も、熱い唇も……全部、あたしの妄想。そう考えた方が楽になれる。初めから居もしない人に焦がれるのなら、自分を笑い飛ばせるから。

でもこの手紙を読んでしまえば、一馬が現実の人だと思わずにはいられない。

手紙は開封しないまま、チェストの抽斗に閉まった。

松平夫人の訪問から一週間後、連休に結香が帰って来た。

「ハシミ！会いたかったで！！暁もちよつと見ん内に大きくなつたなあ！」

結香は来るなりあたしに抱きついた。

久し振りの親友の顔に、あたしは嬉しさが込み上げた。

結香がいなかったら、あたしはどうなっていただろう？あたしと暁がこうしていられるのは、結香と出会えたからだ。

「あたしも！会いたかったよ、結香……」

万感の想いを込めて言うと、結香は照れくさそうにデコピンをしてくれた。

「何やの、気持ち悪い。あんたが素直やと裏に何があるか疑ってまうやろ」

「失礼だね！あたしはそんなに捻くれてません」



「…オイオイ、本気で言つとる訳じゃなからう？ミス・ヘそ曲がり？」

「至極本気ですよ、ミスター・傍若無人」

「誰がミスターや！」

「あつ違つた！オスル様だわ！」

軽口を叩き合つて笑うと、学校生活が懐かしくなった。ママも松平さんの関係なく、あたしが無邪気にあたしになれたのは、あの場所が初めてだ。考えてみればあの学校では楽しいことばかりだった。その晩あたし達はお互いにあつたことを夜遅くまで語り合った。

手紙のことに触れると、結香は眉根を寄せた。

「なんで読まへんの？もしかしたら、何か重要なことが書いてあるかもしれへんやん」

「それはそうなんだけど、やっと落ち着いてきたのに、また乱されそうで…」

「何を？この状況を、なんて戯言は聞かへんで。この騒動はもう終盤や。これから荒立つことはあり得へん」

あたしの気持ちを。

そう言いたかったが、黙っていた。まだ一馬を愛しているなんて、自分でさえ愚かだと思っているのに。

「怖いんか？読むのが」

あたしは笑つて誤魔化した。結香は溜息を吐いた。

「手紙は噛み付かへんよ、ハシミ。松平夫人の話なら、一馬は謝罪を書いとるはずや。あんたは受け止めた方がええ」

「受け止めてるよ！」

「じゃあ何で読めへんのや！」

あたしは答えられず、立ち上がった。結香の視線に曝されるのが耐えられなかった。

「罪悪感からだけの謝罪を受け止めたくないんやろ？それを受け止めてしまつて、一馬との縁が完全に切れてしまうのが怖いんや！」

「違う！」

叫んだが、臍を噛んだ。否定するのが早過ぎた。これではまるで認めているようなものだ。

結香は正しい。あたしは一馬との接点が無くなってしまうのが怖いんだ。

「なあ、あんたはこのままじゃ先に進めへんよ」

これも結香が正しい。

あたしは先に進まなきゃいけない。臆病に逃げているだけでは、何の解決にもならない。

あたしは踵を返してチェストへ向かった。抽斗を開けて手紙を取り出したペーパーナイフで封を切り、便箋を取り出した。そのまま立って便箋を広げ始めると、結香が静かに寄り添って、あたしを椅子に座らせた。それからドレスサーの前の椅子を引き摺ってくると、隣に据えて腰掛けた。

あたしは彼女に頷いて、改めて便箋を広げ直す。

便箋には、例の角張った文字がぎっしりと並んでいた。

『美奈へ』

君がこの手紙を読む時には、母が真実の全てを話し終えた後だと思っ。

本当にすまなかった。

謝っても謝り足りない。

罪の無い君を憎しみの対象にしたのは、俺が弱く、全くの愚か者だったからだ。許される行為じゃなかった。どんな理由があれ、君を傷つける権利など俺にはなかったのに。

俺にとって父の不倫は衝撃的だった。それまで父は仕事が一番ではあっても、母を蔑ろにしたことはなかったし、円満で幸せな家庭だったからだ。理由を知った今なら理解も出来るが、その時の俺にとって、父の不倫は母への裏切りに他ならなかった。俺は怒り狂って父を詰ったが、父は全く意に介さなかった。それで怒りの矛先は

全て不倫相手である君のお母さんに向かってしまった。俺は全ての原因を彼女に押し付け、彼女を性悪な悪女だと思い込んだ。母が病気を患い俺を拒絶した時、その悲しみは憎悪に変わって真っ直ぐに父の愛人に向かった。俺は興信所に依頼し、彼女を調べさせた。何としてでも彼女を追い払うつもりだった。その矢先、君に出会ったんだ。

君を娼婦の子と言ったのは、本気じゃない。あの時は誰かを傷付けたい衝動に駆られて、どうかしていた。君をそんな風に見たことは一度も無い。

最初に君を見てもお母さんを思い出しもしなかったのは、君の醸し出す雰囲気彼女とは全く異なっていたからだ。容姿がよく似ていても、君は聖母のようだった。いつでも毅然と前を見て、見ているものが跪きたくなるほど清廉だった。だからこそ、俺は一目見た時から君に惹かれた。君をどうしても手に入れたくなった。そして病院で君にキスした時は、天にも昇る気持ちだった。

そのすぐ後、君が父の愛人の娘だと分かって、俺は裏切られたと感じた。君にとっては理不尽な話だと思うが、その時の俺にはそうとしか感じられなかった。ずっと切望していた君をやっと手に入れた喜びで有頂天になっていた時だったから、その反動は凄まじかった。苦勞して天国の扉を開いたら、地獄があつたみたいだった。傷付き、その痛みで理性を失ってしまった。

君と別れた後、君は母親と同じあばずれで、すぐに忘れ去るべきだといくら自分に言い聞かせても、そうすることが出来なかった。気が付くと君を思い、君に焦がれ、夢にまで君を見る自分に腹が立って仕方なかった。それでも、君に会いに行きたくなるのを堪えるだけの分別は残っていた。

ついにそれが消え失せたのは、父が死んだ時だった。しかも憎むべき愛人と共に。憎むべき人間をいつぱんに喪って、俺の理性は吹っ飛んでしまった。茫然自失の中、母の参加しない葬式を辛うじて終え、父を埋葬したらもう限界だった。どうしても君に会わずにい

られなかった。理由なんかどうでも良かった。ただ君に会って、君に触れたかった。だが実際に君に会い触れた途端、君を望む自分が一気に解き放たれて逆に怖くなった。君にのめり込んでいく自分を止められなくなるのが分かったからだ。その時、君が言ったんだ。「あたしを憎めばいい」と。

君の言葉は、まさに一縷の希望の光だった。俺の中の不健全な君への執着に、理想的な居場所を与えることが出来たからだ。君への妄執が憎しみゆえなら真つ当で、俺は堂々と君に近づける。俺はそれに飛びついた。

弁護士から父と君のお母さんとの間に弟が生まれ、その子に遺産が遺されたのを知らされると、俺はそれを利用しようと思った。弟を引き取ることで、君を丸ごと手に入れるつもりだった。それで身寄りのなくなった君達を守ってやれるとも思い、どこかでホッとしている自分もあった。

産婦人科に現れた君が宗司と一緒にいたのを見て、俺は嫉妬した。宗司が悪党の俺から君を護る英雄役をやっているのに、どうしようもなく腹が立った。しかも宗司が君達を養子にすると言い出して、焦りもした。それで弟を盾に君を脅した。君を宗司に奪われるわけにはいかなかった。

ところが、真つ青な顔で脅しに屈した君を見て、激しく胸が痛んだ。全く馬鹿げているが、脅したくせに、君が脅されて仕方なく俺の傍にいと決めたことに、俺は傷付いたんだ。君に望んで俺の傍にいて欲しかった。

その時、俺は気付いたんだ。

俺は君を愛していて、君から愛されたいんだと。

愕然としたよ。それまでに俺が君にしたことを考えると、嫌われこそすれ、愛されるはずが無いんだから。母のことを考えて、自分たちの関係の不毛さも落胆の一因だった。祝福される関係ではなかったから。

その時には、君があばずれなんかじゃなく、俺が最初に惹かれたそ

のままの清純な女性だと分かっていた。君は俺に嘘をついたことはなかったし、金に執着したことも無かった。何より、弟を守ろうとする態度は母狼のように勇敢で誠実だった。……いや、本当は最初から分かっていたんだ。俺が自分の弱さを許し、憎しみに駆られて、眼に映っている真実を捻じ曲げていただけだ。

君との同居生活は地獄だった。君を護り、できる限り幸せにしたいと努力しても、君は俺の力を借りないよう距離を保ち続けた。食費を受け取らず、学費まで奨学金を受けたと言われた時は、俺は必要ないと宣言された気がして落ち込んだほどだ。しかも俺が卑劣な方法を取ったにも拘らず、君は常に誠実で真摯だった。自分がどうしようもない悪党に思えてならなかったよ。それなのに、君に触れたくて、君を自分のものにしたくて堪らないんだ。そんな権利は無い、君が心を開いてくれるの待つんだ、と必死で我慢した。気が狂いそうだった。それで君を俺から守るために、仕事に没頭した。気を紛らわすことが出来るし、それを理由に帰宅する回数も減らせたから。あの最後の晩、くたくたで帰ってみると、思いもかけず君がまだ起きていた。君は俺を見て少しはにこやかに微笑んだ。俺に対して何の邪気も無く、嬉しそうですらあった。久し振りにまともに顔を見て、俺が吹っ飛ぶのが分かった。君に焦がれ過ぎて、身体も精神も限界に達していて、これ以上は何も抑えられないと気付いたんだ。

他愛の無い会話をしながら、思う存分君を見て楽しんだ。君は美しく優しく、俺の淹れたコーヒーを美味しいと可愛らしく笑った。出合った頃に戻った気がして、俺はつい「ここに居るのを後悔しているんじゃないか」と質問した。ずっと心に圧し掛かっていた、君に強要してしまったことへの不安だった。

後悔していない、俺と一緒に居るのを望んでいると言って欲しかった。だが君は目を逸らして「選択肢はない」と答えた。俺はへこむあまり逆上してしまった。無理矢理君を抱き寄せ、キスをした。君の身体は僕に反応を返しているのに、君が拒もうとするのにも怒りを煽られた。限界を超えて、もうどうでもいいと投げやりな気持ち

もあつた。そうして君を大人しくさせて自分のものにする為に、酷い言葉を投げつけた。

あの時の君の顔が忘れられない。表情を喪つて、魂の無い人形のようになつていった。光りを失くした空ろな眼から、涙がひたすら零れ落ちるのを見て、自分が何をしたのかを悟つた。自分を蹴り上げたくなつた。

本当にすまなかつた。君を傷付けたかつたわけじゃないんだ。

何を言つても言い訳にしかないのは分かつているが、これだけは分かつて欲しい。もうこの先、俺は君を傷つけることは永遠にしないと誓う。他の誰にも、君を傷つけさせはしない。君が望むなら、もう二度と君の前に現れない。

暁の遺産の件は、悪いようにはしない。彼の為に出来るだけのことをする約束する。

美奈、どうか幸せになつて欲しい。その為ならどんな事だつてするよ。俺にできることがあるなら知らせてくれ。君の幸せだけを祈っている。

## 一馬

手紙を読み終えた時、あたしは涙が止まらなかつた。全身が戦慄き、どうしていいのか、自分がどうしたいのかも分からなかつた。感情の坩堝に投げ込まれ、息が出来ないほどだった。

結香があたしの背中を撫ぜた。

「どうしたい？ハシミ」

あたしは小さく首を振つた。

「分からない……けど」

「けど？」

「……一馬に会いたい」

ああ、一馬に会いたい。

会つて抱き締めてキスをしたい。愛してると言いたい。ただ、あの人に会いたい。

「一馬に会いたい」

あたしは憑かれたように繰り返した。

結香はくぐもった笑い声を上げた。

「ようやくその台詞が出たな。奴さん、何時間もハムスターみたいにオロオロし通しやつたで」

結香が顎でドアを示した時、かちやりとドアが開く音がした。

ドアの向こうに、不安気な顔で一馬が立っていた。

あたしは駆け出してその胸の中に飛び込んだ。一馬は物凄い力であたしを抱き締めた。もう二度と離さないと言わんばかりに。それは命綱を掴むようで、痛みを感じるくらいだったが、それすらあたしは嬉しかった。

「君がいないと生きていけない」

一馬が押し殺した声で呟いた。響きのいいはずのバリトンとは、擦れ切ってしまったている。あたしは一馬の懐かしい匂いに、嬉しくて嬉しくて、ただうつとりと硬い胸にもたれた。

「すまなかった、美奈…本当に」

なおも謝ろうとする一馬の唇にそっと指を置いて遮った。

「いいの、もう終わったのよ。好きよ、一馬。大好き。ずっと傍にいて。それがあたしの幸せだから」

一馬はあたしの指を取って、その一本一本に口づけ、それから唇を重ねた。それはお互いを確かめ合うような、ゆっくりと柔らかなキスだった。

「ずっと傍にいます。出て行けと言われても、もう無理だ」

半ば脅すように宣言するのが可笑しくて、あたしは笑った。

ああ、この呆れるくらい傲慢な男を愛してる。

「愛してる。あなたがいないと死んでるようなものだった」

「俺もだ。愛してる」

ようやくこうしていられる幸せを噛み締めながら、再び唇を合わせると、いきなり冷たい空気が流れ込んできて頬を打った。

横目で見ると、結香が背中を向けて出窓を全開にしていた。結香

はくるりと振り向いて片眉を上げた。北川兄妹特有の例の仕草だ。

「あーあ、観客がおることを忘れんでもらいたいわ。マジで暑苦しくてかなわん。新鮮な外の冷気でも喰らえ、バカップルが！」

シニカルに言い置いて、結香は部屋を出て行った。ドアを閉める直前にあたしにウインクするのを忘れなかった。

あたし達は抱き合ったままクスクス笑った。一馬が出窓を閉めに行く、何かを見つけて大笑いした。

「あはは！結香ちゃんには適わないな！」

「どうしたの？」

あたしが傍に行くと、一馬は掌を広げて見せた。

掌には『グッドラック！』と書かれた避妊具が乗っていた。あたしは赤面しつつも、吹き出してしまった。

全く！結香らしい！

「それで？ご厚意に感謝してもいいのかな？」

意味有り氣に目配せする一馬を、あたしはほつぺたを抓って牽制した。

「親友の実家でそんなことするつもりはないわ！」

一馬は残念そうに肩を竦めたが、気を悪くした様子は無かった。

「そうだな、ちゃんと結婚してからが筋が通ってる」

「結婚！？」

考えもしなかったことを言われて、あたしは仰天して叫んだ。だが一馬は心外そうに睨みつけてきた。

「ずっと傍にいてというのは嘘だったのか？」

「そんな訳無いでしょ！でも結婚なんて！あたしまだ十六よ」

一馬は「だから？」とでも言うように顎を上げ、あたしの腰を抱いた。

「もう十六だ。結婚できる。つまり……」

「判断力のある年齢だ、って？」

あたしは後を引き取った。

「その通り」



一馬はにんまりと笑って顔を下ろしてくる。

今度のキスはとても激しかった。まるであたしに自分の刻印を捺すかのように、情熱的で不遜なほど所有欲に満ちている。

「それで？」

不意に唇を離して、一馬が言った。あたしはキスの余韻でぼんやりとしていた。

「え？」

「結婚してくれるのか？」

眉を上げて挑戦的な顔で尋ねた。あたしは一瞬ぼかんとして、それから弾けるように笑い出した。

本当に傲慢で、どうしようもなく独占欲の強い男だ！

「どうしてもって言うなら、いいわよ、結婚してあげる！」

一馬はあたしを抱き上げて、顔中にキスの雨を降らせた。幸せではちきれそうだった。

窓の外の夜気が払われて、空に色が灯り始めている。

もうすぐ金色の暁が顔を覗かせ、世界をキラキラに光らせるだろう。

あたしは目を閉じて想像した。  
暗い夜が明ける。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3386w/>

---

夜と朝の狭間で

2011年9月25日03時26分発行